安源寺

中野市安源寺遺跡緊急発掘調査報告

長野県中野市教育委員会

安源寺遺跡の調査に寄せて

今回県道の整備工事にともない、安源寺遺跡の調査が行われ、ここに報告書出版のはこびになったことはよろこばしい。

この調査に当って県土木部の御援助と調査に当った各位のお骨折に対して厚く御礼申しあげたい。

人間の生活の営みはなかなか強靱なものである。現在でもどのような山間僻地でも水のある所には必ず人間が住みついて、そこに生活の営みがある。そして皆同じような顔つきをしていて、同じような生活をしているのが不思議な気がする時さえある。しかし現在のこの同じような顔つきの裏にも、同じような生活のなかにも過去数千年、数万年の天候と自然条件、また他民族または他部落との苦しい戦いと生活を通しての人間性の培かいの歴史が積み重ねられている筈である。

この遺跡を調査することにより、古代先人のこの生活を掘り起して、その喜びと悲しみ、苦しい戦いの姿を呼び起して現在の自分達の立っている場所を確かめたいものである。

御援助いただいた各方面と直接調査にあたられた各位に感謝して序文とする。

昭和42年3月20日

中野市長　丸　山　久　雄

序　　言

自然の恩恵を唯一の生活条件として、自然の偉大な力を畏敬し、適応し、利用する事に努めた我我人類の祖先達は、太陽と水に恵まれた居住地を探し求めた。そして、やがては自然に挑戦しこれを征服しようと努力工夫する歴史的な繰り返しの中から、人類の文化は次第に成長し発展してきた。

しかし、それらの文化財も時の流れと共にいつとはなく地下に埋没し、大地に抱かれて静かな眠りを続け幾星霜、今日に到った。

近代社会の急激な発展によって、地域開発の現実的要求から、心ならずもこれら貴重な遺跡を発掘せざるを得ない場合が次第に多くなった。中野市安源寺遺跡緊急発掘調査もその一つである。同地域は中野市の西端を限る高丘・長丘両丘陵の接点に位し、土地高燥南斜面の日ざし暖かに、眼下には広々とした延徳田圃を一望のもとに収め、往昔遠洞湖として満々たる水を湛えていたであろうことを思えば、実に水陸の恵み豊かに、げに美(うま)し国として最も快適の居住地であった事は想像に難くない。

現に発掘調査の結果、1万年以前の旧石器時代から近世中葉に到るまでの巾広い年代層の遺跡地として、県下にも数少ない貴重な存在である事が如実にこれを立証していることと思う。

今回の遺跡発掘は、県道中野豊野線の拡巾工事の為、同地籍の土地を切り取ったその断面から、数多くの土器、石器と平安時代の竪穴住居址と思われる遺跡を、高社中学校教諭金井汲次氏が発見した事に端を発する。たまたまこの事が新聞紙上に報道され、直接工事の責任者である中野建設事務所にご迷惑、ご心配をおかけする事になったが、結果的にはそれが幸いして県教育委員会の社会教育主事林茂樹先生が現地を視察され、貴重な遺跡であるから発掘調査して資料を保存する必要がある事を確認された。林先生は早速県土木部と連絡をとられ、県の事業として推進すべく設計見積りをされ、種々関係当局の間を奔走され、各方面のご理解を得て、県の委託事業として中野市長と中野建設事務所長との間に契約が成立して、中野市教育委員会がこの発掘調査を実施する事となった次第である。どのような些細な事業であっても、それを完成するまでには準備の段階から実施の過程を経て完成に至るまでには、陰に陽に表に立ち、裏を支える多数の人々の厚意と努力がなければならない。まして斯様な学術的な調査研究に於ては尚更である。本格的な発掘調査にかかるまでの予備調査の段階に於て既に然りである。休日を利用して高社中学校の金井教頭が同校の郷土クラブ員を動員し協力していただいたので本調査への準備は着々整えられ、次第に発掘に対する期待と自信が高まり、この事業の意欲的導火線ともなった。それはちょうど3月下旬の事であった。

その後、この予備調査を基礎資料として調査計画が進められ、調査団の構成もでき地域の方々の理解ある協力によって調査本部を安源寺消防詰所に置く事も認められ、5月27日には本格的調査の第1歩を踏み出す事ができた。

それから15日間、限られた日数の間に、3,500㎡にわたる広大な地域の発掘調査を進めなければならないのであるから、人夫を集めるだけでも容易な事ではなく事務局の職員の苦労は並々な

らぬものがあった。しかしそれにも増して調査団の方々の努力はより一層甚大なもので、晴天の日は連日暑い炎天のもとで、埋蔵物のある地点の地は1枚1枚薄紙をはがすように繊細で根気を必要とする仕事を続けられ、雨の日には本部に籠って土器洗いとそれが復元の仕事に心血を注がれ、少しでも多くその時代の姿を究めようとする学究的意欲には何人も頭のさがる思いであった。なおその上に、夜は宿舎に引き上げても明日の計画の打合せや今日の発掘物の研究討議、整理等に真に昼夜をわかたぬ精進を続けられ、このような努力に支えられてそれぞれのパートによるトレンチの発掘作業も次第に進み、日とともに数多くの遺物を得た。膨大な土器と石器、それに予定しなかった弥生土坑墓24基、中世、近世土葬墓、中世火葬墓等10数基を発掘した。まだ霊気漂うかに思われる人骨の埋葬されたものを発見、今も昔も変らぬ人間終焉のはかなくも貴い姿に接し、思わず襟を正した。僧侶にお願いして亡者の供養冥福を祈る催しを行った事もあった。人骨について、その道の権威信州大学医学部香原志勢助教授の来援を得て貴重な研究資料として今後の解明をまつ事になった。発掘調査の評価、発掘物や遺跡の考察・考証については調査員諸氏の専門的な立場からのご報告をご覧いただきたい。

調査団は学校その他の勤務や職業に従事されて居られる方々でありますので、その後多忙な職務のあい間をみて研究整理され考察を述べられたもので、この大部の報告書は実にこれ等の方々の汗と油の結晶とも申すべく考古学研究に対する旺盛な研究心の賜物と心から敬意を表する次第である。

最後にこの発掘調査のため陰の力として記録にとどめられないが心からなるご協力を賜わった地元の方々、青年団、高社中学郷土クラブ、中野高校歴史研究班、飯山南高校考古クラブ、飯山北高校地歴部、屋代高校地歴部等々数多くの方々に深甚なる感謝を捧げ、多大なる成果についてご報告申し上げる次第です。

昭和42年1月1日

中野市教育委員会教育長

芳　川　　毅

安源寺遺跡調査結果発表にあたって

県道中野豊野線は、国道18号線の開通によって長野方面より中野市を経由し、山ノ内温泉郷および上信越高原国立公園の中心である志賀高原に通ずる重要幹線道路であります。殊に近年は関東、関西方面より貸切バス、自家用車などによる観光客が急増し、近い将来には一日の交通量が 3,000 台になろうと推測されています。そこで本路線の緊急整備が必要となり、昭和40年度から調査段階に入りましたが、ちょうどこの計画路線の中に昔から知られている安源寺遺跡の一部分が含まれている事がわかりました。そこで中野市教育委員会に相談したところ、遺跡は埋蔵されていて始めて価値のあるものであるとの事で、中々納得してもらえませんでしたが、路線選定上どうしてもさける事ができないならば、この際発掘調査をして記録保存したいので協力を願う旨申し入れがありました。私共もこのような重要な遺跡の保存の必要性を深く認識してはおりますが、一方道路整備を急速に促進しなければならない立場として、立地条件から路線変更は難かしい状況にありました。

その後、県および国の関係者に事情を説明した結果、幸い深い理解のもとにこの調査費として50余万円が認められました。そこで市の教育委員会と調査の方法、調査時期等打ち合わせをして、中野市に委託調査をお願いしました。

昭和41年5月から現地調査に入り、資料の収集と調査結果の取りまとめが始められました。この間関係各位の非常な熱意と、たまたま現場視察の折に拝見した遺跡発掘時の慎重なる取り扱い等改めてその重要性を感じ、私共も非常に良い勉強になりました。

そして着手以来関係者の皆様には幾多な困難を克服して、多種多様な貴重なる上古代の土器・石器・墓址・住居址・窯址および人骨等の資料が発掘され、これが完全に整理されてここに発表される段階になりました事は、関係の一人として非常に喜んでいる次第です。本資料が上古代の歴史を記録し、後世のために良き参考となれば、我々一同工事関係者として若干のお手伝いをさせて頂いた成果が現われたものとして嬉しく存じます。

終りに、本調査に協力くださった国、県の方々、また実際に調査にあたられた関係者に深く謝意を表すと共に、深くお礼を申し上げます。

昭和42年3月20日

長野県中野建設事務所長

土　屋　　年

目　　次

序　言 …… 丸山久雄
序　言 …… 芳川　毅
序　言 …… 土屋　年
第1章　環　境 …… 1
　第1節　安源寺遺跡周辺の地形・地質 …… 中村二郎　1
　　安源寺遺跡東部の地質／安源寺遺跡西部の地質／
　　安源寺遺跡周辺の地形
　第2節　安源寺丘陵周辺の遺跡分布 …… 金井汲次　6
　第3節　安源寺遺跡周辺の歴史的背景 …… 金井喜久一郎　10

第2章　調　査 …… 12
　第1節　昭和40年以前の調査 …… 金井汲次　12
　　明治・大正時代の調査／下高井郡誌の調査／
　　「下高井」出版時の調査／戦後の安源寺遺跡調査／
　　「信濃考古綜覧集成」のための調査／安源寺
　　古窯址の調査
　第2節　昭和40年の調査 …… 金井汲次　14
　第3節　昭和41年調査の契機と経過 …… 金井汲次・小野沢捷　17
　　緊急発掘調査の計画／発掘調査設計／調査日誌

第3章　遺跡・遺物 …… 26
　第1節　トレンチの概要 …… 小池正彦・下平秀夫・松沢芳宏・高橋桂　26
　　Aトレンチ／Aトレンチ拡張区／Bトレンチ／Cトレンチ
　　Dトレンチ／Eトレンチ／F・G・Hトレンチ／
　　K・N・Pトレンチ
　第2節　トレンチ内出土遺物 …… 川上元・関孝一・桐原健・下平秀夫　33
　　先土器時代遺物／縄文式時代遺物／弥生式時代遺物／
　　土師器遺物
　第3節　弥生式時代土坑墓の調査 …… 田川幸生・小池正彦・松沢芳宏　38
　　土坑墓の形状　　笹沢浩・高橋桂
　第4節　土坑墓の考察 …… 桐原健　54
　　土坑墓のあり方／土坑墓の様相／土坑墓の編年／
　　土坑墓と集落

第 5 節　土坑墓内出土遺物 …… 桐原　健　65
石器／土製品／土器
第 6 節　安源寺遺跡の既出資料 …… 桐原　健　76
「下高井」記載の弥生式遺物／昭和26年発掘の土坑墓と遺物／
宮裏遺跡／高見沢伴蔵氏所有遺物
第 7 節　窯址の調査 …… 興津正朔・金井汲次　80
発掘調査／窯址の構造／窯址内出土遺物
第 8 節　土師期住居址の調査 …… 下平秀夫　84
発掘の経過／窯址の構造／出土遺物／まとめ
第 9 節　中世・近世墳墓群の調査 …… 興津正朔・関孝一・金井汲次　88
土葬墓／火葬墓／墳墓群出土遺物
第 10 節　墳墓群の考察 …… 林　茂樹　93
第 11 節　土葬・火葬墓出土人骨 …… 香原志勢・中村登流・西沢寿晃　97

第 4 章　結　び …… 金井汲次　98

図　版　目　次

図版第 1　安源寺遺跡周辺（航空写真）
図版第 2　（上）安源寺遺跡遠景
（下）安源寺遺跡よりの眺望
図版第 3　（上）発掘状況
（下）発掘状況
図版第 4　（上）弥生式第 6 号土坑墓
（下）弥生式第 7 号土坑墓
図版第 5　（上）弥生式第 9 号土坑墓
（下）弥生式第 9 号土坑墓遺物出土状態
図版第 6　（上）Ⅲトレンチ発見弥生式土坑墓群
（下）同遺物出土状態

挿　図　目　次

第 1 図　安源寺遺跡周辺の段丘面 …… 4
第 2 図　高丘丘陵周辺の遺跡分布図 …… 7
第 3 図　安源寺遺跡調査地点分布図 …… 15
第 4 図　分布調査出土遺物 …… 15
第 5 図　出土人骨の法要 …… 22
第 6 図　県教育長の視察 …… 22
第 7 図　調査団メンバー …… 26
第 8 図　トレンチ全体図 …… 27
第 9 図　トレンチ内出土先土器時代石器 …… 33
第 10 図　トレンチ内出土縄文遺物 …… 35
第 11 図　トレンチ内出土弥生遺物 …… 37
第 12 図　トレンチ内出土土師器遺物 …… 37
第 13 図　弥生式第1号土坑 …… 38
第 14 図　弥生式第1号土坑 …… 39
第 15 図　弥生式第2号土坑 …… 39
第 16 図　弥生式第3号土坑 …… 40
第 17 図　弥生式第4号土坑 …… 40
第 18 図　弥生式第5号土坑 …… 41
第 19 図　弥生式第6号土坑 …… 41
第 20 図　弥生式第7号土坑 …… 42
第 21 図　弥生式第8号土坑 …… 42
第 22 図　弥生式第8号土坑 …… 42
第 23 図　弥生式第9号土坑 …… 43
第 24 図　弥生式第9号土坑太形蛤刃石斧出土状態 …… 44
第 25 図　弥生式第9号土坑袖珍土器出土状態 …… 44
第 26 図　弥生式第9号土坑々底部 …… 44
第 27 図　弥生式第10号土坑 …… 45
第 28 図　弥生式第12号土坑 …… 46
第 29 図　弥生式第12号土坑 …… 47
第 30 図　弥生式第13号土坑 …… 47
第 31 図　弥生式第14・15・16号土坑 …… 48
第 32 図　弥生式第18～21号土坑 …… 49

第 33 図　弥生式第18～21号土坑の上面土器被覆状態 …… 50
第 34 図　弥生式第22号土坑 …… 51
第 35 図　弥生式第22号土坑上面 …… 52
第 36 図　弥生式第23号土坑 …… 53
第 37 図　弥生式第24号土坑 …… 54
第 38 図　土坑出土石器 …… 65
第 39 図　土坑出土土製品 …… 65
第 40 図　土坑出土弥生式第1類土器 …… 66
第 41 図　土坑出土弥生式第1・2類土器 …… 67
第 42 図　土坑出土弥生式第3類土器 …… 68
第 43 図　土坑出土弥生式第3類土器 …… 69
第 44 図　土坑出土弥生式第3類土器 …… 70
第 45 図　土坑出土弥生式第4類土器 …… 71
第 46 図　安源寺遺跡既出土器・石器 …… 76
第 47 図　昭和26年調査土坑出土土器 …… 77
第 48 図　宮裏遺跡の住居址と遺物 …… 79
第 49 図　高見沢伴蔵氏所蔵土器 …… 80
第 50 図　トンネル式無段登窯 …… 82
第 51 図　トンネル式無段登窯 …… 82
第 52 図　トンネル式無段登窯出土土器 …… 83
第 53 図　土師期住居址竈 …… 85
第 54 図　土師期住居址竈 …… 85
第 55 図　土師期住居址内出土土器 …… 86
第 56 図　第1号土葬墓 …… 89
第 57 図　中世・近世墳墓群全体図 …… 90
第 58 図　第11号火葬墓出土擂鉢 …… 92
第 59 図　第1号土葬墓出土古銭・釘 …… 92
第 60 図　第2号土葬墓出土小柄 …… 93
第 61 図　調査直後の遺跡破壊状況 …… 100

〔表紙題字……中野市長 丸山久雄〕

中野市安源寺遺跡緊急発掘調査報告

中村二郎・金井汲次・金井喜久一郎
小野沢捷・小池正彦・下平秀夫・
松沢芳宏・高橋桂・川上元・関孝一
桐原健・田川幸生・笹沢浩・興津正
朔・林茂樹・香原志勢・中村登流・
西沢寿晃

第 1 章　　環　　境

第 1 節　安源寺遺跡周辺の地形・地質

安源寺遺跡東部の地質

「別所層」：模式地は中野市更科　熱作用をうけて灰色または暗青色を呈する珪質頁岩である。板状に割れやすく、走向N 20～30°E、傾斜15～20°NWで、玢岩に接するところほど、強い変質をうけている。

本地域の別所層は、中野市更科から同高遠にわたって小分布するのみである。したがって明らかな地質構造はつかめない。（この岩体の選入時期については、内村グループ（1957）によって、別所層の堆積末期から青木層の時代と推定されている。）

安源寺遺跡西部の地質

本地域に発達する新生代層の層序は第 1 表のとおりである。

年代	層　　序
現世	沖　積　層
洪積世	扇状地層及び段丘堆積層
	豊　野　層
	屋　敷　層
鮮新世	大　川　層

第一表　安源寺遺跡
西部新生代層序表

「大川層」：模式地は豊田村上今井より赤塩に通ずる道路。

層序：上今井～赤塩間において約 500 m。

本層は主に砂礫と礫岩からなるが、泥岩と白色凝灰岩をはさむのが特徴である。砂岩は細粒～中粒であるが、中粒が最も多く、黄灰色・青灰色・灰白色を呈し、軟弱で凝灰岩質の部分も認める。礫岩は硬砂岩・粘板岩・珪岩・チャートなど、よく円磨された古生層起源の岩石のほか、広く中央隆起帯に基底溶岩として分布する黒色安山岩・玢岩・石英閃緑岩などの細礫～中礫からなるが、まれに人頭大のものから、2 m前後の安山岩の巨礫もみられる。これらは粗粒の砂によって膠着されている。泥岩は下部ほど多くはさまれ、暗灰色・青灰色・淡褐色を呈し、かなり凝灰質の部分もあり、ところによっては軽石粒を散在している。

親川付近では、泥岩中に泥岩～亜炭の薄層がはさまれている。道光寺付近では 2～3 m の厚さの白色の石英安山岩質凝灰岩が、砂岩・泥岩と互層している。この白色凝灰岩はよく北方へ連続して

鍵層となっている。

斉藤他（1963）はこの白色凝灰岩を本層下部の最上部に含め、その上限をもって本層を下部と上部に分けている。したがって、本層は斉藤他のいう大川層の上部層に対比される。本層の一般傾斜は30°内外で、道光寺〜上今井にわたり、1本の背斜構造と1本の向斜構造を認める。

「屋敷層」：模式地は豊田村替佐より古牧にわたる千曲川沿岸

層　序：古牧〜永江間において、約450 m。

本層の下限は替佐断層によって大川層と接している。岩相は、主として大小不規則な安山若塊を含み、無層理の凝灰角礫岩からなるが、凝灰岩・砂岩・礫岩などをはさむ。凝灰角礫岩を構成する角礫は、暗灰色・赤紫色・黄褐色を呈する複輝石安山岩が最も多いが、長柱状の角閃石を含む灰褐色で、粗鬆な安山岩もみられる。古牧付近では、複輝石安山岩の凝灰角礫岩〜火山角礫岩からなるが一部には黒雲母を含む、石英安山岩質の白色〜淡灰色の凝灰岩がはさまれている。

鬼坂の千曲川沿岸の断崖では、高社火砕岩を構成する角礫と全く同質な角礫を認める。このことは、屋敷層の堆積当時から、高社火砕岩の活動が始まっていたことを物語るものである。

はさまれている泥岩や砂岩は一般に凝灰質で、ラミナが発達し、火山岩塊と接するところでは顕著となる。

一般に上部の傾斜は10〜20°にすぎないが、下部になるにつれて傾斜を増し、永江付近での走向と傾斜はN 34° E、30° SWを示している。

「豊野層」：模式地は中野市安源寺の採泥場

層　序：模式地では約30 m

下位の屋敷層に整合に漸移する。下部は淡黄色〜灰褐色で、層理のはっきりしない粘土状の泥岩が優勢であるが、上部は細粒〜中粒の砂岩または、灰白色の凝岩をはさみ、比較的規則正しい層理を示す部分が多くなる。泥岩と砂岩とが縞状の層理を示すところでは層理面にしばしば茶褐色の酸化帯を認める。砂岩の特徴は、水成の黒雲母片を含み、また凝灰層になるところでは、安山岩の亜角礫〜亜円礫を点在している。多量の軽石を混じえた部分は、クロスラミナが著しく発達する。中野市し尿処理場南方では、砂岩・泥岩・凝灰岩〜凝灰角礫岩からなり、この凝灰角礫岩中には、最大50cmの砂岩・泥岩の偽円礫を混在している。

中野市安源寺遺跡の地点では、下部は縞状を呈する泥岩と砂岩で、上部は固結度の低い礫層からなる。この礫層の礫種・粒径・円磨度等の測定（註1）結果は表示したとおりである。（第2表）

本礫層の礫の由来に関しては、安山岩は判定し難く、現在検討中であるが、石英閃緑岩・石英斑岩・基底溶岩等の礫は、その岩質が河東地域に分布する岩体と全く同質である。このことから、本礫層の礫の大部分は河東地域から供給されたものである。

富沢（1963）は、本層中より珪藻化石として次のような化石を報告している。

Melosira granulata (EHR) RALFS　多

Eunotia rupestris W.SM　稀

Cocconeis placentula (EHR) Var euglypta (EHR) CL　稀

Frustulia rhomboides (EHR) de TONI Var a mphipleuroides GRUN　稀

Gomphonema acuminatum (EHR) Var brebissonii (KÜTZ) CL　稀

これらの化石はいずれも淡水性を示している。

一般走向と傾斜は、長丘背斜の東翼の安源寺採泥場で、N30°E、40°S、西翼では中島入口でN40°E、40°Wを示すが、草間地域では不規則にもまれ、ときに70°～80°の急傾斜を認める。

本層は岩相上ならびに地質構造上、斉藤のいう観音山砂シルト岩層(1960)にほぼ対比される。

礫種	
岩質	混合率 %
玢岩	82
石英閃緑岩	3
石英斑岩	2
チャート	3
基底溶岩	5
安山岩	5

粒径	
階級	混合率 %
大礫 64～128 mm	22
中礫 16～64 mm	72
小礫 4～16 mm	6

円磨度	
階級	混合率 %
角礫	5
亜角礫	95
円礫	0

第2表　豊野層上部礫層礫種、粒径、円磨度数値表

本地域の主な褶曲構造としては、1つの背斜構造上ふたつの向斜構造とがある。このほか1、2の小規模な背斜・向斜が存在する。

長丘背斜：この背斜軸は、北端は古牧付近で、千曲川東岸の笠原・大俣をとおり、南端は立ケ花におよぶ。ほぼN30°E方向に走る背斜構造で、長丘丘陵の地質構造を支配している。

上今井向斜：この向斜軸は、千曲川西岸に沿って、長丘背斜軸と並走する向斜構造である。北端は深沢付近から替佐をとおり、南端は上今井におよぶと推定される。本向斜軸は二ツ石付近で後述の替佐断層に切断されている。

片塩向斜：この向斜軸は北端は田麦付近で片塩を通り草間におよぶ。ほぼNE－SW方向に走る向斜構造である。向斜軸の南東翼は片塩では15°内外の緩傾斜であるが、安源寺付近からその度を増し、草間では60°～70°の急傾斜を示す。

本地域には、主な断層として替佐断層がある。このほか長丘丘陵の東縁に沿う草間推定断層がある。

替佐断層：地質構造と推定される断層で、北端は伊予岡から替佐、道光寺、二ツ石におよぶ。ほぼNNE－SSWに走る。斉藤はこの断層の南端を浅野に達するとしている。この断層は西に向ってやや湾曲した形をしている。また断層に接する大川層はしばしば逆転が認められ、西側に分布する同層と比べて著しくもまれている。このような点から斉藤ならびに井上(1961)が指摘しているように西側上りの逆断層と解釈される。

草間断層：斉藤のいう善光寺断層に相当する断層で、次の点から断層が推定される。

① 長丘丘陵の東麓は平滑である。しかも河川による側浸食の形跡は全く認められない。

② 1953年 草間部落の篠井川沿岸で実施された試錐（未公表）の結果によれば、地下120 mに至ってはじめて豊野層が認められている。

この断層の性質に関しては、断層線が西に向って湾曲している。また断層線に近い草間では他の地域に比べて著しくもまれていることなどから、斉藤（1961）が指摘しているように、西側上りの逆断層と推定される。

安源寺遺跡周辺の地形

「夜間瀬川流域」

夜間瀬川流域に発達する地形面は、上段から佐野面、湯田中面の2段に識別できる。佐野面については省略する。（第1図）

湯田中面：模式地は湯田中・安代・渋の旅館がおかれている面である。

この面は湯田中礫層の Fill top（埋積物頂面）にあたるので、Accumulation ter-race （埋積段丘）である。分布は山ノ内町沓野から夜間瀬川に沿ってのび、下流では夜間瀬橋を扇頂とする中野扇状地をつくっている。段丘礫層の厚さは、模式地では10～15 mである。構成する礫は玢岩・志賀火山系の各種の安山岩からなるが、現河床の砂礫と同様に新鮮である。径15 cm～20 cmが多い。

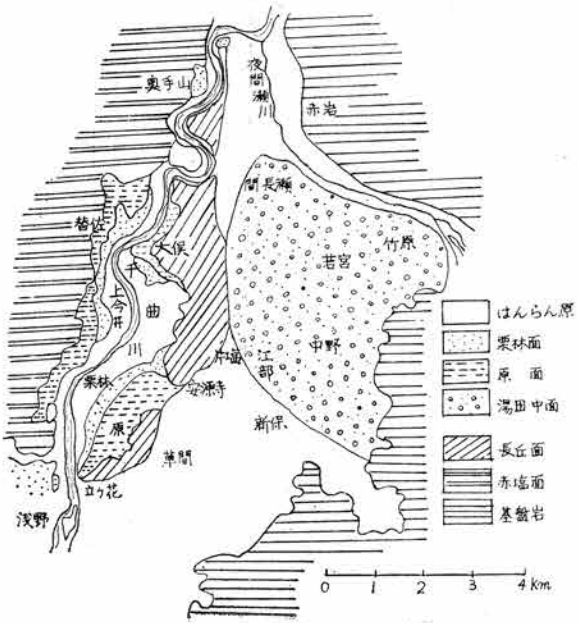
面の河床からの比高は、模式地では12～15 m、山ノ内町塵埃焼却場付近で約7 m、夜間瀬の鉄橋付近で約4 mと漸次下降し、さらに下流の十三崖付近では2～3 mとなって中野扇状地へ連続する。この面上には、ロームは被覆していない。

「長丘丘陵地域」

千曲川流域を模式地として発達する段丘は高位より赤塩面および長丘面・原面・栗林面の3段に識別される。

「赤塩面」：模式地は三水村赤塩である。

基盤の構造を切り、海抜高度は500～600 mを示す平坦面で、かつての千曲川の自由蛇行浸食によって形成された Strath terraca（浸食段丘）である。千曲川水面からの比高は180～280 mで、段丘崖はかなり浸食され、斜面をなしている。この面上にはロームと断定できるロームは殆んど見あたらない。



第1図 安源寺遺跡周辺の段丘面（1：60000）

「長丘面」：千曲川の東側に位置する南北約10Km、東西約500～2000 m のほぼ南北にのびる長丘丘陵で代表される。

基盤の構造を切り、海抜高度は400 m～500 mを示す平坦面で、赤塩面と同様にかつての千曲川の自由蛇行浸食によって形成された Streth terraca である。千曲川水面からの比高は80～180 mで、段丘崖は北部では基盤が堅い火砕岩からなり急崖を示すが、南部では浸食され斜面を形成している。

Vennerの保存は不良で浜津ケ池東方、厚貝西方において点在的に認められるのみである。礫は普通5～15cmの大きさで、円亜角礫の黒色安山岩・玢岩・石英閃緑岩・古生層起源の岩石などからなり、多くの場合内部まで酸化鉄で汚染され風化が進んでいる。

この面上には、ロームと断定できるロームは見あたらない。近年先土器文化に属するナイフブレイドが浜津ケ池ならびに草間地籍で出土しているが、茶褐色～褐色を呈する粘土化した豊野層の二次的堆積物より出土したものである。

長丘面では、笠倉以北においては千曲川をはさんで赤塩面と接し、しかも面の海抜高度がほぼ等しくなること、他から赤塩面に対比される。赤塩面と長丘面の全般的海抜高度の相違に関する原因については、斉藤が指摘しているようにこの面の形成後における善光寺平の陥没運動と相対的に飯綱火山を中心とする曲隆運動による地盤運動によって、高度分布の相違が生じたものと解釈される。

「原面」：模式地は中野市の原である。

この面は赤塩面・長丘面を浸食して厚さ2～6 mの Gravel Venner をのせる Strath terraca である。本面の千曲川水面からの比高は20～25 mである。分布は現千曲川に沿い、立ケ花・原・中新田・鬼坂・上今井・大俣・替佐等の地籍にわたる。

Venner の礫は、安山岩・玢岩・石英閃緑岩・花崗岩・古生層起源の岩石からなり、径10～15 cmが多い。これらの礫は現河床の礫と同様に新鮮である。段丘崖には、ところどころ基盤の屋敷層・豊野層の露出を認める。この面上には、ロームは被覆していない。

「栗林面」：模式地は中野市の栗林である。

この面は原面を浸食して厚さ0.3～4 mの Gravel Venner をのせる Strath terraca である。分布は原面に沿い、南は浅野から北は奥手山にわたる。

Venner の礫は現河床の礫と同質である。面の千曲川水面からの比高は、模式地付近では約12 mである。本面上には、ロームは被覆していない。

（中村二郎）

（註1）

礫の採集と測定方法

1. 礫の採集方法－1 m²の範囲内で大きい方から100個とった。
2. 礫の測定方法
   ① 礫種－酸化して判定し難いものは割って判定した。
   ② 粒径－渡辺：1951 の分類基準による。

③ 円磨度－角礫・亜角礫・円礫の3階級に分類した。

参考文献

1. 八木　貞助（1924）　下高井郡誌地質篇、下高井教育会
2. 本間不二男（1931）　信濃中部地質誌、古今書院
3. 渡辺　景隆（1951）　最新地学(上)、法文社
4. 斉藤　豊（1955）　長野県上水内郡豊野村付近の地質、信大教育の研究論集5号
5. 飯島南海夫（1956）　志賀火山周辺の地質及び地下資源、長野県地質調査報告書、長野県資源調査研究会
6. 内村グループ（1957）　信州別所地域の選入岩類について、フオツサ・マグナ No. 1
7. 八木　貞助・八木　健三（1958）　上水内郡地質誌、上水内教育会
8. 斉藤　豊・水上　寿英（1959）　長野県野尻湖周辺のローム層、地質学雑誌65巻766号
9. 斉藤　豊他（1966）　長野市北東部の新生代層、地球科学第46号
10. 中村　二郎（1960）　長野県飯山市西北方の地質、下水内教育会（とくに常盤・外様平の成因）
11. 小林　国夫（1961）　いわゆる信州ローム、地質学雑誌67巻784号
12. Yutaka Saito（1961）　A Prelinary Note on the Struture System of the Tertiary in the Northern Part of the Fossa. Magna, Shinshu University No. 12
13. 井上　春雄（1961）　フオツサ・マグナ褶曲帯東縁の構造盆地、辻村太郎先生古希記念地理学論文集88～99
14. 飯島南海夫（1962）　フオツサ・マグナ北東部の火山層序学的、並びに岩石学的研究、信大教育学部紀要第12,13号
15. 小林　国夫（1962）　第四紀（上），地学双書
16. 中村　二郎・所　守雄（1962）　毛無火山南部の地質、カセノ平自然調査報告、下高井教育会
17. 神田　五六（1962）　豊田村々誌考古学篇、豊田村
18. 斉藤　豊他（1963）　富倉油田の層序と地質構造、長野県の地学Ⅲ
19. 富沢　恒雄（1963）　長野盆地周縁の地質構造、長野県の地学Ⅲ
20. 中村　二郎（1964）　中野平の水理地質、信大教育学部科学教育研究室報告 No. 1
21. 中村　二郎（1966）　中野扇状地の形成に関する地形地質学的研究、長野県地理学会研究発表要項1966

第2節　安源寺丘陵周辺の遺跡分布

安源寺遺跡の立地している高丘丘陵は、各時代、各種の遺跡が複合、密集している地帯である。丘陵の東南面には、中野平の水田農耕地帯が展開し、通称「延徳田圃」と呼ばれている。延徳田圃を囲繞して数多くの遺跡が点在している。第2図はそれを示したものである。

延徳田圃をめぐって、東には夜間瀬川が志賀高原から土砂を運搬堆積してつくった、広大な中野扇状地、南は三沢山〜山田峠〜雁田山の一連の山々の麓に鋸歯状に発達した小扇状地、西南には松川によって形成された小布施扇状地、西は千曲川の自然堤防をさらに補強した大堤防がある。延徳田圃はそれ等にとり囲まれた後背低湿地で、沖積氾濫原であるため冠水による被害が多いところである。口碑によれば、往古は一大溜水湖で、遠洞湖と呼ばれたと伝えられ、湖にちなんだ伝説が多く残っている。おそらく千曲川、篠井川等の氾濫が頻繁で沼沢地状を呈していたものであろう。

延徳田圃を囲繞する遺跡を、信濃考古綜覧によって次頁に掲げよう。（第3表）

信濃考古綜覧は、昭和31年3月に集大成されたもので、その後この地域における発掘調査は空白となっている。そこで、それ以降のものについて次に年次別に記録する。

1. 間山石動下遺跡　土師中期　中野市間山石動下
〔発掘調査〕　昭和33年10月　桐原　健　〔遺構・遺物〕住居址1、土師一坏、甕、須恵一甕片、灰釉陶器一皿、水瓶片、管状土錘4　鉄器（手斧）、木炭片、灰、敷石

2. 片塩遺跡　土師後期　中野市片塩道下
〔発掘調査〕昭和35年10月　金井汲次　〔遺構遺物〕住居址1、瓦組竈、土師一壺、甕、坏、高坏、須恵一皿、坏、布目瓦（平瓦、丸瓦）

3. 浜津ケ池遺跡　先土器後期　中野市栗林浜津ケ池
〔発掘調査〕昭和36年11月　神田五六　〔遺構・遺物〕ナイフ形石器、彫刻器、掻器、石刃

4. 立ケ花遺跡　先土器後期　中野市立ケ花表
〔発掘調査〕昭和37年1月　金井汲次　〔遺構・遺物〕

第2図　高丘丘陵周辺の遺跡分布図（1：10,000）
×先土器　■縄文　図弥生
○古墳（円墳）　⌂古墳（前方後円墳）
◎安源寺遺跡

① 遺 跡

番号	遺　　跡	地　形	遺　　物
417	七　　瀬	山　腹	(弥)太形蛤刃石斧・器台　(土)前期－坩（３ケ）他破片
422	安　源　寺（宮裏・峰立道・石原・日向・八幡社）	丘　陵	(縄)前期破片・勝坂式(多)・加曾利E式、石鏃・打石斧・磨石斧・石匙・石槍・凹石・磨石・石皿・敲石・玦状耳飾　(弥)栗林式(少)・箱清水式高坏器台、土錘、磨石鏃・打石鏃・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石庖丁・凹石・細形管玉　(土)前期小形坩・後期糸切皿　(須)後期、ガラス玉、窯滓
423	栗　　林（北原・松原・野地）	丘　陵	(弥)荒山式・栗林式・百瀬式　紡錘車（土製）、打石鏃・磨石鏃・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・小形磨石斧・石鋸・石庖丁・石槌、細形管玉・勾玉・ガラス小玉・滑石模造品（住居址あり）
426	立ケ花(表)	低湿地	(土)前期－無文高坏・蓋・その他破片　後期－糸切皿・壺
427	立ケ花（島軒割）	〃	(土)前期－高坏・碗・後期糸切皿　(須)破片
430	草間（土橋）	〃	(弥)箱清水式(多)　(土)前期－高坏・坩・坏・甕・その他破片(多)
431	〃（中組）	台　地	(弥)中期壺、太形蛤刃石斧
432	〃（高屋敷）	〃	(弥)後期高坏、凹石

② 古 墳

番号	部落地字	地形	名　称	外　　形	外部施設	内部構造	遺　　物	備　　考
219	草間 西山 2109	丘上	京　塚	(円) 径30.0 高 2.2				略完存 (文)a14
220	同 同	同	西山古墳	(円) 径11.0 高 1.3			直刀1・土師器・須恵器	墳丘略完存。直刀は墳頂下約30cm (文)a14
221	同 上ノ上 1986のロ	同	御嶽山古墳	(円) 径23.0 高 4.2				略完存 (文)a14
222	草間 東山 2061	丘上	高山第1号墳	(円) 径20.0 高 2.3				略完存 (文)a14
223	同 同	同	同 第2号墳	(円) 径21.0 高 2.5				略完存 (文)a14
224	同 茶臼峯 1031	同	茶臼峯第1号墳	(円) 径 6.6 高 0.4				完存
225	同 同 1029	同	同 第2号墳	(円) 径 5.5 高 0.4				同 現状はやや方形
226	同 同 1026	同	同 第3号墳	(円) 径 5.6 高 0.4				同

番号	部落地字	地形	名　称	外　　形	外部施設	内部構造	建　　物	備　　考
227	同 同	同	同 第4号 墳	(円) 径 5.4 高 0.3				同
228	栗林 西原39	同	栗林第 第1号 墳	(方)? 辺11.0 高 2.0				白山姫墳 完存 (文)a 14・b16
229	同 上原39	同	同 第2号 墳	(円)? 径 8.8 高 0.9				墳丘半壊現在 方形をなすも 円墳ならん (文)a 14・b16
230	安源寺 経塚 894	同	小丸山 古墳	(円)?				墳丘殆んど破 壊さる

③ 窯 址

番号	部落地字	地形	遺　　物	備　　考
49	草間 東池田	丘陵	窯滓・須恵器	(蔵)高丘小学校
50	同 林　畦	同	窯滓・須恵器(糸切底)	(蔵)高丘小学校
51	同 中　原	同	窯滓・須恵器	(蔵)高丘小学校
52	立ケ花 城ノ越	同	窯滓・須恵器	(蔵)高丘小学校
53	同 池　田 池田端 清水山 裏	同	窯址・須恵器・布目瓦・窯滓	平安期と思われる布目瓦あり (蔵)高丘小学校　田川幸生

第3表　高丘丘陵の遺跡一覧表　　(信濃考古綜覧上)

ナイフ形石器、彫刻器、掻器、石刃、握斧

5. 草間窯業遺跡　8～10世紀　中野市草間大久保、茶臼峯

〔発掘調査〕昭和38年12月、昭和39年3月・4月　大川清、金井汲次　〔遺構・遺物〕トンネル式無段登窯1、半地下式無段登窯9、須恵－瓮、壺、蓋、坏、高坏

6. 栗林遺跡(第三次発掘)　弥生中～後期　中野市栗林北原

〔発掘調査〕昭和40年11月　林　茂樹　金井汲次　桐原　健　〔遺構・遺物〕住居址1、土坑墓1、弥生中期－壺、瓮、鉢、蓋、弥生後期－壺、瓮、甑、高坏、鉄器片(釣状)

(金井汲次)

第3節　安源寺遺跡周辺の歴史的背景

長丘丘陵の南端に展開する高丘台地には、安源寺・栗林・牛出・立ケ花・草間等の諸部落が点在しているが、ここには主として安源寺を中心とした歴史的環境について述べることにしよう。

安源寺部落は延徳沖に臨む新田の表安源寺と、北側に拡がる本村の裏安源寺とから成っている。俳人一茶が文化4年(1807)8月6日に今井の舟渡しをわたって、折しも馬市で賑わっている安源寺八幡の例祭にあい「大木牛を隠し、隙ゆく駒の影も宿らぬ当社の森をぬけて、東へ出ると、渺々と開けて沖が見渡され、この国第一の田所というに、去る5月の洪水に堤破れて今は稗に植え替えられた田圃には、祭の太鼓に薄墨色の穂波を見せている」と文化の句帖に記している。

まさにこの台地は千曲川の屈曲滞水による湛水のため、洪水の毎に延徳の大湖を現出しさながら大古の姿を展開してきたが、明治4年に利害関係の最も甚だしい29ケ村の要望で千曲川の流路を変更し、さらに大堤防の完成によって水災を護り今日に至った。

同部落の市村忠兵衛氏の語るところでは、今より7年前、表村の湖縁辺で耕地整理をやった際、埋木のようになった直径1m余の大欅材3本(約30石)が地下より発掘されたが、もとの棧橋材に使用されたものらしく、その地点は湖辺で漂流物の最もよく流れ着く所と思われるとの事である。この湖辺からは弥生式時代や土師時代の遺物も発見され、今回発掘の遺跡は、此処に連なる上の斜面である。

安源寺は、慶長7年(1602)海津城主森忠政の検地の際の石高は、187石5斗1升2合(本田、新田の区別がない)、その後松平忠輝、酒井忠利(預)、福島正則、幕府領を経て飯山城主松平忠倶の延宝7年(1697)の検地によって、本田村高289石3斗5升7合(30町9反2畝11歩)、新田村高318石7斗7升2合(32町9反1畝16歩)となり、延徳沖の開拓が著しく進み特に新田の発展がめざましい。さらに元禄の新田検地を経て、再び幕府領となり、安永の新田検地で両安源寺村高は、610石7斗5升3合(64町2反5畝6歩)となった。本村の北方字「堀脇」には、東西71m南北25.5m、周囲に幅7.8mの堀をめぐらし、さらに高さ約3m、幅4.5mの土居をもつ館の遺構がある。延宝7年検地帳では「堀の上」「屋敷添」にあたる地域である。

現在も土取場として大部かき採り、3方は殆んど埋立てられているが、館の南方に一部面影を偲ぶことの出来る土居が遺っている。土人は今井兼平の館と称しているが、信ずるに当らない。この東方の長丘丘陵上、字「立道」を登り詰めた所に城山がある。東西82m、南北60m、三方に土居を遺し、南と北とに大きな堀切をもつ山城で、土人は高梨氏の幕下某の居城と伝えている。

また館と山城とを結ぶ線上に接して字「清水」に東西27m、南北11mの旧安源寺の寺址がある。附近には五輪塔が散乱し、井戸側の石垣も塔石で組立てられている始末である。これらは中世の面影を偲ばしめるものであるが、さてその由緒に至っては全く明確を欠いている。

小内八幡宮はもと庄内八幡と称し、高梨氏の本拠であった椽原(くぬぎはら)庄(椽原・樟原・樫原・椢原とも書く)といわれた今日の小布施町の六川部落附近に安源寺と共にあって、高梨氏の北進にともなって現地に移されたもののようである。

新潟県高田市の本誓寺にある中世の由緒書を見ると、同寺は中野氏を頼って関東より移って中野に落着いたが、高梨氏に逐われて笠原氏の被護を受け、再びこの地を逐われて牛出に逃がれ、ここで高梨氏の厚い待遇を受けさらに中野に出て、井上に居住したのは本願寺蓮如の頃とし、その後上杉顕定勢が関東より越後に乱入した永正7年(1510)の事件を伝えている。この史実には多少の錯乱はあるにしても高梨氏の牛出に勢を伸したのは政盛以前のことになる。本誓寺を牛出に迎え入れた領主の根拠地は前記の安源寺館でその領主は高梨氏一族と見るのが妥当で、従来の安源寺村史も高梨氏の幕下某としている所以であろう。

高梨氏の以前のこの台地の姿を考えてみると、当地の自然環境からまず牧場を思わせる。この地方の中世の牧場といえば、かつて朝廷牧場であった夜交南条、同北条、金倉井、中野の御牧である。中野御牧については中野郷との関係からすっきりした結論が得られない。すなわち中野郷と中野御牧の領主は同じ藤原氏(藤原秀郷流)でも前者は中野郷西条を根拠地にした中野氏、後者は御牧を中心とした尾藤氏で全く別系に属する。

私はこの御牧の中心をこの高丘の台地にもとめたい。安源寺館の高梨氏の使用する以前は尾藤氏系の牧人の館で、この地に遺っている馬市も遠くこの辺に起因するのではないかと推定しているのである。

永正10年、山之内地方に起った反乱で、余喘を保っていた中野一族も、高梨氏の重臣草間氏の目覚しい機略で壊滅し、すでに六川より移されていた庄内八幡宮も安源寺も、草間氏の被護のもとに栄え、門前聚落の発達を促したことと思われる。

さて、時は移り、武田氏の北信濃侵攻が活発となり、雄族高梨氏の攻略のため、信玄は山之内地方に調略の手を伸し、高梨政頼の中野館も自落に逐い込まれたので、この地方もその混乱に巻き込まれた。

天正10年(1582)6月、織田氏ほろび上杉景勝が北信濃を席捲することになるとかつてこの地方を逐われた旧領主が再び還住したが、高梨頼親(政親の子)もその一人であった。しかし中野の御館には先住者がおって入る事が出来ず、天正10年8月景勝より安源寺を中心にした2.000貫文(5000石)の地をあてがわれることになった。その領地は新井・厚貝・安源寺・七瀬・片塩・草間・栗林・牛出・篠井・大熊・六川・波場・押切等の高丘台地と延徳沖をめぐる諸村であったようである。

頼親は氏神庄内八幡宮を復興し、旧例にならって10貫文の地を寄進し、本拠を旧縁の館に据え、長丘丘陵上の山城を修築し、なお中野御館へ入るの日を待望して景勝に運動を続け、遂に天正17年頃その目的が成就したと思われる。

さらにこの地方には草間原に窯址群があり丘陵上に飯縄堂前方後円墳(七瀬)をはじめ多くの古墳が存在する事に注意を要する。

千曲川の東岸を通る国府、郡家を結んで越後に至る古代の主要交通路が腰巻辺の渡(わたり)を目指して進み、ここを渡って川西通り班尾山腹に来た道に連っていたものであろうことは最近明らかに立証されるに至った。これらの遺跡はこの道につながる文化と見たい。

今日安源寺部落を通る県道豊野中野線と安源寺、今井を結ぶ道路は明治以降のもので、旧道は片塩部落より台地の中央で長峯通りの道と合し、八幡社境内を北側に添って欅並木の参道を進んで立ケ花方面に至り、参道をはずれて両安源寺および草間に通じている。

天明8年(1788)の安源寺村絵図(市村忠兵衛氏所蔵)を見ると、現在の県道の部分は墓地であるが、これに接続した上段は畑地となり、ここが今回発掘された安源寺遺跡である。

(金井喜久一郎)

第 2 章　調　査

第1節　昭和40年以前の調査

明治・大正時代の調査

古来この台地は先史・原史時代の遺物が出土する例が多く、近隣に知られていた。普通作を栽培していた頃は鍬も行き届かず、時に遺物が出土する程度であった。

大正初期に編纂された高丘村誌の第9章沿革には次のような記録がある。

「按古太古石器時代ヨリ本村ニ人類ノ居住セシコトハ処々ニ其当時「アイヌ」民族ノ使用セシ器物即チ石斧、石カンナ、石鏃及土器、其原料品等ノ発掘セシヲ以テ其住居シタルコトヲ推考スルニ足ル、其ノ遺物発見地ハ左ノ如シ

安源寺 ── 石原、宮裏及其の他　栗林 ── 野池、北原、梨子ノ木　草間 ── 中原、大久保、林畦」

大正10年前後から養蚕の普及が顕著となり、桑園化によって30～40cmにまで鍬が及ぶようになって、急激に遺物の出土例が増加した。古老の語るところによると、素焼きの破片は邪魔になって困り、籠に入れて捨てたものである。しかし石器類は珍らしいので保存する者が多かったということであった。

この周辺の家庭には多少はあるが、石斧、石鏃、玉類を所蔵している例が多い。土器類も完形品ないし略々完形品は保存して置く家がある。また、教育資料に資してほしいと多くの出土品は高丘小学校へ寄贈され、現在も陳列ケースの中に展覧されている。

この地域の最も熱心な採集者は高見沢伴蔵・小林浜太郎・永井和作・山崎賢一郎・市村忠兵衛・高見沢忠右衛門・片山梅吉氏等であった。

下高井郡誌の調査(下高井教育会郷土調査部の調査)

大正11年10月15日(1922年)発刊の「下高井郡誌」の歴史の項に、有史以前及び原史時代章中で安源寺遺跡関係の"土器石器等の発掘物"として次の表を掲げている。

名称	発掘地	形状・大きさ・品質	伝説、備考	所有者
土器	安源寺	素焼、球形にして口径4寸、赤色なり		高丘尋常小学校
〃	〃	〃　〃　直径3寸	〃	〃
〃	〃	素焼、破片扁平にて赤色なり		〃

名称	発掘地	形状・大きさ・品質	伝説、備考	所有者
石斧	安源寺	長1尺、巾3寸、厚1寸8分		高丘尋常小学校
〃	〃	長3寸、巾1寸5分、厚6分		〃
〃	〃	形態不完全、合計8個		〃
石鏃	〃	種々の形態あり　合計10個		〃
石鋒	〃	長1尺2寸、巾3寸		市村忠兵衛

この期の下高井地方の石器類の出土地は39ケ所、土器類では14ケ所をあげている。その後下高井教育会は郷土調査部を設け、考古学部門は神田五六氏が中心になって「下高井郡先史時代遺物発見地名並所蔵者表」を作製したのは、昭和14年のことであった。総計121ケ所に及び、高丘丘陵には安源寺、栗林をはじめ6ケ所を掲げている。研究調査が行き届くようになって遺物、遺跡の数は2倍以上に達した。

「下高井」出版時の調査

太平洋戦争がいよいよ激烈をきわめた頃、当地方に疎開された小野勝年氏はこの地域の考古学的調査を続けられた。昭和23年1月上旬から20日に亘って第1次栗林遺跡の発掘を実施され、その調査報告書を中心に下高井地方の考古学的調査の結果を発表された。その中に本遺跡をとりあげて、安源寺遺跡は縄文－弥生－土師に亘る複合一大遺跡であると述べ、それぞれの遺物の実測図投影、写真をもって説明された。それによると

「縄文遺跡 ── 安源寺の遺跡は水運の悪い台地である。ここから石鏃を初め石匙・石斧・石皿・敲石・磨石の類が発見されている。ただし、付近一帯は稍々広範囲にわたる弥生式・土師式遺遺であって、それらが混在し、しかも縄文式土器の採集が殆んど行なわれていないため、その性質の解明は今後に期さなければならない。

弥生時代 ── 安源寺遺跡は小内神社の北側から道路をへだてた南側におよぶ広汎な地域にわたっている。縄文式文化と複合した遺跡であるが、特に北側に濃厚な遺物の散布がみられる。（中略）　遺物は蛤刃、片刃の石斧をはじめとし、石庖丁、有孔磨石鏃、凹石、管状土錘などであり、装身具としては細型管玉、小形勾玉などであり、装身具としては細型管玉、小形勾玉などが数えられる。土器は櫛目、無文、丹塗りが主で、壺、鉢、瓮、高坏などをあげることができる。神社の南側は石器類の伴出少なく、土師器に属するものも見受けられる。ここで採集されたガラス玉は土師器に伴うものであろう。遺物は主として高見沢伴蔵、海谷貫一、神田五六、西沢将滋、檀原長則氏らによって採集されている。」

そして、更に土師・須恵器の出土する主たる遺跡であることを紹介し、遺物の実測図を載せている。

戦後の安源寺遺跡発掘調査

終戦後新学制が施行されて、義務教育においてもクラブ活動が盛んになった。高丘小中学校でも考古クラブが誕生し、田川幸生氏と金井が指導にあたって、丘陵一帯の表採を中心に活動を開始した。遺跡の豊富なこの地では、少し注意するとザルに一杯の土器片が採集された。縄文・弥生・土

師・須恵・布目瓦をはじめ、石器類が続々と資料室に集まった。また草間、立ケ花、栗林に散在する12基の古墳の実測を行ったのもこの頃であった。

時あたかも考古ブームに入らんとする昭和23年秋には長丘古墳、栗林遺跡の発掘調査が行われ、それを手伝った児童生徒の関心と研究心が高まり、クラブ活動も一層活発になって遺物は更に多量に集積した。現在高丘小学校資料室に保存されている遺物はこの頃集められたものが殆んどである。

昭和26年10月5日から11日までの1週間に亘って、高丘小学校が主催して安源寺遺跡（清水595番地　地主山崎正治郎氏）の発掘調査を行った。指導者に神田五六氏を迎え、田川幸生氏が担当して弥生後期住居址1と土器、石器多数を発掘した。調査後概要を孔版印刷で報告したまま久しく時は流れた。かねてからこの遺跡の重要性を強調していた桐原健氏は、田川氏にその発表を慫慂し、雑誌「信濃」14の4（昭和37年4月号）に「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」として報告した。

地主山崎氏が普通畑にりんごを栽植する計画があって、その移植直前に発掘調査が実施され、発掘面積は26 m^2であった。遺物・遺構は地表下20～30 cmの黒色土層の中に検出され、住居址とおぼしきものは長径1.5 m、短径60 cmで、柱穴・焼土等も検出されたが住居址としてのプランは確認することはできなかった。遺物は縄文中期、弥生時代の箱清水式土器であった。その他土師器片、須恵器片が僅少ではあったが出土した。

「信濃考古綜覧集成」のための調査

信濃史料刊行会は原始社会から近世初頭にわたる信濃の史料を集大成するため、昭和26年からその事業に着手した。信濃考古綜覧は大場磐雄博士が監修され、永峯光一氏等が資料採訪に当られた。下高井地区は神田五六氏と金井がこれに同行し、昭和27年7月23日～24日にかけて安源寺・栗林地区の踏査が行なわれた。その後数次にわたって踏査が続けられ、信濃考古綜覧に安源寺の資料が登載された。（第3表）

安源寺古窯址の発掘

昭和29年11月中旬から県道拡張工事が行なわれ、字清水584番地（地主山崎正治郎氏）畑の南側断面から窯址が発見された。当時、工事を請け負われた故永井和作氏から連絡を受けた金井は、11月30日に平野中学校考古クラブの諸君と共に現地に行き窯址を実測した。断面からは須恵器片や焼台に使われた自然石を得た。早速この旨を信濃史料刊行会へ報告したところ、信濃考古綜覧上（P 40遺跡番号422）に登載された。（金井汲次）

第2節　昭和40年の調査

国道18号線の新設によって、これらに連なる中野－豊野線の交通量が急増したために10月20日から拡張工事が進められ、3つの住居址が破壊され、遺物も土砂とともに搬出されてしまった。拡張工事の第一期は終ったが、さらに第二期工事の計画のあることを知り、ここに緊急分布調査を実施した。これが昭和40年度の調査である。

分布調査責任者：中野市教育委員会教育長　芳川　毅

分布調査員：中野市立高社中学校教頭　金井汲次　　中野市教育委員会事務局　小野沢捷

分布調査参加：長野県立須坂高等学校郷土研究班　金井文司ほか2名　　中野市立高社中学校郷土クラブ　滝沢次男ほか7名

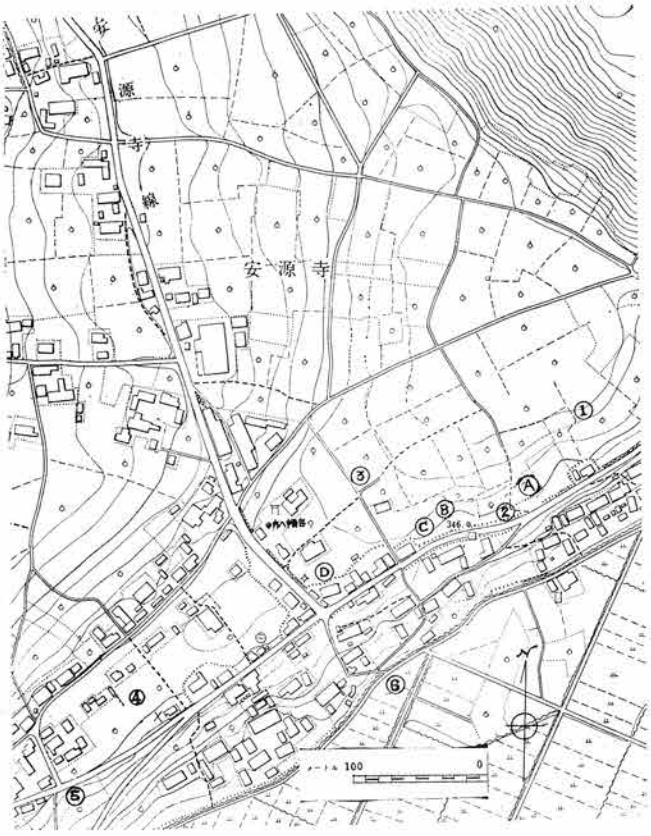
分布調査地地主：中野市安源寺高見沢伴蔵・山崎正治郎

分布調査を実施するにあたっては、永井忠重・高見沢忠男・永井虎夫氏等の物心両面にわたってご高配をたまわった。

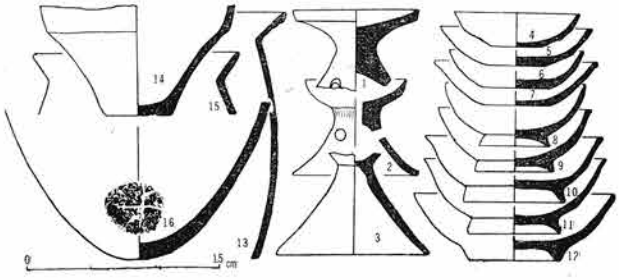
次に調査経過の概要を述べよう。

10月23日(土)　金井が中野から帰宅の車中で、永井虎夫氏から「県道拡張工事のため安源寺の庄内八幡宮南側地籍にブルドーザーが入り、土取りが始まって3日になる。土の中に土器片がたくさんまじっている」という話を聞いた。

10月24日(日)　土取りの土砂がダンプカーで安源寺から草間へ通ずる道路わきにたくさん運ばれているので、金井文司君がそれを見廻ると、弥生後期、土師器片多数を拾得した。土取現場からは高台付杯を1点と土師器破片の多数を得た。金井は10時から2人の生徒をつれて現地を視察した。　1台のブルドーザーがせわしく土取りをし、そのくずされた断面から土師器片を多数採集した。特にB地点には住居址らしく多量の遺物とともに木炭片も出土した。高見沢忠男氏が3年前に温室を造られた折に出土したという椀を見せていただく。地表下30 cm ぐらいのところから出土し、焼石2個も



第3図　安源寺遺跡調査地点分布図（1：6000）
1. 高丘小中学校発掘地（S27年秋）　2. 窯址（トンネル式無段登窯）　3. 弥生（後期）住居址　4. 土師住居址　5. 土師住居址　6. 大けやき出土地　A・B・C 分布調査試掘地　A・B・C・D土師住居址（3戸）



第4図　分布調査出土遺物　（1：6）

出土したと話された。

10月25日(月)　安源寺の事情を長野県教育委員会社会教育課文化財係へ電話報告、中野市教育委員会へも連絡する。文司君は高台付坏の完形品を拾得した。

10月26日(火)　文司君は黒耀石製の先土器時代の遺物1点を採集。ブルドーザーで崩された土の中からで層位は不明であった由。

10月27日(水)　文司君は土師器片多数を採集。

10月28日(木)　県教委指導主事林茂樹氏来市。市教委事務局で懇談の後現地視察され、金井と打合せのため高社中学校へ。「ほぼ等間隔に住居址の断面がきれいに露出している」と話された。

11月 3日(水)　安源寺出土の遺物を水洗いする。午後はその復元を始めたが大部復元ができ好資料である。

11月14日(日)　上田市上小教育会館で長野県考古学会秋季大会が開かれ、役員会の席上で金井から安源寺・栗林遺跡緊急発掘調査の必要を説明する。

11月17日(水)　中野市教委の依頼により金井・小野沢は栗林遺跡・安源寺遺跡を視察。土取場の断面に住居址3ケ所が見事に露出していた。付近の表面採集を行ない土器・石器を得る。永井忠重(市議)から宮裏にある豚小屋建設の折に出土したという弥生後期の壺1点を贈られた。午後川島敏雄氏(湯田中)来校、高台付坏1点を贈られた。草間大曲付近の土中から採集された土師片多数を後日贈られると話された。

11月23日(火)　金井文司君と安源寺遺跡の住居址を実測する。写真撮影。

11月27日(土)　午後より安源寺の県道拡張工事予定地の分布調査を開始、市役所の自動車で滝沢次男、小林勝、山岸善行、田中功、小林賢治、中島庄一、武田晴治君等(高社中郷土クラブ員)参加。A・B・Cトレンチを設定して試掘を始める。(第3図)

トレンチ	地　主	番　地	遺　物	トレンチ規模
Aトレンチ	山　崎　正治郎	597	打石斧、栗林式、土師・須恵器	1 m×4 m
B　〃	高見沢　伴　蔵	619	箱清水式、土師器	1.5 ×3
C　〃	〃	〃	箱清水式(少)	1　×2

午後4時30分作業中止。参観者山崎正治郎氏他多数。

11月28日(日)　分布調査の試掘続行。参加者昨日同様。Cトレンチは深さ90cmに及ぶも遺物なく、黒色土層は1.2 mにも及んでいた。土手斜面で窯址を予想したが収穫はなかった。Bトレンチは北側は10 cm南側は25 cmで粘土層となり、昨日に続いて弥生後期土器少量を得たのみであった。Aトレンチは深さ55cmで粘土層に達し、弥生中・後期土器片・土師片多量を検出した。作業開始9時、終了5時。参観者高見沢信秀氏ほか多数。

12月2.3.4日(木・金・土)　高社中郷土クラブ員によって土器洗い実施。

12月9日(木)　同クラブ員によって復元。

最後に調査の結果を要約してみよう。遺構については高見沢忠夫氏宅前(580番)のりんご園を

切り崩したあとに住居址が3露出した。表土下20 cmの粘土層を約15 cm掘りくぼめてあった。東西に略々4.5 mの等間隔に並び、露出部の長さは1戸およそ4.8～5 mである。遺物（第4図1～13・15・16）はここの部分から出土したものである。いずれも時代の下る土師器である。

なお第4図14は永井忠重氏提供の後期弥生式壺である。（金井汲次）

第3節　昭和41年調査の契機と経過

緊急発掘調査の計画

前述のごとく本遺跡の重要性は各方面から認識され、関係各位の配慮と協力、激励を受けて、いよいよ緊急発掘調査を実施する運びとなった。

林顧問、芳川、金井、小野沢は現地の調査を数次にわたって綿密に行い、次に示す「発掘調査要項」を作成した。これ等を印刷に付し、官公庁をはじめ、発掘調査担当者に配布して、調査の完璧を期すことにつとめた。

発掘調査設計

(1)　発掘調査場所

主要地方道中野豊野線中野市安源寺地籍計画平面図（縮尺$\frac{1}{1,000}$）に示された該道路用地内のCM 14600 地点からCM 16400 地点に至る距離184 m巾員平均17 m（総面積3128 m²）の付替道路用地内である。

(2)　文化財名

安源寺遺跡（県台帳登録番号第6558号）埋蔵文化財　主として弥生式、土師式竪穴住居址および窯跡

(3)　文化財の状況

埋蔵文化財の包蔵範囲は南北約300 m、東西約150 mにわたり、その分布密度は濃密である。該用地内の包含状態は現地表から深さ25 cm ないし 100 cmにかけて存在し、五基以上の住居址を含む遺構の埋存が予想される。地表の現状は畑地として耕作に利用されている。

(4)　発掘調査の目的および概要

長野盆地内において著名な大遺跡である本地籍は、昭和41年度当初における中野建設事務所施工による主要道路付替工事用地として開発必須の重要な地とされている。よって施工前に学術的な発掘調査を実施し記録保存措置を行なうことにより道路開発と文化財保護の円滑な推進を図ることを目的とする。調査の概要は、発掘面積3128 m²を調査対象とし調査員を含む作業員延288人による発掘調査（発掘面積）を実施する。所要期日は6日間を最低必要日数とする。

(5)　発掘面積：該用地内　837 m²

(6) 調査日程

月　日	期　日	作業種別　名称	長 (m)	巾 (m)	深 (m)	面積 (m²)
5. 27(金)	第1日	予備調査				
28(土)	2	準備、発掘調査				
29(日)	3	トレンチ堀上作業　Tr　A	60	2	0.5	120
30(月)	4	〃　〃　B	40	2	0.5	80
31(火)	5	〃　〃　C	60	2	0.5	120
		〃　〃　D	20	2	0.5	40
6. 1(水)	6	〃　〃　E	10	3	0.5	30
		〃　〃　F	8	1	0.5	8
		〃　〃　G	8	1	0.5	8
		〃　〃　H	8	1	0.5	8
		〃　〃　I	8	4	0.5	24
		窯址発掘	15	5	3.0	75
2(木)	7	トレンチ堀上作業　Tr　K	4	2	0.5	8
		〃　〃　N	4	2	0.5	8
		〃　〃　P	4	2	0.5	8
		トレンチ拡張作業	30	5	0.5	150
		(総　計)	(278)			(687)
		実測　測定作業				
3(金)	8	検出調査　第1号遺構	5	5	0.7	25
		2　〃	5	5	0.7	25
		3　〃	5	5	0.7	25
		4　〃	5	5	0.7	25
		5　〃	5	5	0.7	25
		6　〃	5	5	0.7	25
		7　〃	5	5	0.7	25
		8　〃	5	5	0.7	25
4(土)	9	実測、測定、遺構の清掃				
5(日)	10	整　理				

○15日間　室内作業による遺物の整理・復原・測定(1ケ月以内)　○20日間　報告原稿作業(3ケ月以内)　○30日間　報告書作成印刷　(1ケ月以内)

安源寺遺跡発掘調査委員会名簿

顧　問	中野市長	丸山久雄
	中野市議会議長	山田顕五
	中野建設事務所長	土屋　年
	長野県教育委員会事務局社会教育課長	村上富吉
	長野県教育委員会事務局社会教育課文化財係長	徳永正人
会　長	中野市教育委員会委員長	大月松二

委　員	中野市教育委員	小根沢　義　郎
	〃	藤　岡　善　雄
	〃	宮　崎　茂　喜
	長野県文化財専門委員、中野市公民館長	中　村　　浩
	下高井教育会長	小　林　曦　暉
	中野市安源寺区長	内　藤　茂　平
	中野建設事務所総務課長	小　松　政　夫
	〃　設計課長	小　林　正　一
	〃　工事課長	石　沢　　正
	〃　管理係長	高　野　博　美
	中野市議会議員	高見沢　茂　助
	〃	小　林　小衛門
	〃	永　井　忠　重
事務局長	中野市教育委員会教育長	芳　川　　毅
事務局員	〃　社会教育係長	山　本　政　巳
	〃　社会教育係	小野沢　　捷

調査団編成

発掘調査責任者	中野市教育委員会教育長	芳　川　　毅
顧　問	長野県文化財専門委員、信濃史料編集委員	金井井喜久一郎
	日本考古学協会員、長野県教育委員会社会教育課指導主事	林　　茂　樹
団　長	日本考古学協会員、長野県考古学会幹事、中野市立高社中学校教頭	金　井　汲　次
副団長	日本考古学協会員、長野県考古学会委員、長野県立飯山南高等学校教諭	高　橋　　桂
調査委員	日本考古学協会員、長野県考古学会幹事、長野県立諏訪双葉高等学校教諭	桐　原　　健
	日本考古学協会員、長野県考古学会幹事、長野市立下氷鉋小学校教諭	森　島　　稔
	長野県考古学会員、中野市立平岡小学校教諭	田　川　幸　生
	長野県考古学会幹事、長野県立長野西高等学校教諭	笹　沢　　浩
	長野県考古学会員、長野県立屋代高等学校教諭	小　池　正　彦
	長野県考古学会員	下　平　秀　夫
	長野県考古学会員、中野市教育委員会	小野沢　　捷
調査員	長野県考古学会員、長野県立丸子実業高等学校教諭	関　　孝　一

	長野県考古学会員、上田市立上田博物館	川上　元
	長野県考古学会員	興津正朔
	飯山市立太田中学校教諭	湯本達保
	日本地質学会員、長野県地学会員、中野市立高社中学校教諭	中村二郎
	中野市立高社中学校教諭	綿田　孝
	長野県考古学会員	松沢芳宏
調査協力	中野市立高社中学校郷土クラブ	
	長野県立飯山北高等学校地歴部	
	長野県立飯山南高等学校考古クラブ	
	長野県立中野高等学校歴史研究部	
	長野県立屋代高等学校地歴部	
	中野市連合青年団	

調査日誌

1月21日（金）晴後曇　金井は県教育委員会社会教育課へ出向し、安源寺遺跡の現状について報告する。

1月22日（土）晴　中野市教育委員会事務局において芳川・金井・小野沢3人で発掘調査計画について協議する。

1月27日（木）晴　小野沢は発掘調査関係について中野建設事務所へ出向し協議する。

2月11日（金）曇　読売新聞長野版に安源寺遺跡発掘計画について報道した。

2月15日（火）晴　昨秋行なった分布調査の結果を印刷に付し、関係方面へ配布する。

2月24日（木）晴　林茂樹指導主事来市　現地視察に芳川・金井・小野沢同行し、発掘計画について協議する。その後中野建設事務所、市当局で趣旨説明を行ない、諒解を得る。

3月16日（水）晴　中野建設事務所からの電話で、安源寺の山崎定吉氏宅の土取場に遺構らしいものが見つかったと連絡があった。小野沢が現地を視察したが確認できなかった。

4月5日（火）晴　林指導主事から市教委宛の電話で発掘計画について連絡があった。

4月27日（水）　曇　市教委事務局で芳川・金井・小野沢は発掘計画について打合わせを行ない、要項を印刷する事にした。

5月17日（火）曇時々晴　安源寺遺跡発掘調査計画要項を関係方面へ郵送する。

5月21日（土）曇　埋蔵文化財安源寺遺跡発掘調査委託契約（委託者中野建設事務所長中屋年、受託者中野市長丸山久雄）を締結する。

5月23日（月）晴　埋蔵文化財緊急発掘届出書を提出する。

5月24日（火）曇　発掘調査委員会（発掘調査の協力機関）委員22名および発掘調査団に19名と各学校のクラブを委嘱する。

5月26日（木）晴　金井・小野沢は最後の打合わせを行ない、関係方面へそれぞれの挨拶まわり

をする。発掘調査本部は安源寺消防団詰所を借りて設置し、清掃して発掘調査に必要な資材、物品等を整備する。本部の庶務担当に阿部弘子さんをお願いする。

5月27日（金）晴　発掘調査を本日より開始する。計画書に従って次のトレンチを設定し、縄張りを行なう。Aトレンチ —60m×2m、Bトレンチ —40m×2m、Cトレンチ —60m×2m Dトレンチ —20m×2m。縄張り終了後各トレンチごとに長さ10mの区切りをつける。発掘予定地は久しく空地になっていたため雑草が繁茂し畑の畦畔には桑株、篠竹株があって取り除く作業は難行した。午後6時30分終了。宿舎は湯町の翠山館とする。調査団6名、作業員3名。

5月28日（土）晴　8時作業開始。現場で発掘調査委員会委員、調査団員多数が集まって鍬入れ式を行なう。Aトレンチの1区と2区の表土下20cmから弥生後期土器片多数を発掘し皆幸先がよいと喜びあった。特に1区中央部検出の土器片は集積状態であるため「土器溜」と呼んだ。（後の1号土坑址）3区の発掘にも手をつける。Aトレンチ2区の西隅より小形の弥生甕を得る。山崎賢一郎氏より発掘地周辺から発掘されたという弥生式土器3点を借用する。壺形土器、片口土器、高坏片（丹塗）で、壺形土器は1週間ほど前に上段台地の果樹園で令息が耕作の折に発掘されたものである由であった。参観山崎賢一郎氏他多数。調査団8名。作業員12名。高社中クラブ10名。

5月29日（日）小雨　曇天からついに小雨となり作業開始は8時30分となった。粘質の強い土のため小雨でも用具に粘りつき作業は非常に困難をきわめた。昨日に引き続きAトレンチ3区を発掘し、Bトレンチ1.2区の表土剝ぎに着手した。Aトレンチ3区からは弥生中期、縄文中期土器片が割合に多く検出され、珍らしいものには青海波文様の須恵器片1点が出土した。Bトレンチ2区の中央部の地下30cmは高台付坏（土師）が出土し、石の配置等から住居址が存在すると推定される。雨が激しくなったため10時30分に作業を中止し皆残念な面持ちで本部へ引き上げて土器洗いを行なう。午後は細い雨足となったため1時30分から作業を続行する。所々から縄文・弥生・土師の土器片が出現した。Aトレンチ4～6区、Bトレンチ3～4区の表土を剝ぐ。午後5時作業終了。夕刻より雨は激しくなり、夜半まで降った。参観土屋年氏（中野建設事務所長）他多数、調査団8名。作業員11名、高社中クラブ23名。

5月30日（月）晴　8時作業開始。昨晩の雨に洗われた青葉は陽光に燦と輝き、すがすがしい朝で、作業は進捗した。遺跡周辺の風景をカラースライドに収めた。午前中はCトレンチの表土剝ぎ作業。雨後の土は柔らかく作業は容易であった。

昭和29年秋に県道拡張の折切断された窯址を探したが、南斜面の土堤は一面の雑草、篠竹株に覆われていてすぐには発見できず、金井他2名が午前中を費やしてやっとつきとめた。現在の北登りの農道下だったら半地下式登窯であろうと思ったが、相当の高さを持つ畑地の南斜面（宮裏584番地　地主山崎正治郎氏）であるため、おそらくトンネル式登窯と想定された。

中食時と休憩時間に現状報告と今後の発掘計画について討議する。午後はDトレンチの表土剝ぎを1区から4区へ進めて行くと西端に石組み遺構とおぼしきものを発掘し、土師住居址になるかと推定して拡張していくと火葬された人骨が出てきた。河原の自然石をほぼ等間隔に径30～40cm位の円座に敷きつめた上に骨片を載せている。年代推定の何等の手がかりも得られず途方にくれた。

Cトレンチ3区からは鞴口の破片を検出した。中食休みに全員が本部に引きあげたすきにAトレンチ1区の高坏1個、Bトレンチ2区の高台付須恵2個が、心なき者の手によって持ち去られていた。作業終了6時。参観市村忠兵衛氏（元市教育長）他多数　調査団11名　作業員13名。

第5図　出土人骨の法要

5月31日（火）晴後曇　作業開始午前8時。安源寺遺跡は弥生後期と土師時代の遺構、遺物が中心であろうと思っていたが時代の巾のあるのには驚いた。本日もそれぞれ手わけして発掘調査に当る。

窯址の発掘に着手。昨日焼成部と窯の方向をほぼ確認したので傾斜、方向から窯尻を推定して畑地の表土を剝ぐとすぐ窯尻付近の部分が現われた。上部から下へ追って発掘を進めると、窯址のほぼ中央部とおぼしきところに築造当時のままの天井部が残存していた。

Bトレンチでは土師住居址付近と推定される石組み竈を完全に発掘し、その北西部に2個の大甕を検出した。細心の注意を払って住居址の周囲の壁を探したが、ついに発見することはできなかった。

火葬墓は6基検出され、小砂利の円座上に、しかも傾斜面に階段状になった一線上にあった。その後の発掘によってその後方に粘土の円座の上に更に3基火葬墓を検出した。火葬墓群を清掃していると、その西側に幼児の頭大の自然石が置かれていた。その一帯は土質が柔かかったので不思議に思って掘り下げると、頭骨と古銭7枚が出土した。古銭の下限は景定元宝であった。更にその南側に下肢骨が4本出土した。その南約3 mのところからは1基の火葬墓が発掘され、火葬墓11号とした。1～6号同様に小砂利を敷いた円座があって、その下には須恵の鉢片が4点検出された。あまり墓址群の発掘が続くので法要してもらう事がよかろうという事になって、急遽大徳寺住職畔上智仁師を聘して読経をしてもらい、調査に参加している者一同礼拝して懇に弔った。時に午後5時。午後6時作業終了。（第5図）　参観矢野義郎氏（県議）、村上富吉氏（県社会教育課長）、小松益美氏（中野市助役）他多数　調査団12名　作業員13名。

6月1日（水）曇時々小雨　午前8時30分作業開始。高社中郷土クラブの生徒が参加したのでE・F・G・Hのトレンチを設定し表土を剝ぐ。特にEトレンチは県の用地買収地外を含み、高見沢信秀氏の所有地に発展してかかるため試掘の許可を得る。

第6図　横内県教育長の視察

Eトレンチは4つの群に土器片が密集しており、土坑墓となる可能性が強く、生徒たちは張り切って発掘に従事し成果をあげることができた。時々小雨が降って作業にはさして支障はなかったが、実測図をとるのには不都合であった。

Aトレンチにいくつかの土坑墓を検出。土師住居址の東側に石組みの炉址を検出した。宿舎翠山館において発掘調査の

現状と今後の調査方針について協議する。参観小林曦暉氏（下高井教育会長）、高見沢茂助氏（市議）他多数。調査団12名　作業員13名。高社中クラブ16名　飯山北高クラブ3名。

6月2日（木）曇　作業8時30分開始。トンネル式無段登窯は中央部の天井のところが開通し、床面もほぼ全貌が現われた。窯内の遺物は割合に僅少であった。

土師住居址の石組み竈は全貌を確認され土器・木炭片・灰・焼土があって、付近に坏類が散在していた。Ⅰトレンチを設定。発掘を進めると土坑墓1基を検出し第12号土坑墓と呼称する。特に弥生中期の土器片があったのが注目された。

土葬墓第1号の人骨取り上げを午後2時から信大香原助教授ほか2名の助手によって入念な作業で行なわれた。下肢骨下から古銭2枚と鉄釘、竹釘10本を得た。古銭はこれで9枚発掘したことになる。人骨は香原助教授によると「中世特有の長頭型で50才を過ぎた男性と推定する。」との事であった。埋葬は箱に収め屈葬で北枕にし、顔は西向きだった。Ⅱトレンチには土器片が実に多い。写真と実測をすませて土器片を取り上げるとその下からきれいに4基の土坑墓を検出する事ができた。

CトレンチとDトレンチの間に14～16号土坑墓を検出した。窯址発掘によって県道側へ落下した土砂を市役所のダンプカーが除去し、6台分を運搬してくれた。発掘期間延長を依頼する。参観大月松二氏（市教育委員長）他教育委員・小林小エ門氏（市議）他多数。特別調査香原志勢氏ほか助手2名　調査団10名　作業員12名　高社中クラブ8名

6月3日（金）晴　8時発掘作業を始める。12号土坑墓を昨日に引き続き発掘。長径1.5 m、短径1 m、深さ0.4 mのきれいな遺構を検出する事ができた。Aトレンチ2区南側にいくつかの土坑墓を発見し検出に努力する。特に複合した形で検出され、調査団員はじめ参加者から注目された。

窯址は次第にその全貌を現わしつゝあるが、焼きついた窯滓などがあって作業はなかなか進展しない。残った天井部は幅約80 cmで立派なアーチ型を残して掘りすすめられた。

Ⅱトレンチの土坑墓の発掘を続ける。大小4基の凹みをはっきりと検出する事ができた。各トレンチ、遺構の実測をはじめる。参観横内秀雄氏（県教育長）、土屋伝氏（県監査委員）他多数

調査団11名○作業員16名○高社中クラブ6名（第6図）

6月4日（土）曇後雨　午前8時作業開始。午前中は曇天で時々小雨が降ったが作業を続行する。

Aトレンチ2区南下に土坑墓の遺構をみつけ発掘する。4号、5号、6号と命名する。土器片の殆んどは箱清水式で弥生後期のものらしい。

土師竈址付近のピットを発掘。Cトレンチ1区に土坑遺構を発見し、11号、13号とする。窯址は午前中にほぼ発掘を完了し、窯の上下は多少切られているが現存遺構の長さは7.6 mであった。全貌を撮影する。Ⅱトレンチは昨日に続き拡張。午後は大粒の雨が落ちてきて、作業は中止のやむなきに至った。本部において土器洗いをし、出土遺物の整理をする。

本部に片山宣人氏から弥生後期の大甕片12点、宮島信男氏から須恵大甕片19点、高見沢定吉氏は須恵大甕片5点をそれぞれ提供された。いずれも本遺跡周辺の出土品である。参観市村忠兵衛氏他多数　調査団8名、作業員9名、高社中クラブ5名、飯山北高3名。

6月5日（日）晴　当地の土質は晴天が続くと固くなり、スコップでは刃がたたない。ツルハシで僅か掘れる程度で作業は難行する。また雨が降ると粘質が強く用具、履物に付着してやはり作業は困難となる。本日は昨日の適当なおしめりで発掘ははかどり、その上日曜とあって近隣の高校生中学生の手伝いがあって大いに進捗した。

Aトレンチで土坑4号、5号、6号を発掘。特に塗彩土器が多く、また口辺下に半円形の櫛描文様土器片も珍らしかった。

Cトレンチ2区西端で17号土坑を発掘し小形無文盃形土器2個を得た。完形である。更に北へ拡張すると11時過ぎに骨片の塊り付近に青銅色に輝く利器の一部分を検出した。青銅器が出土したというので慎重を期し、中食後念入りに発掘すると総長21.4㎝、刃部12.4㎝の鉄製の小柄であった。皆を落胆させた。小柄は腰骨のあたりにあって、頭骨も北に位置して検出され土葬墓2号と命名したが興味あるものであった。

CトレンチとDトレンチ区間に飯山北高生達は14号、15号、16号の土坑を検出。Eトレンチはきまる。

金井（喜）顧問は安源寺城址、草間茶臼峯（山城）を視察し、茶臼峯按部で宝筐印塔・五輪塔を発見した。市村忠兵衛氏宅で天明8年（1788）の絵図を見せてもらい、発掘地の南斜面は墓地であったことを発見する。日曜日につき参観者は特に多かった。参観市村孝左ヱ門氏（市選管委員長）ほか800人、調査団16名、作業員14名、高社中クラブ4名、飯山北高14名、中野高4名。

6月6日（月）晴後曇夕刻俄雨　8時作業開始。6号土坑は栗林式土器片が出土するので注目していたが、5号土坑址より一段さがり、径約1.2ｍのほぼ円形のプランである。A、Bトレンチを清掃し写真に収めて実測する。A、Bトレンチ2区の中間にピットの存在を知り、北方からと土坑6号址から西に向って発掘を進めると一面に土器が敷きつめてあり大きな土坑址ではあるまいかと思われた。4本ピット址と仮称する。4号址付近に太形蛤刃石斧の刃部破片があった。

人骨の件について信大医学部（松本）へ連絡したところ明日現地へ来られるとの由だった。夕刻俄俄雨あり。参観市村忠兵衛氏他多数。調査団4名、作業員8名。

6月7日（火）晴　作業開始8時。4本ピット址は発掘が進むにしたがってその全貌を把握することができるようになった。9号土坑址と命名する。東西に長い隅丸長方形のプランで、上面には覆うように土器片が置かれ、東隅に太形蛤刃石斧刃部破片1点と打製石斧1点を得る。午後1時すぎ信大医学部香原志勢助教授と3人の助手が松本から自動車で来られ、ただちに土葬墓2号の人骨取り上げ作業にかかられた。非常に綿密な作業で頭骨、下肢骨4本の取り上げを終了したのは3時30分を過ぎていた。その後火葬墓の人骨を蒐集され、医学部へ持参された。夜のＮＨＫテレビニュースで安源寺遺跡発掘が報道された。参観徳永正夫氏他多数、特別参加香原志勢氏他3名。調査団4名、作業員5名

6月8日（水）晴　8時作業を始める。6号土坑址を発掘する。地表下40㎝に箱清水式が少量あって、地表下60㎝のところに栗林式土器片が20点置かれ、それから約10㎝で遺構は終った。更に下層の状況を知るため深掘りすると、縄文前期土器片少量と黒耀石片が出土した。

Eトレンチ全般に発掘する。4基の土坑址北部には縄清水式土器片、古式土器片が多かった。作業終了7時。参観高見沢信秀氏他多数。調査団5名、作業員5名。

6月9日(木)曇後雨　午前8時作業開始。Eトレンチ続掘。とにかく遺物の出土量が多いのには驚くほかない。9号土坑址の発掘を続ける。土坑墓の性格が次第に鮮明になってきた。

火葬墓11号の発掘を完了し、遺物を取りあげるとその下に墓址があるらしいので発掘を続けると地表下70cmのところに土葬墓があった。午後2時過ぎ雨となり作業は中止して遺物の整理を行なう。参観永井忠重氏(市議)他多数。調査団4名、作業員4名。

6月10日(金)雨　雨のため作業中止。本部において遺物整理。調査団1名、作業員1名。

6月11日(土)曇　作業開始8時30分。Cトレンチ東端に土坑22号址を検出する。周溝をめぐらし、今までにない大きな規模で直径1.1×0.8mの楕円形プランのようである。半分ほど発掘をすませただけで日没になってしまった。周溝寄りに小形無頸壺、土製紡錘車を得る。

9号土坑址続掘。4個のピットの西側に各々1個ずつのピットを発見する。これで3個ずつの平行の間に9号土坑址が挾まれている事になった。9号址の西中央に枕状の自然石を発見した。

土葬墓4号を続けて発掘するも強粘土のため作業は困難をきわめた。

Kトレンチを設定。弥生を主体に縄文、土師、須恵片等40点ちかく検出する。参観山崎正治郎氏他多数、調査団6名、作業員3名、飯山北高3名。

6月12日(日)晴　作業開始8時。9号土坑墓の発掘をつづける。土坑のプランは2.5×1.5m、深さは50cmである。Cトレンチ1区東端の22・23号土坑址の発掘を飯山北高、中野高生徒が中心になって行なう。

土葬墓4号址の発掘を続けたが粘土質が強く昨日同様に難行した。人骨を得るも崩れが甚しかった。見取図を描いて念入りに取り上げ、頭骨、下肢骨に別けて梱包する。

Aトレンチ第3区東端で土偶を検出する。縄文中期のものと推定した。付近に土器片、河原石が直径1.5m位の範囲に散布していた。N・P各トレンチを設定する。縄文・弥生・土師の破片多量と須恵器片も割合に多かった。　参観小林正一氏他多数。調査団8名、作業員2名、高社中クラブ6名、飯山北高14名、中野高6名。

6月13〜17日　土器洗いと整理。

6月18日(土)晴　9号土坑址の南側のピット3個の発掘と清掃をすませる。ピットの東より1号には小石が詰めてあり、2号には縄文土器片、3号には縄文打製石斧1点を検出した。更に南側へ拡張すると縄文土器片が敷き詰めるように存在した。それら等は縄文中期の遺物であった。

Eトレンチ西北部を拡張する。弥生後期土器片とともに古式土器片多数を得た。参観内藤茂平氏(安源寺区長)他多数。調査団3名、作業員1名、飯山北高6名。

午後からは1時に発掘を始める。9号土坑址南側ピット3個を清掃、更に南側へ拡張する。中期縄文土器多数を検出した。

Eトレンチ西北部拡張。弥生後期土器片を主体に古式土師片多数を得る。また石棒(縄文期)破片を発掘した。磨滅の跡があり砥石的な役割を果したのではあるまいか。参観市村実郎氏他多数。

調査団3名、作業員1名、中野高6名。

6月19日（日）晴　9号土坑址を発掘し清掃する。その規模のすばらしいのに調査団員は目を見張った。土坑墓址群中随一のものである。

22号土坑墓はスケールの大きさで注目され、遺物には袖珍小壺、土製品等をはじめ土器片が多かった。

23号土坑墓は北寄りのため、その形状全体をうかがえなかった。しかし周溝をめぐらし、出土物も他とは異なったケースで興味があった。何かしら女性的なものを感じたのは思い過しであろうか。参観小林芳一氏他多数。調査団2名、作業員1名、飯山北高6名。中野高6名。

6月23日（木）晴　安源寺遺跡緊急発掘調査中間発表を午後3時から中野市役所会議室で行なう。

6月25日（土）晴　22号土坑墓を精査する。その他残余の個所を試掘した。

6月26日（日）晴　23号土坑墓を精査する。周溝西側から太形蛤刃石斧片1点を得る。9号土坑墓を清掃していると西隣りに土坑を発見し24号址と命名する。長径1.2 m、短径0.7 mであった。実測を完了した。参観北原磯吉氏他。調査団5名、作業員1名、高社中クラブ4名、飯山北高5名中野高9名。

第7図　調査団メンバー

以上6月26日をもって、緊急発掘調査は終了した。その間、日誌の本文中に一々記載しなかったが特に協力いただいた方々の芳名を次に記し謝意を表する次第である。

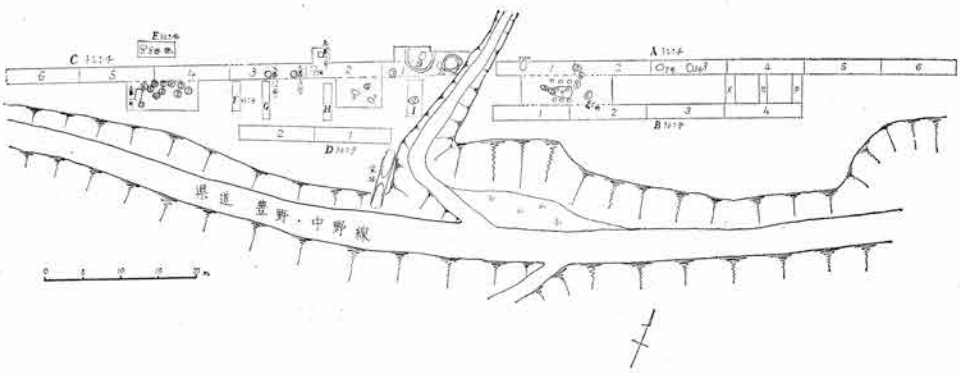
有賀忠治・山本政巳・北川昭一・小野沢巌・堀内芳子・神田禎治・山崎盈・涌田金市郎・金井光正・小野沢京二・小野沢健治・若林繁作・金井正彦・金井文司・田尻二郎・佐々木正大・阿部弘子氏等のほか、中野市連合青年団長松島敏正氏ほか団員の皆さん、高社中学校郷土クラブ長中島庄一君ほか22名、中野高等学校社会科クラブ（クラブ長富田久子さん）、飯山北高等学校地歴部長百井憲郎君ほか14名、さらには安源寺区長内藤茂平氏、元地主山崎正治郎、山崎賢一郎、高見沢伴蔵氏等、その他地元でお世話下さった小林正一・永井ちか・山崎三郎氏等。

（金井汲次）

第3章　遺跡・遺物

第1節　トレンチの概要

拡張される県道中野・豊野線の北側に東西に長く並行するトレンチを設定した。途中に宮裏地籍へ登る農道があるので、それを境として、東方上寄りをA、下よりをB、農道西方上寄りをC、下寄りをDと命名した。トレンチの長さはA、Cは60 m、Bは40 m、Dは20 mで、共に幅員は2 mである。又、のちにP・N・K・I・H・G・Fの接続トレンチを設け、遺構の広がりにしたがっ



第8図　トレンチ全体図（1：100）

て、A1区南方、C4・5区南方にそれぞれ拡張区を設けた（第8図）。

Aトレンチ

発掘地点の中央を、県道から宮裏の農地へ抜ける農道の東側に、ほぼ東西60m、巾2mのトレンチを設定、これを6等分して西から1区、2区、3区、4区、5区、6区とする。

本トレンチの土層は、表土をなす茶褐色土層が全区域を被うほかは、区域によってかなりの変化が見られる。この地区は丘陵の縁辺に稍々近く位置するため、南北に緩傾斜を示し、更に2区及び3区の境界で急にレベルが下り、次第に東側4区、5区、6区へと低くなっている。ちなみに1区を基準としてそのレベルをみると、2区と3区、4区と5区のそれぞれの隣接地点では75cm、125cm、6区の中央地点では150cmの差がみられる。

最上層をなす表土層は、1区、2区、3区が約10～15cm、4区、5区、6区が20～25cmで、地点による堆積の厚薄はあまり顕著ではないが、2区と3区の接触地点においてのみ40cmの厚さがみられる。

表土層の下部は、1区及び2区のみに25cmから40cmの黄褐色土層が部分的にみられその下層には黒色土層が厚く堆積している。隣接する3区、4区は表土層下に25cmから30cmの黒色土層があり、更にその下層に黄色土層がみられる。しかしながら、3区においての黄色土層が粘着力に乏しかったのに対し、4区の黄色土層は色調も黄褐色を呈するとともに、粘土状の土質となり粘着力を増している。またこの地層は、4区の後半部から次第に落込み黒色土層に厚く被われてしまう。5区、6区の地層は表土下に黒色土層が厚く堆積しており、その下層部の色調をつかむことは不可能である。

次に遺物と遺構についての大略は、第1区の中央より西側及び第2区の最西端に、弥生式土器片が最も多く散布し、以下第3区、4区がこれにつぎ、5区、6区にいたってはまことに寥々たる状態である。なお、第3区からは縄文時代の遺物が発見されている。遺構は弥生土坑墓が1区、2区、3区にそれぞれ1基、3区に2基発見されている。

次に遺物の出土状態及び遺構を地区別に詳述すると、第1区においては表土層中から黒耀石の剝片1点、須恵器破片1点、弥生式土器破片少量の出土をみ、また第2区との境界付近からは小鉄片4点が発見されたほかには遺物はみられない。そこで順次掘り下げるに従って、黄褐色土層中より弥生後期破片が出土しはじめ、特に第1区の西より約3m東の地点においては長さ南北2m、巾東西0.8mにわたりその散布は顕著であり、この土器群の下に竪穴遺構が存在していた。これが1号土坑である。

この遺構（土坑墓1号）に接してトレンチ内東側に電柱吊線用根加丸太が2ケ所針金で結ばれて、地表下120cmに埋められていた。次に第2区においては、第1区の隣接地と東側の表土層内に、弥生式土器片が若干見られたが、黄褐色土層になるに従い、隣接地を除く他の地域にはみられなくなり、黒色土層においても同様な状態を呈した。

さて、隣接地点の土器破片の周辺を東側に掘り進めると、黄褐色土層中において長さ東西1.5m、巾南北0.9mの範囲で弥生後期の土器破片多数と粘板岩製打製石斧1個が出土し、更に黒色土層まで掘り下げると土器群の形が明瞭となった（第3号土坑）。

第3区は前述した如く、極端にレベルが下ってはいるものの、表土層より須恵器破片4点と弥生後期土器片少量の出土をみ、更に黒色土層より土器群のかたまり2ケ所（土坑墓7.8号）を検出した。土坑墓7号は、3区の西側1m東寄りに長径東西100cm、短径南北に90cmのほぼ隅丸方形で発見され、8号は3区の中央に長径南北110cm、短径東西80cmの長方形を呈してみられたが、土器片の量は比較的少ない。土坑墓8号の東側床面においては何の変化もなく、遺物も須恵器片2点、弥生式土器片3点にすぎぬため更に黒色土層を20cm掘り下げると、黄色土層との境界面で縄文時代の土偶2個体分が胸部を上にして30cmの間隔で発見され、ついでその東側にも打製石斧1点が、また拳大の自然石5個が確認された。

第4区は表土層より弥生式土器片、打製石斧1点が、黒色土層中からは青海波文の須恵器片3点、木炭及び弥生式土器片少量が出土した。また、4区西より3m東の黒色土層地点において巾1mの砂土層があり、周囲を拡張し遺構をつかむべく努力したが、確認するまでには至らなかった。

比較的遺物の少ない5.6区においては、第5地区より寛永通宝1点、黒耀石剝片2点を表面採集し表土をはぐ。しかし遺物の出土なく、黒色土層へと掘り進めたが、僅かに須恵器片1点、弥生式土器片少量、頁岩製の石鏃1点、黒耀石製石錐1点及び黒耀石剝片3点の出土をみたにすぎない。また、第6区は表土発掘のみのため出土遺物は皆無である。（小池正彦）

Aトレンチ拡張区

本拡張区はAトレンチ第1区、第2区の南側Bトレンチとの間に土坑墓群を究めるために拡張した。層序はA、Bトレンチ第1、2区の地層と大差なく、上部から表土層、黄褐色粘土質土層、黒色土層の順となり、厚薄の著しい箇所は殆んど見られない。しかしAトレンチから南側は、Bトレンチに向って緩傾斜を示すため、土砂の流失を考慮しなければならない。

本拡張区には表土層に弥生式土器の小破片が土坑墓の上部と想定される地点を中心に散布し、黄褐色土層に至り多量の土器破片の出土をみるほか、土坑墓7基（2.4.5.6.9.10.24号）とピット8

個が検出されている。

まず黄褐色土層中にその全貌が明白にされた2号土坑墓は、やゝBトレンチ1区側に近く、Aトレンチ2区内3号土坑墓の南西3.6 m の地点に存在し、また3号土坑墓南東の隣接地点に4号土坑墓があり、黒色土層と接触する層位においては4号土坑墓の南側25cm地点に5号土坑墓が存在する。

この層位と同じものに24号土坑墓があり長軸の東側が2号土坑墓と接触し、その下部に位置している。これら2.3.4.5.24号土坑墓の遺物は弥生後期の土器破片ばかりであり、その包含層は表土下、黒色土層直上に最も多く、以下黒色土層、表土層の順になっている。

更に掘り下げると、第5号土坑墓の西南に近接して9号土坑が発見された。9号土坑の西端部上には2号土坑墓の一部が乗っている。さらにこの9号土坑墓と同じ層位に3.4.5.9号土坑墓に囲まれて、10号土坑墓があり、多くの土器片の出土をみている。9号土坑墓の東側1.6 m 地点の黒色土層内においては、本遺跡唯一の円形土坑墓（第6号）が検出され、弥生中期の栗林式土器破片の出土がみられている。

一方、拡張区の8個のピットの状況をみるに、すべて表土層下から穿たれている。うち2個は9号址内も北壁に近く82cmの間隔で東西方向に並んでおり、一つは長径24 cm、短径22 cm、深さ20cmで舟底状に凹み、一つは長径44 cm、短径26 cm、深さ22cmを測り、共に不整円形で内部よりの出土遺物はない。

また他の6個のP_1～P_6は土坑墓9号を中心とした両側 ― 北にP_1～P_3、南にP_4～P_6がほぼ対称に並列し、その形状その他は次の通りである。

このうちP_4～P_6の深さは上部を除去されたため本来の深度はわからないが、層序からして30cm以上あったものと推定される。すなわちP_1～P_3の底面は9号、10号土坑墓の土器群表面の層位で止っているのである。

P番号		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	P内出土遺物
北	P_1	40	38	45	弥生後期土器片1
	P_2	46	42	35	〃 2
	P_3	60	56	35	〃 5
南	P_4	46	42	14	打製石斧（14×6）1
	P_5	50	50	16	小石（10×8）1
	P_6	56	56	20	〃（10×12）1

次に各ピット間の距離をその中心から計測すると、北側P_1とP_2、P_2とP_3共に1.1 mで、南側P_4とP_5は0.9 m、P_5とP_6は1 mであり、南北の間隔はP_1とP_4、P_2とP_5、P_3とP_6がそれぞれ2.9 m、2.7 m、2.8 mの数値を示している。

以上の状態から本拡張区内の遺構を層位的にみると、ピット群がもっとも新しく、次に土坑墓2号、4.5.24号、3番目に9、10号土坑墓となり、最も古いのが土坑墓6号ということになる。

（小池正彦）

Bトレンチ

Aトレンチに平行して、傾斜面にBトレンチを東西に40 m×2 mを設定した。東から10 m間隔に

4等分して1～4区とした。地表は以前果樹園、桑園であったということで、廃捨した桑畑の畝が斜面と平行に走っていて、表面はかなりでこぼこしている状態である。

層位はトレンチの南面でみると、1.2区では表土、明褐色土層、黒褐色土層、地山（粘土質の茶褐色土層）という順序で下層に連なっている。表土は一時何の耕作も行なわれないまま放置されたので、腐植土で稍々灰色の強いものである。これが約10cmの堆積をしている。

第2層の明褐色土層は、ほぼ平行に続いているが、東方に稍々傾斜していて、厚さは20cmである。その一部には30cmになるところもあるが部分的である。この第2層までは、遺物は殆んどみられず、上方からの流れこんだ土器片が数点発見されたにすぎない。

第3層の黒褐色土層は、稍々粘土質の強いもので、この上部から土師器が認められた。カマドが発見されたのは、表土から30cm前後の第3層中である。当然耕作によって撹乱されていると思われるが、Bトレンチの遺物はこの黒褐色土層中からである。

黒褐色土層は西方から東方にかけて厚くなっている。西端においては20cm、中央部では40cmと測ることができ、2区の東端では落ちこみ状の1m×1mのピットとなっている。最底部は1.6mであった。この地山となっていて、粘土質の強い茶褐色土層である。

1区にみられた遺構はカマド址のみで、Bトレンチの北側壁で石組みを発見し、これを中心に北方に拡張した。カマド址と炉を発見したが、住居址のプランの発見には表土下30cm前後であったこと、耕作による破壊、斜面上における複雑な地層によって、壁はもちろん、床面の認定は困難であった。これに接してAトレンチの拡張区で6号址が発見され、距離的にも、層位的にも本住居址との複合は考えられず、カマド址は住居址の西南棟にくるものと思われる。

第1、2区の出土遺物は、カマド址からの土師、須恵器以外は殆んど破片であって、器形の判るものはなかった。

第3、4区について、層位は表土、黒褐色土層、地山という層位を示した。第1、2区でみられた明褐色土層は確認できない。斜面上という地形からくる複雑な地層を示している。

第1層の表土は1、2区と同様であって、ここでも10cm前後であった。第2層になると黒褐色土層に連なり、前述したように明褐色土層はみられなかった。第3区でみられた黒褐色土層の堆積は厚く、西方から東方への傾斜を示している。40cm～50cmである。この下に地山が連なっている。第3、4区において遺構、遺物は何もみられなかった。（下平秀夫）

Cトレンチ

丘陵の南斜面のうち、丘陵上面の宮裏地籍へ通ずる農道の西方、東西に2m巾で60mのCトレンチを設定。10mを1区画として6区に分割し、東から1区、2区と命名した。

まず層序から触れるならば、第1層（表土）が灰褐色土層で、地点によっては第2層との境に小礫を含み、第2層黒褐色土層、第3層黄褐色粘土漸移層、第4層黄褐色粘土層（基盤）と続いている。ただ、第4.5.6区は黒褐色土層を欠き、表土から直接、基盤に達している。また1区の22号土坑付近においては、第1層の次に黒色土層を若干はさみ、黒色土層に移行している。

トレンチの各層の厚みは、地点によりかなりの異同が認められている。各区ごとにその厚みを列

記すると、第1区では第1層50cm、第2層160cm、第3層20cm。第2区では第1層30cm、第2層90cm、第3層15cm。第3区では第1層30cm、第2層40cm、第3層15cmで基盤に達し、第4、5、6区では第1層30～40cmの次に直接基盤に達している。

トレンチ内発見の遺構についてみるならば第1区で13、22、23号弥生式土坑、第3区内に中世の火葬墓12号と土葬墓3号を検出した。

出土遺物としては、2区南壁に接して鞴口を出した以外、とりたててめぼしい遺物はなく、弥生式土器、縄文式中期土器、土師器、須恵器等の土器片が表土と黒褐色土層中に少量認められるのみであった。

ところで、第3区以西に遺構の露呈はなかったが、第4区のトレンチ南壁近くで東西に走る基盤の落ちこみがみられたので南方に拡張してみたところ、中世墓址群（土葬1号、4号、火葬墓1～11号）が列をなして検出された。土葬墓1号は火葬墓1～10号の南西に近接し、火葬墓11号は土葬墓1号の南側に発見された。また火葬墓11号の下層に土葬墓4号が認められた。特に土葬墓1号は長方形の土坑の中に頭骨と下肢骨が発見され、伴出遺物として古銭12枚・鉄釘・竹釘数点が検出された。

火葬墓群11基のうち、7基は小礫を30cm位の円形に敷きつめた上に、4基は粘土の円座の上にそれぞれ火葬骨を径20cm程に盛るように載せていた。1～10号火葬墓付近では、鍔の半欠1点と陶器数点が見つかったが、決定的資料に乏しく、11号火葬墓のみ、須恵質の擂鉢が礫に挾まれて出土した。次いで第2区北側を2m×2m拡張したところ、土葬墓2号が見つかり、腰骨の付近に短刀が出土した。墓坑の形跡は無く、崩れた頭骨と下肢骨1が検出された。

2区南拡張区（4m×6m）では厚さ10～15cmの表土の下がすでに黄褐色粘土層となっており、弥生式土坑14、15、16号が黄褐色粘土層中に掘り込まれていた。

黄褐色粘土層（基盤）は当地点まで、現在の地表傾斜に沿って登っていたが、Cトレンチに達すると逆に下っている事がわかった。従ってCトレンチでは基盤が深く、その上層に黒褐色土層が堆積しているので、弥生式土坑址13、22、23号は黒褐色土層中に掘り込まれている。（松沢芳宏）

Dトレンチ

Cトレンチと平行して、その南方に同じく2m巾で20mのDトレンチを設定、10mを1区画として東から第1区、第2区と区分した。

Dトレンチは、深さ15cmで表土から直接地山である黄褐色粘土層に達し、何らの遺構も認められなかった。

そこで遺跡の南限をつかむために、CトレンチとDトレンチの間に、1m巾で西からF（4m）、G（5m）、H（5m）、I（2m巾で5m）のトレンチを、南北方向に設定した。

（松沢芳宏）

Eトレンチ

Cトレンチに併行して、同トレンチ4.5区の北部に5m×2mのEトレンチを設定した。該トレンチを設定した理由は、本発掘調査以前に行った試掘時に、多量の土器破片が出土したからである。

該トレンチの層位は、北壁においてみるとおおよそ次のとおりである。

表土、黒褐色土層（第１層）、黄褐色土を混じた黒土層（第２層）、黒土層（第３層）、黄褐色土層（第４層）、黒土層（第５層）に区分され、表面より地山である粘土層に到達するまでに約1.2 *m*の深さがある。

近接するＣトレンチの層位（表土層の下に黒褐色土層を狭み地山に到っている）とは大きく異っていて、ここに本トレンチに現れた遺構が何等かの意図をもって造成された特殊な施設ではなかろうかと推定される一端がある。そして、それは東壁のセクションに顕著に示されている。すなわち、Ｃトレンチに近接する部分においては、表土層には若干の黒褐色土層をおき地山に達しているのに対して、土器が多量に出土する北側寄りでは、北壁に認められたと同様な層を形成しているからである。従ってＥトレンチ地域は意図的に掘りくぼめた箇所と推定できるのである。北壁を切り崩してさらに北部を追求したならば、一層明確に把握し得たと思われるが、種々の制約からなし得なかったのは残念である。

遺物の出土状態は、第１層黒褐色土層において弥生式土器片が多量に出土した。その出土土器の含まれる層の厚さは、15～20 *cm*で、その下に無遺物層である黄褐色土を混じた黒土層、黒土層の２層をおいて、第２遺物包含層である第４層黄褐色土層に連なっている。黄褐色土層内における遺物の出土量は、黒褐色土層よりもはるかに多量であった。黄褐色土層出土土器の時間的位置は、箱清水Ⅱ式に属するものである。器形としては壺形土器、小形甕形土器、高坏等がその主体をなしており、それら土器の殆んどは横転ないしは逆さの状態で出土した。

黄褐色土層の土器を取り除くと、若干の黄褐色土の無遺物層をおいて、土器の密集した状態の場所が４ケ所確認された。このあり方は他の土坑上部の土器出土状態と同様であり、その下部に土坑のある事を察知させた。黄褐色土層の下部は第５層の黒色土層である。土坑は黄褐色土層を掘り込み、造成されている。黒色土層の下部は地山の黄色土層になっている。（高橋　桂）

Ｆ・Ｇ・Ｈトレンチ

Ｆ・Ｇ・Ｈトレンチは、すべて表土から直ちに黄褐色粘土層に達しており、その深さはＦトレンチで20 *cm*、Ｇトレンチ20 *cm*、Ｈトレンチ15 *cm*であったが、Ｉトレンチに限り表土下25～55 *cm*の黒褐色を挟んで基盤に達していて、同所からは弥生式土坑12号が検出された。その他の各トレンチからは何等の遺構、遺物も発見されなかった。（松沢芳宏）

Ｋ・Ｎ・Ｐトレンチ

ＡトレンチとＢトレンチの間に南北3.5 *m*、巾１*m*のトレンチを３本設定、西側よりＫ・Ｎ・Ｐトレンチとする。各トレンチはＡトレンチおよびＢトレンチの第３区と第４区を直結するものである。

Ｋ・Ｎ・Ｐ各トレンチの層序は、Ａトレンチ３区、４区と同じく表土層が25*cm*前後あり、その下層に黒色土層が相当厚く堆積しており、これはＢトレンチ寄りになるに従いさらに深くなっている。

さて、各トレンチともに遺構の存在は認められず、遺物もさほど多くはなく、Ｋトレンチにおいては表土より若干の弥生式土器片の出土をみ、黒色土層において打製石斧１点がＡトレンチ第３区

寄りにみられ、Nトレンチにおいては黒色土層中より弥生式土器片少量と土師器破片3点、生焼きの須恵器片1点が出土し、表土層からの遺物の発見はなかった。またPトレンチの表土層より弥生式中期の土器片、土師器片、青海波敲打文の須恵器片が若干みられ、黒色土層からはほとんど土器破片の出土がなくなり、かわりに打製石斧1点、黒耀石製石鏃3点、黒耀石の剝片8点の出土をみたが、いずれもAトレンチ第4区に近接して発見されている。（小池正彦）

第2節　トレンチ内出土遺物

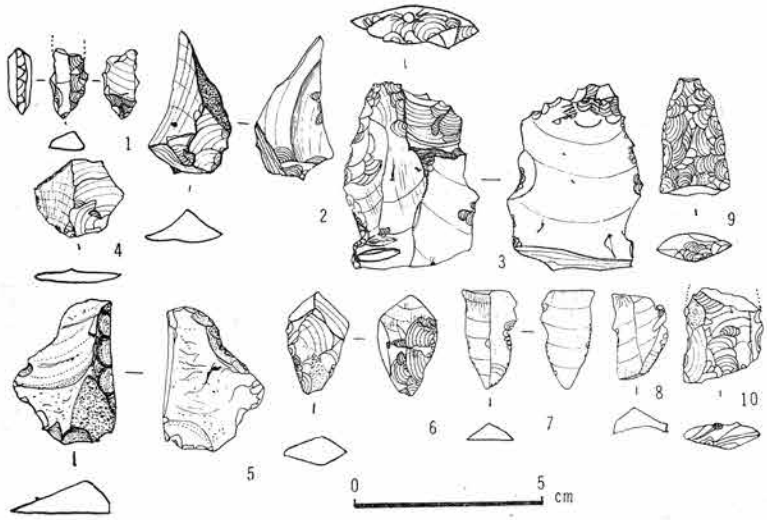
先土器時代遺物

遺物はかなり広い地域から採集することができる。今回の調査においては、表層より数点の資料を得たのみで、1次的な包含層は確認されずに終った。したがってここに報告する資料は表層および表面採集の資料によっている。

安源寺から採集された石器は2群にわけ把握される。（第9図）

(1)　安源寺Ⅰ群石器

a　ナイフ形石器(1)　分厚い小形の黒耀石製剝片を素材としており、主要剝離面は再び平行に加剝され、ネガティヴに調整されているのが特徴である。両側縁は殆んど直角に刃潰しが施されていて、基部調整も入念に行われている。尖端部を欠失しているが、小形の切り出し形ナイフである。



第9図　トレンチ内出土先土器時代石器（1：2）

b　使用痕のある剝片(2)　図示したものは打面の方向の一定しない剝片を用いたものであるが、2次調整は基部に若干見られる程度で、その他には認められない。正面左側縁に著しい使用痕が観察されるが、剝片の形態から考えられるのは、右側縁の直角に近い自然面を背部とした切り出しナイフ様の石器であったかとも思われるものである。黒耀石製。

c　彫刻器(3)　黒耀石製のかなり大形の整った石刃を用いた凸形整形彫刻器である。打面の方向を調整打し凸出部を作出した意図を読みとることができる。ナイフ期終末に通常に検出される彫刻器

である。

d　不定形掻器（4・5）　4は小剝片の一端に直線的な掻刃部を持つもので黒耀石製。5は右側縁に抉入状の掻刃部を持つもので、抉入状掻器とも考える。安山岩製。

e　直剪鏃の要素をもつ石器(6)　図示したものは基部調整は入念に行われ、先刃部は剝離されたそのままの鋭い側縁を残している。基部にはピッチ様の付着物を認め、装着されたことを物語っている。黒耀石製。日本列島ではナイフ期終末に現われ、近くは、それに類似したものが信濃町伊勢見山（註1）、あるいは諏訪湖底曾根遺跡（註2）で、遠くは九州（註3）に多い石器である。

f　石刃（7・8）　7.8とも黒耀石製である。ともに石刃技法の存在を示している。周縁に刃こぼれが観察される。

(2)　安源寺Ⅱ群石器

a　植刃（9・10）　安源寺部落の農業小林芳一氏が採集されたもので、植刃というべき性格の石器である。2点とも黒耀石製で、9は両面加工の尖頭器の折れのようにみられるが、基部および尖端部を意識的に折り、その断面に細部の2次加工が施されていることから、尖頭器の単なる折れと区別される積極的な理由がある。10にも同様なことを認められる。植刃の出現は今のところ縄文最初頭に位置付けられていて、新潟県本の木（註4）、小瀬ケ沢（註5）の各遺跡にその例をみることができる。しかし、この2点のみで他に採集された遺物がないため、Ⅱ群の石器は一応その性格を明らかにしない。

（川上　元）

註(1)　樋口　清之　小林　達雄　「伊勢見山遺跡調査概報」国学院大学考古学第1研究室刊　（1964年）

註(2)　藤森　栄一　「諏訪湖底曾根の調査」　信濃第12巻第7号　（1960年）

註(3)　杉浦　荘介　戸沢　充則　「佐賀県伊万里市平沢良の石器文化」駿台史学第12号　（1962年）

註(4)　芹沢　長介　中山　淳子　「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」越佐研究第12号　（1957年）

註(5)　中村孝三郎　「小瀬ガ沢洞窟」長岡科学博物館考古研究室調査報告書　（1960年）

縄文時代遺物

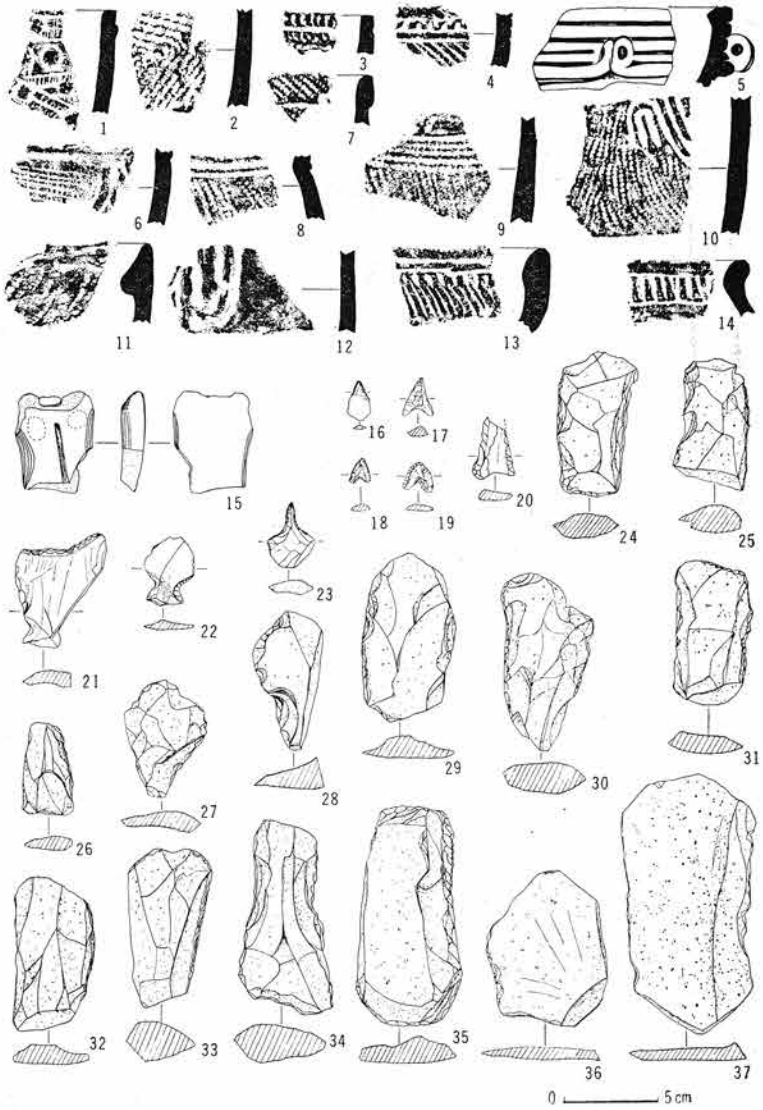
かつて、昭和28年に小野勝年氏は「下高井」の中で安源寺遺跡について触れられ、「安源寺の遺跡は水便の悪い台地である。ここから石鏃を初め石匙・石斧・石皿・敲石・磨石の類が発見されている。ただし、附近一帯はやや広範囲にわたる弥生式土師式遺跡があって、それらが混在し、しかも縄文式土器の採集が殆んど行なわれていないため、その性質の解明は今後に期さなければならない」（註1）と述べられている。

以後10余年を経た今日、ここにその一端をうかがう機会を得た訳であるが、今回の調査でも遺物の主体は弥生時代関係のものであり、縄文時代の出土遺物はごく限られた地点において土器（早・前・中・晩期）・土偶・石器（石鏃・石錐・打石斧・磨石・凹石・石棒片）が攪乱状態で出土しているにすぎない。また、その内容も資料としては極めて貧弱なものであり、当遺跡の文化的様相をうかがい知るにはなお不十分なのである。むろん出土遺物以外の住居址等については確認されなか

った。以下各出土遺物について述べておこう。（第10図）。縄文土器（1～14）はいずれも破片で50片余り出土しているが、そのほとんどは前期と中期土器に限られている。その他のものでは、早期に押型文土器1片、晩期前半土器1片が認められた位である。出土土器中、比較的量が多い前・中期土器には次のような形式併行の土器が含まれる。

(1) 縄文前期土器（1～3・5）

1・2とも胎土に繊維を含み、1はボタン状突起、竹管工具による施文の特徴から神ノ木式に相当する関東的なもの、2は羽状縄文施文の黒浜式併行土器であろう。3は口縁に爪形を施文した焼成良好な土器で、前期型式の特徴を有す。5はCトレンチ出土の黄褐色・雲母混入土器で、施文構成等からして、前期末晴ケ峯式に比定されよう。



第10図　トレンチ内出土縄文遺物（1：4）

(2) 中期土器（4・6～14）

前期に比較すると土器片数は増加している。4・6は中期初頭型式土器の施文構成と共通する。7は口縁が特徴的であり、中期型式に固定されよう。8・9は中期中葉に併行するもので、8は多分に北陸的な趣をとどめている。10～14は加曾利E式に併行するもの。破片数からすれば加曾利E式が最も多い。

(3) 土偶（15）

Aトレンチ3区出土のもの。乳房を欠き、胴部のみを残す平板な形で、黄褐色を呈し、焼成は極めて粗雑であると共に、胎土に雲母類を多く混入している。施文は体表面中央に浅い沈線が一本存し、中期に通有する一般的な土偶である。この他に土偶足部の破片が1個出土している。

(4) 石器類（16～37）

a　石鏃（16～20）　全てで5点出土している。材質に黒耀石（17・18）、粘板岩（16・20）チャート（19）を用い、形は16以外無柄である。19は鍬形鏃に相当する。全般に粗雑な整形である。

b　石匙（21・22）　Cトレンチ出土の21は頁岩質、Aトレンチ出土の22は硅石の材質を用い、形は2つともいわゆる扇形の横型に属す。この形は関西地方に分布するものと類似し、関西的要素の波及を類推することができる。21は原石部分を多く残し、整形は粗である。22はつまみのくびれに膠着材が附着している。

c　石錐（23）　Aトレンチ出土のこの一点だけで、硅岩質の材質を用い、整形は精緻である。

d　打製石斧（24～37）　打製石斧は出土石器類中最も多く、30点以上を数える。しかしこの中には縄文前・中期にみられる特徴とやや趣の異なった粗雑な整形を施している弥生時代の打石斧が混在していて、中には区別しがたいものも多く、注意しなければならない。材質はほとんど頁岩であるが、硬砂岩質のもの（37）等もある。形の特徴として最も多いのは縄文中期にみられる短冊形のものである（24～26・29・31～34）。この中でも刃部の整形によって、いろいろの特徴を指摘することができる。また他に27・28・30等のように比較的小形で、前期あたりに認められそうな先端が尖る形のものも目立つ。36・37は整形面が少なく剝片石器に相当するが、中期初頭頃のものに類似したものがある。35の例は先端部を局部磨製したものである。

以上の外に凹石2個、石棒の小破片1個が出土している。また以前には磨石斧・石槍・石皿・玦状耳飾等の出土が知られている。（註2）

以上、縄文遺物についてみたが、これらの出土地点は大体Aトレンチに多く集中しているものの、いずれも弥生時代遺物に混在した状態で散乱出土している。したがって資料はかき集められたような遺物であったが、それでもある程度の文化的特色をうかがうことができた。先にみた如く、出土遺物は大体縄文中期に集中し、水便の悪い台地遺跡は中期遺跡立地の一般性と共通している。また土器様相の一端は、関東地方の要素を有す一面、北陸地方からの影響も認められたし、他に関西地方に分布するものと通有する要素も把握されている。このことは文化的内容が千曲川下流域地方における一般的な大勢とそれ程差違を感じさせていないことを示すものであろう。　（関　孝一）

註1　小野勝年他「下高井」長野県埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ（194頁）

註2　信濃考古綜覧（上）地名表

弥生式時代遺物

トレンチ内で発見された弥生式土器破片はその殆んどが土坑墓の上面に置かれていたもので土坑墓に所属しない土器片は極めて少量である。

出土した層位は表土下の黒色土層上面で、住居址などの特別な遺構内の出土ではない。ただ分布箇所はAトレンチ、Aトレンチ西半の拡張区およびBトレンチ内発見の土師住居址附近で、遺跡の東半分に限られていることや、土器片が一部を除いて中期後半に位置する型式に属していることなどが注意される。なお、土師住居址の北には同じく中期後半と考えられている6号土坑があるので、

ここに掲げた土器片の一部はその土器群の散逸したものかとも思われたが、整理した結果関係は無いらしく、やはり遺跡の東半部には小規模な中期後半の包含地を認める事が妥当と考えられた。ちなみに採集された14片の出土位置は1号址附近（第11図11）、3号址附近（4.5.7.14）、7号址附近（1.3.6.8～10）、24号址附近（2、12）、土師住居址附近（13）で、したがって6号土坑址は同時期の遺物包含地域内に設けられていたことになる。

第11図　トレンチ内出土弥生遺物（1：6）

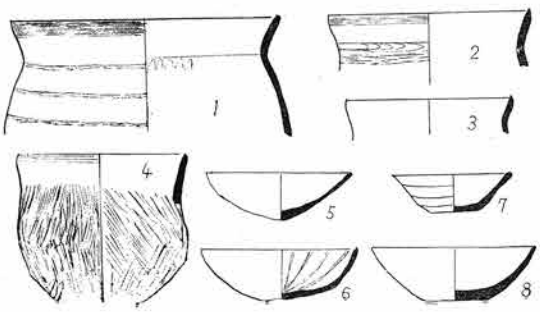
1、2は口縁部破片、口唇部とひとつの翼面には縄文が押捺されており、翼面上には篦描きによる波状文がうねっている。1は壺口縁と思われるが、2はそのカーブから飾られた甕につく。栗林遺跡や松本城山遺跡に類品を見る。3～8は壺頸部破片、細かい縄文地文の上に篦描きの横線文が繞っている。ただ6はその横線を引く施文具が原始的な櫛歯状器具に代っている。9は壺最大腹径部位に近い破片、篦描きによる重山形文が整形用の刷毛目擦文上に置かれている。描力はもう大部弱くなっている。10～13は甕形土器破片、10は飾られた甕の主文様であるコの字重ね文様の一部で、13は同文様の末端部分であり、コの字重ね文様の一番芯になる縦線が屈折しているところは栗林第二次調査出土の大形文様と同一である。　この底部破片は12号土坑の壺と同様な胎土、焼成をとっており親縁性が認められている。11～12は腹部破片、綾杉的な文様で整形されているが、その施文具は未だ櫛に移行していない。14は後期の壺形土器、上腹部破片でこの同類はEトレンチの18号土坑で出土している。細かい櫛描波状文を横走させ、その下に半截同心円文を置いている。

なお、この他土器以外の遺物としては打製石斧があげられる。縄文時代遺物中に図示してはいたが、これについては後章で詳述する。

（桐原　健）

土師期遺物

各トレンチから土師、須恵器の出土をみた。須恵器の器形の判別できるものはなく、全て破片であった。Bトレンチの土師式住居址からの出土品については、項を改めて報告するので、Bトレンチ以外の遺物を報告する。（第12図）



第12図　トレンチ内出土土師器（1：6）

(1) 甕形土器（1～4）

2・3はCトレンチから出土したも

のである。胎土、焼成はそれほど良くない。色調は明褐色である。口縁部が稍々外反する。口縁部には指による整形痕がみられ、2には頸部にヘラで削り取ったような整形痕を残している。1はEトレンチからの出土である。胎土には雲母が混入され、焼成は良い。色調は茶褐色である。ゆるやかに外反し、肩部が稍々張っている。頸部が短く、まきあげ痕がみられ指頭による整形がある。

4はEトレンチからの出土である。胎土焼成もよく、明褐色を呈する。小形甕形土器である。底部は篦による整形をしている。体部は内外共に刷毛目痕が著しい。

(2) 盌形土器（5・6）

5はAトレンチから出土したもので、焼成はそれほど良くない。色調は稍々赤褐色を呈し、篦状工具による整形痕がみられる。6はEトレンチからの出土である。胎土焼成は普通である。口縁は稍々外反する。内面は煤により黒磨している。色調は明褐色である。

(3) 坏形土器（7・8）

胎土に砂粒が混入しているが、焼成共に良好で、赤褐色である。口唇部が稍々外反しまきあげ痕が明確で、底部は糸切底である。

以上各土器についてみてきたが、いずれも出土地点を異にし、セットとはならないが、その編年を考えると、甕形土器、坏形土器に糸切り痕がみられ、国分式に併行するもので、城ノ内第6様式（註1）、平出第5様式（註2）以後と比定されよう。盌形土器（6）もやや浅く、城ノ内第6様式に近いようである。（下平秀夫）

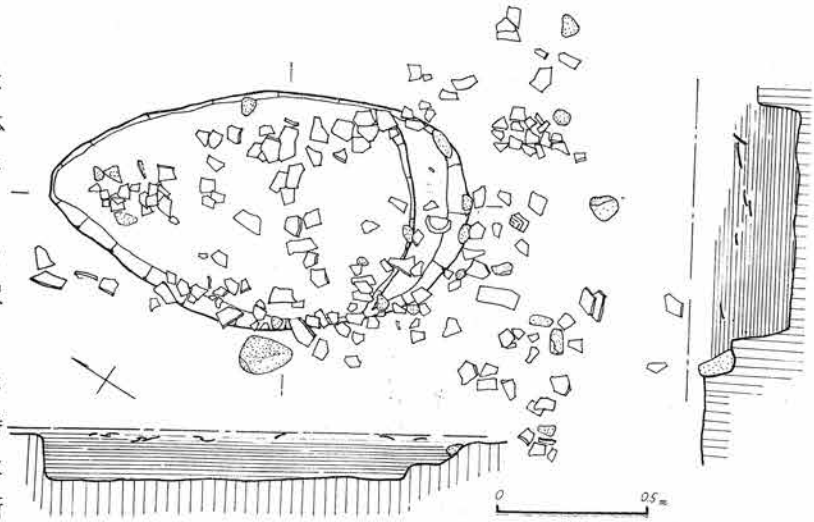
註1. 岩崎卓也「城ノ内」東京教育大紀要8
註2. 大場磐雄他「平出」　平出遺跡調査会（朝日新聞社）

第3節　弥生式時代土坑墓の調査

土坑墓の形状

(1) 1号土坑（第13・14図）

調査第2日の5月28日、松沢はAトレンチ1区西寄りの表土下に弥生式土器片の集中して散乱している個所を発見した。調査地区の拡大に



第13図　弥生式第1号土坑（1：25）

ともない、田川がその後を受け継ぎ発掘を続けた。当時はまだ土坑墓である事が明らかでなく、一応露呈した土器片を取り上げた。完形品は1点もなかったが、この下方には更に土器片、石塊が存在し、より広く散布していることも明らかになったので拡張し調査を続けた。

第14図　弥生式第1号土坑

その結果、蛇紋岩質の小形磨製石斧1点が山積している土器片中から発見された。（第38図4）　その位置は後に記す土坑墓内の頭部辺とおぼしきところである。次いでこの土器片を取り上げるにあたり、土器片集中地区の土質が軟かく黒色の強い点が不審をよび、桐原の協力でこの下に土坑墓の構築されていることが確認された。土坑墓の形状は船底形で、底部はほぼ水平に近いが後部の端は若干ではあるが高く上っている。

この遺構は黒土層中に築造されているにもかかわらず、壁部と底部は黄褐色の粘土をはる事によって堅く造られている。また、数個の河原石が土坑墓周囲に配してあったが、特に中央左側の石は拳大の大きさを有していた。右側については残念ながら電柱吊線用根加丸太埋設工事による撹乱で確認できなかったが、おそらく同様に存在したことであろう。

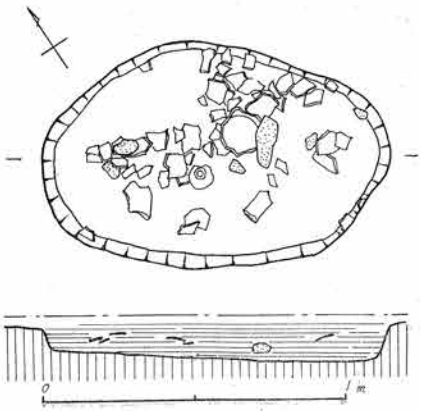
土坑の規模は長径144 cm、短径80 cm、深さ19cmで大人ならば仰臥屈葬が考えられる。なお、下方から発見された土器片から2つの高坏が復元された。（第41図44・45）　（田川幸生）

(2)　2号土坑（第15図）

Aトレンチ西半の南方拡張部に発見された。この付近は土器片の散乱が激しく、土層も撹乱していたため確認は困難を極めた。その事由は、後に発見された9号、24号土坑と重複していたためである。

土坑上面の土器は殆んど小破片であったが土坑内部の土器群は坏部、脚部などで、（第43図116・117）その外に拳大の河原石が中央と北部に3個存在していた。特に中央の河原石は稍々大きいものであった。

土坑の規模は長径120 cm、短径80 cm、深さ15 cmで、プランは楕円形である。土坑の周辺はやわらかく当初は確認が困難であったが、壁と底部共に黄褐色の粘土で固められていたことは明確であった。（田川幸生）



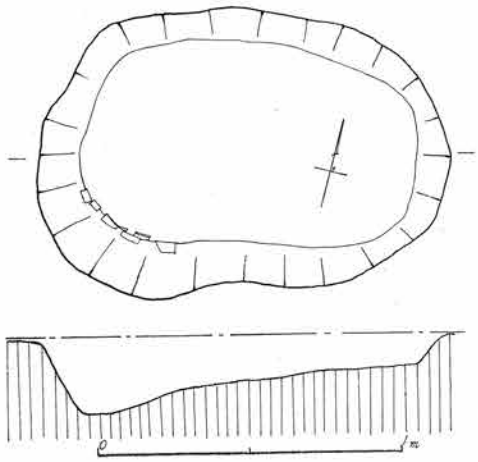
第15図　弥生式第2号土坑（1：25）

(3)　3号土坑（第16図）

Aトレンチ第1区の東寄りに位置している土坑で、

1号土坑の状況と類似している。この遺構の方が土器片の散布状態は密で、甕形土器の完形品が3点（第43図107～109）と打製石斧が1点発見され、住居址発見の望みさえ持たせていた。

これに対して土坑内遺物は僅少で、壺形土器、胴部破片が南壁下に散乱している程度であった。土坑は東西に長い隅丸方形で、長さ140㎝、巾50㎝、深さ15㎝であった。底部の北半と北壁は黄褐色の粘土がはられて比較的堅いが、底部南半及び南壁は土質が軟弱で土器を敷いたり差し込んだりして補強されていた。（田川幸生）



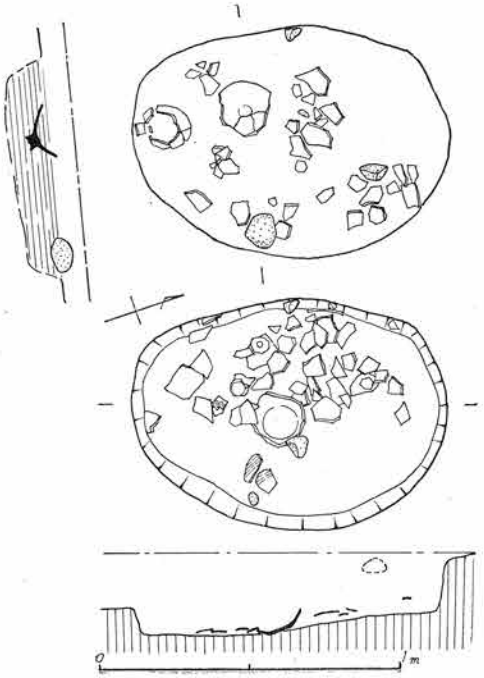
第16図　弥生式第3号土坑（1：25）

(4)　4号土坑（第17図）

Aトレンチ第1区南方拡張区も東寄りで、3号、4号、5号と小土坑墓が集中している地点である。そのため確認は手間どり、上層部の土器をまず取り上げ、次いで遺構内の土器を取り上げ始めて確認した土坑墓である。内部は粘土で固めたり張ったりした様子もなく、従って土壌の色の変化も少なく、土坑内部の黒色土は竹べらの触感だけで掘り上げた。

内部の遺物の状態は他の例と同じように土器の破片が散乱しているが、上層部には少なく大部分は底面に近く落ち込んでいた。壺形土器の破片が多く、だいたい2ケ体分と思われたが復元は不可能で、たゞ上層に近く高坏1点（第43図115）が完形を呈して置かれていた。石器は1点であるが、北壁より打製石斧の発見をみた。また石器ではないが遺構中央部左右に拳大の川原石が置かれていた点は1号土坑墓と類似している。規模は稍々小形で長さ110㎝、巾80㎝、深さ23㎝の短楕円形を呈しており、床面は地形にそって南西方向へ稍々傾斜をしている。なお、この土坑の下からは後に10号土坑が検出された。

（田川幸生）

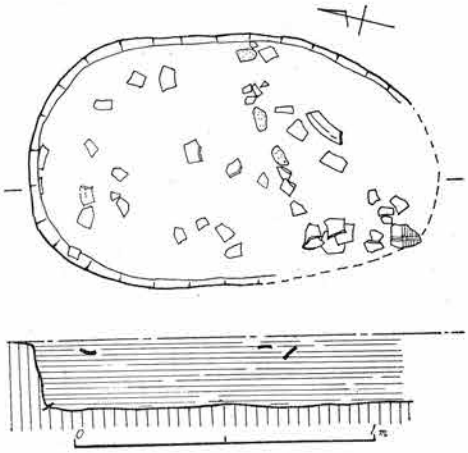


第17図　弥生式第4号土坑（1：25）

(5)　5号土坑（第18図）

この土坑も土坑集中地区の1つで、4号土坑の南に隣接している。この付近は土器片の散乱

がはげしく、ずっと南西方へ続いていた。この結果、土坑の西壁及び南壁の一部はついに確認できなかった。土坑がこのような状態であるから、これに所属する遺物も確実には把握出来ず、土器は殆んどが小破片で下層に移ってもこの状態が続いた。石器としては中央部から発見された石錐がある。土坑のプラン、規模は隅丸の長方形で長さ140 cm、巾 80 cm、深さ 20 cmであった。(田川幸生)



第18図　弥生式第5号土坑(1:25)

(6)　6号土坑(第19図)

Bトレンチ第1区に発見された土師(新)期の竈址付近から、先行土器の破片が検出されたので、松沢と小野沢が下層を掘り下げたところ弥生中期栗林式土器片がまとまって出土し中期に遡る土坑が予想され、田川も加わって調査ののち確認した。

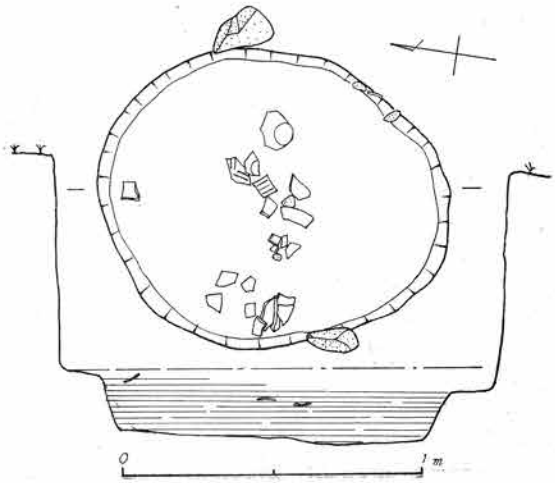
黒色土層中に構築された本土坑はべつに粘土で固めた様子もなく、周囲と比較して稍々黒色が強く軟弱を感じる程度の差異で、触感、色感を働かせて形状を明らかにした。遺物はあまり多くはないが、栗林式を主体とした土器破片が全面に散乱していたが、やはり底部に近く中央部に集中している。河原石の配置をみるに、遺構中央部左右に大きいものが置かれ、若干の小石をまわりに配してある。

形状はほぼ円形に近いもので、他の後期に位置する土坑とは若干異っている。規模は長径 120 cm 短径100 cm、深さ10cmで床面は南へやや傾いている。本遺構では唯一の中期に位置するものなので注目された土坑墓である。(田川幸生)

(7)　7号土坑(第20図)

1号から6号までの土坑墓は、黒色土層中の構築になるものであるところから、非常に苦心したが、この土坑は傾斜した粘土層の中へ切り込んで作られているために、プランは明瞭であった。その位置はAトレンチ第3区の西端である。

遺構内における土器破片の散布状態は、中心部にその密度が高く、一部は拡東壁外にも及んでいたが、他の周壁付近には遺物は少ない。浅い土坑のため土器片は底部までついている。図示



第19図　弥生式第6号土坑(1:25)

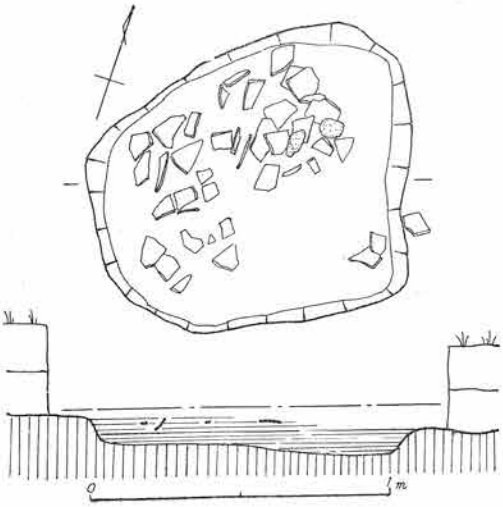
できる土器は第41図の34・45くらいで他に凹石1個が中央部より発見されている。土坑の規模は110 cm×90cm、深さ10cmで、不整な隅丸方形をとる稍々小形のものである。

（田川幸生）

(8)　8号土坑（第21・22図）

Aトレンチ3区内で7号の東に発見されたもので、安源寺土坑群最東端を画する土坑である。この付近になると土坑の分布も疎らで7号との間隔は4 m前後である。

土器は土坑墓内だけに集中していたが、その量は少なく、細かに砕かれた赤色塗彩の壺1ケ体分と甕1ケ体分、それに完形を呈する高坏（第43図118）1点程度である。

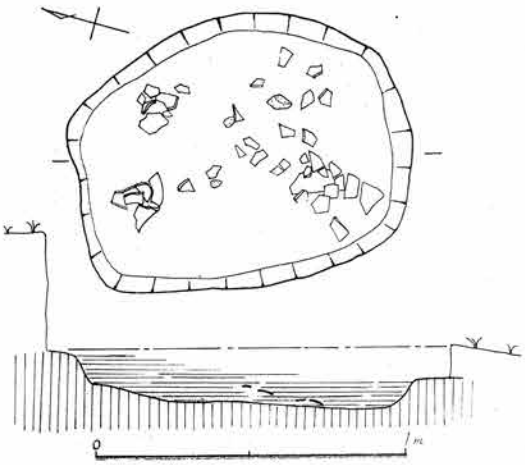


第20図　弥生式第7号土坑（1：25）

土器を取り除き6 cmほど掘り下げると土坑墓の底面である。土坑床面は斜面にそっているため若干南へ傾斜している。7号址同様に粘土層の上面に底部を置いているので、堅緻であり壁も北較的容易に検出できた。規模は長径110 cm、短径90cm、深さ18cmの隅丸方形をなし、主軸方向はN－152°－Sをとる。（田川幸生）

(9)　9号土坑（第23～26図）

本址はAトレンチ第1区の南方拡張区内に位置し、その長径は東西2.4 m、短径は南北に1.5 m



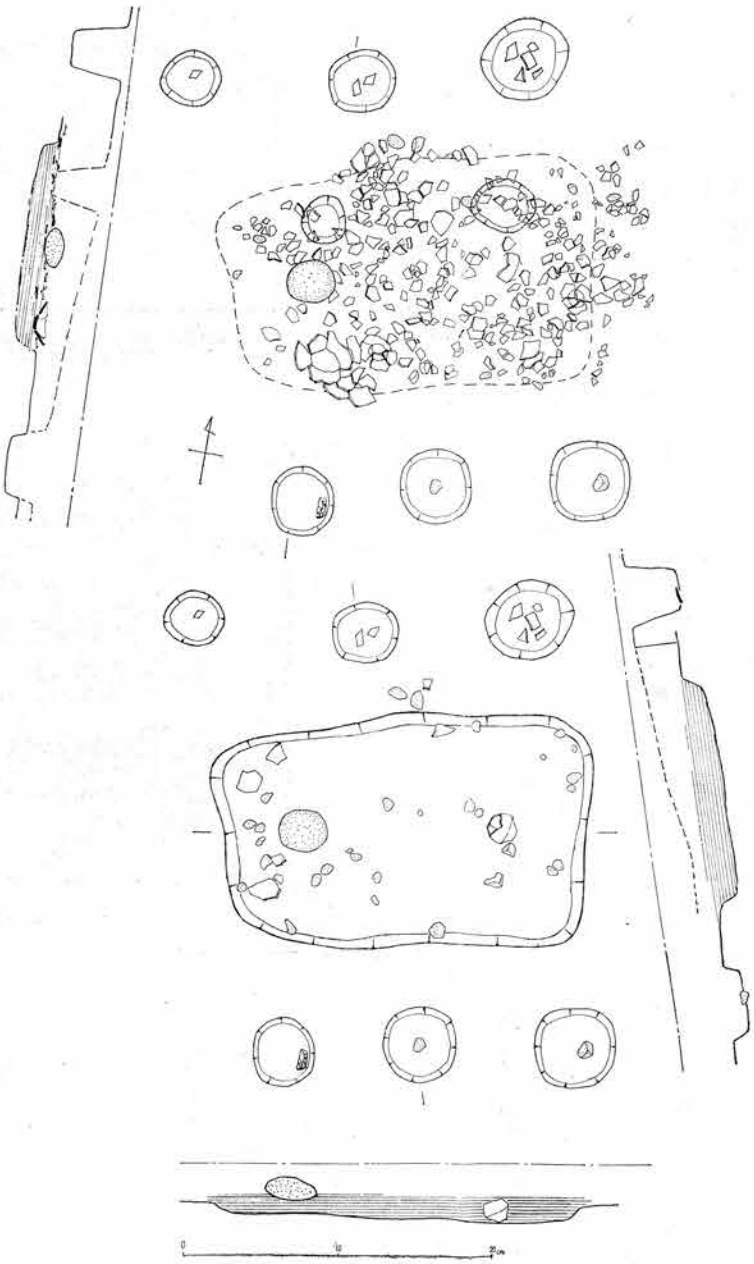
第21図　弥生式第8号土坑（1：25）

第22図　弥生式第8号土坑

で、土器群上面から底部まで15～26 cmで、黒色土層内に掘りこまれた床面平坦な隅丸長方形の土坑墓である。（第23図）

現地表面から床面までの深さは55cmで、表土層が10～15 cmあり、次いで黄褐色粘質土層が10cm見られ、その下層に10～15cm厚みの遺物密集包含層があり、さらに床面まで遺物を少し含んだ黒色土が15cmにわたって堆積している。

発掘の経過にしたがって遺構を詳述すると表土層では遺物は弥生後期土器の小破片が数点見られた程度で、この層を除去すると、黒色土層中に黄褐色粘質土層が方形の輪郭をもってあらわれ、そのうちの一隅には、相当に大きい自然石の埋蔵している事も知られて、この下に何らかの遺構－土坑の存する事が予想された。



第23図　弥生式第９号土坑（１：50）

そしてこの層を剝離すると黒色土があらわれ、その上面には土器破片が大量にくまなく散布し、

その厚さは10～15cmをかぞえるほどで、散布範囲は東西2.8m、南北1.7mで、これまた長方形状の輪郭を形成していた。

主要遺物の出土状態を西部、中央部、東部に区分し、西側から順次みると、南西隅に壺形土器大底部が原形を保持した状態で破壊されて置かれ、その破片が50cm平方に散布しそれに接して東側に底部径12cmの壺形土器底部が逆さまに、その近くにも3個体分の底部がいずれも逆さまの状態で散乱してみられた。また、大底部の北側24cmの土器密集群最西端中央地点に、長径34cm、短径30cm、厚さ18cmの縞状模様のある自然石がおかれ、その周辺部からは特に多くの木炭片が出土した。

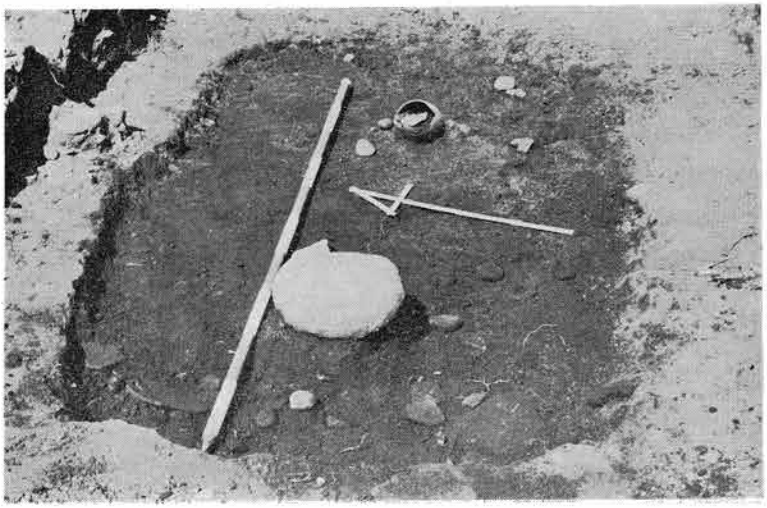
この自然石の北側には土器胴部の破片が多量に散乱していたが、境界を意味するような遺物はこの層位からは確認できなかった。しかし、下層においては底部に穿孔された大形高坏の坏部（第41図46）の出土をみている。

土器群の中央部中央地点には穿孔された高坏の坏部（第41図47）、壺形土器底部がそれぞれ1点検出され、北側においては長径12cm、短径8cmの自然石が1個あり、ここより北は土器片が少なくなっている。

一方、東部においては多くの貴重な遺物の出土が目立った。（第24・25図）。まず、袖珍的な小形壺形土器（第41図39）、太形蛤刃石斧の刃部破片2点（第38図1.2）、石斧の

第24図　弥生式第9号土坑太形蛤刃石斧出土状態

第25図　弥生式第9号土坑袖珍土器出土状態



第26図　弥生式第9号土坑々底部

そばに壺形土器の底部2点があり、ともに破壊され逆さまの状態で出土したが、そのうちのひとつは最初底部のみ逆さまに置き、その中央部に人為的な圧力を加えて打砕いたものと想定されている。また、やや下方、床面に近接して口頸部を欠いた箱清水式の壺形土器（第41図38）が拳大の自然石3個とともに出土している。なお、このほかに土製紡錘車の破片1点が整理中検出されたが、その出土地点は遺憾ながら不明である。

主要遺物については以上であるが、遺物包含層において遺物量が圧倒的に多かったこと、土器片のほかに拳大の自然石が相当数みられ炭化物（木炭）が少量ではあるが一面に存在したことなどは注意されることである。

さて、遺物包含層下をさらに掘りすゝめると木炭まじりの黒色土層となり、遺物も僅少で、土坑墓の床面には粘土を敷いた点など見られないが、黒土の床面は敲打して固められたものらしく、容易に検出する事ができた。（第26図）。

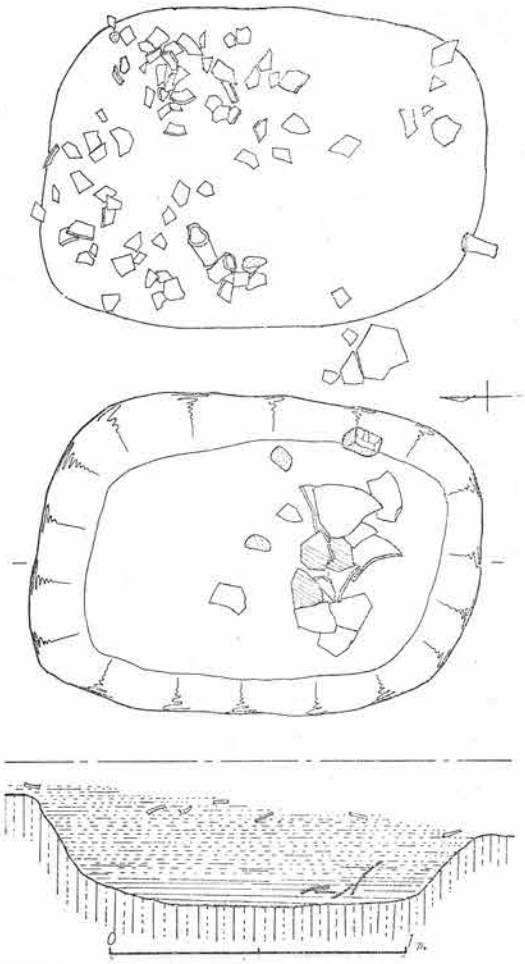
なお、壁外の施設についてはトレンチの項で既述したが土坑墓長軸に平行して北壁南壁外それぞれ30cm離れた地点に相対する6個のピットが発見されている。径は50cm前後で壁はほぼ垂直であり、黒色土層上面から穿たれ、40cmで終っている。ピットの底には土坑上面を被っていた土器片の一部が検出された。

また、同様なピットは土坑墓内北壁寄りにも2ケ見られ、その底は黄褐色粘質土層上面でとまっていた。土坑墓より時期の下る遺構の一部でもあろうか。（小池正彦）

(10) 10号土坑（第27図）

Aトレンチ西半部南方拡張区で1番最後に発見された土坑である。9号土坑の北に近接してあり、その北東隅と南東隅に4号、5号をのせている（第27図）。地表から土坑までは約45cmの深さがあり4号底からは12cm、5号底からは7cmの深さがあった。

土坑は長軸を南北にとり、その大きさは長軸1.5m、短軸1.1mを数え、隅丸長方形プランを呈している。壁高は北端で35cm、



第27図　弥生式第10号土坑（1：25）

南端で25cmを数え、坑底はゆるい舟底状に凹んでいた。坑は、亜黒色土層中に掘り込まれたものであり、坑内の土層は粘土の混じる黒褐色土が大部分を占め、坑底上わずか10数cmの厚さに濃黒色土が存していた。

土坑最上面においては土器片が 1.3 × 1.3 m の範囲に散乱していたが、土器片の並ぶ範囲は必ずしも土坑上にとどまらず、土坑の外側に稍々はみ出している状態であった。これらの土器は壺形土器の細片を主体とし、高坏脚部の破片が比較的多くみられた（第41図29～31）。

これら壺や高坏の破片群の下方は、無遺物層となっており、深さ20cmの坑底付近に至って下腹部を欠損した大形壺形土器が検出された（第41図28）。これは東に向って押し潰された状態で発見され、周囲に他の遺物は無く、ただ拳大の安山岩礫が3ケほどみられるのみであった。

（松沢芳宏）

(11) 11号土坑

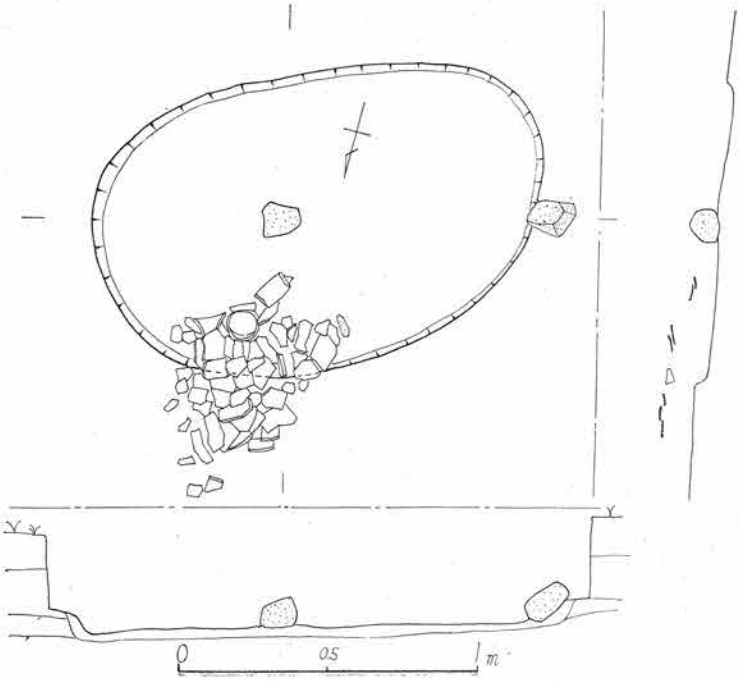
Cトレンチ1区で22号土坑の上部にその一部がかかって発見されたもので、赤色塗彩された壺1ケ体分と甕形土器の破片若干が一ケ処にまとまっていたために土坑であることだけは確認されたが、浅く、後世の攪乱が著るしいためにプラン、規模等について明瞭にすることは出来なかった。

（松沢芳宏）

(12) 12号土坑（第28・29図）

Cトレンチ1区の南側に、それに直交して南北に長いIトレンチ（2 m×5 m）を設けた。このトレンチは南に向って傾斜し、地表面の平均傾斜度は8度である。

層序の状態は、表土である黄褐色土層が北側で5cm浅く、南側の傾斜の強い所では25cmと下降するに従い、漸次堆積が深くなっている。第2層には黒色土層が10～15cm、第3層には黒褐色土層が10cm、基盤層として黄褐色粘土層が最下層に、



第28図　弥生式第12号土坑（1：25）

地表面とほぼ同様の傾斜を示しながら認められている。

第12号土坑址は、このⅠトレンチのほぼ中央に長径1.5m、短径1 mの長楕円形のプランをもって発見された。長軸の方向はN－63°－Eである。本土坑址の確認は、床面及び側壁面に約5cmの厚さで固く張られていた黒色土を若干混入させた黄褐色粘土の張り土によってであって、それによると、土坑址は第2層の黒色土層上面から10cm下方のところから基盤層上部まで掘り下げ先記した張り土で側壁及び床面を補強させている。壁高は北側で5cmと高く、南側では3cmでこれは最少の数値である。土坑址床面は南向して3度前後のゆるい傾斜をしている。

第29図　弥生式第12号土坑

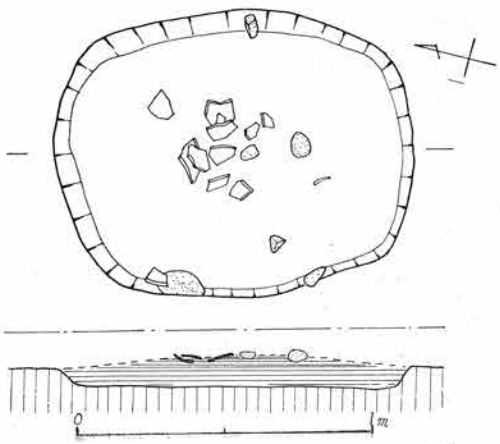
土坑墓内の遺構としては、長径13cm、短径8cm、高さ10cmの角の比較的よくとれた複輝石安山岩礫が中央よりほぼ西に偏した所に床面に接して、また、長径19cm、短径15cm、高さ10cmの複輝安山岩礫が壁面に接して発見された。遺物は土坑北壁下に直径約35cmを計る範囲内に弥生式中期後半に属する壺形器破片がいずれも小片で発見された。出土層位はいずれも土坑址床面より10cmから15cm上に位置した黒色土層中に見いだされ、土器片を境として、その上下には地層の変化は見いだされなかった。

出土した壺形土器は、復元の結果口縁部から底部にかけて半壊された形で、かつては北壁に寄りかかる如く置かれていたものと考えられた。　（笹沢　浩）

(13)　13号土坑（第30図）

本土坑はCトレンチ1区の西端で、23号土坑から5mほど離れている。長軸1.2m、短軸1mの隅丸長方形プランを呈し、壁高は8cmで坑底は水平な状態であった。

土坑は地表から約20cmの深さで、黒褐色土層中に造成されたもので、坑内に少量の炭片の混じる濃黒色土が充満していた。坑底上10cmの間層を置いて、多少の土器片と小礫の並



第30図　弥生式第13号土坑（1：25）

ぶ面があり、坑中央に遺物が集中していた。土器はほぼ壺1個体分で上半分だけ復元できた（第43図104）。

西壁中において、径15cmほどの礫と径8cmほどの小礫が認められ、また東壁にも径7cmの礫1個がみられた。意図的に配置されたものかもしれない。（松沢芳宏）

(14) 14号土坑（第31図上）

Cトレンチ南側に設けた拡張区（Fトレンチ）において第15号、第16号土坑と接して発見された。それらは第12号土坑址とほぼ同様の傾斜地に構築されていた。

14号土坑址の長軸はN－30°－Eで、そのプランは南西部において変化をもつ不定楕円形である。プランの規模は長径80cm、短径62cmである。現地表面から床面までの深さは23cm。壁高は北部で高く10cm、南西部で6cmである。出土遺物は後期弥生式土器で、器形をうかがうことのできるものは口縁部に櫛目文をもつ赤色塗彩の壺形土器片3点及び高坏破片1点、甕形土器破片4点である。いずれも復元不可能である。これらは本土坑址のほぼ中央に床面より10cm程上部に集積されて発見された。（笹沢　浩）

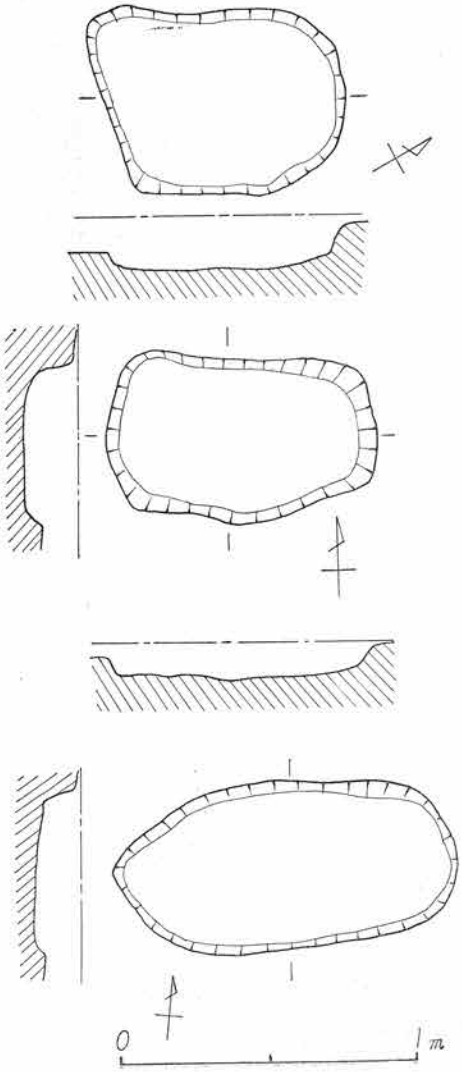
(15) 15号土坑（第31図中）

14号土坑址の下方2mの所に発見されたもので、長軸N－94°－Sである。長径90cm短径60cmのほぼ隅丸方形のプランをもつ。地表面からの高さは20cmであり、壁高は5cm前後であるが、北側の壁高は15cmと高い。出土遺物は後期弥生式壺形土器1ケ体分と思われる小片24点と甕破片2点でともに復元不可能であった。（笹沢　浩）

(16) 16号土坑（第31図下）

長径1.2m、短径0.6mの長楕円形プランの土坑墓で、長軸の方向はN－85°－Eである。表土から床面までは北側で最も深く20cm、南側では浅く12cmである。壁高も北側で高く10cm、南側では5cmである。床面は船底形をもちながらも、約5度の傾斜で北から南にかけて傾斜している。

出土遺物は後期弥生式の壺形土器片30余点であ



第31図　弥生式第14号（上）第15号（中）第16号（下）各土坑（1：25）

り、復元されうるものは皆無であり、出土状態は14号土坑址とほぼ同様であった。（笹沢　浩）

(17) 17号土坑

Cトレンチ2区に発見されたもので、攪乱がいちじるしく、プランを明瞭に把握することのできなかったものである。土坑上面には他の例と同様に土器破片が散布し、壺形土器破片が主体で中形のもの4ケ体分ほど、高坏も2ケ体分の破片があった。（笹沢　浩）

(18) 18号土坑（第32・33図）

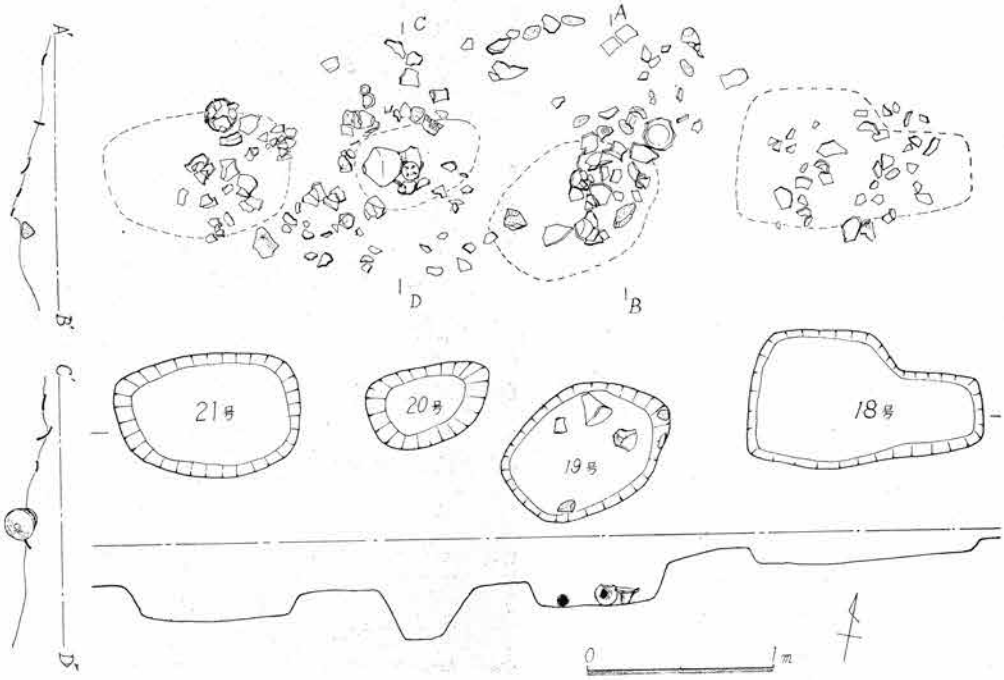
長軸130 cm、東壁寄りの巾の狭い部分で50 cm、広い西側の部分で80 cmの隅丸方形を呈する土坑である。深さ10cm。底面は黄褐色土層を堅く固め、土器破片を敷きつめた状態になっていた。西部の壁の北隅には拳大の石が数個置かれていた。

壁は黄褐色土層でつくられている。出土土器についてみると、完形土器は殆んどなくいずれも破片であった。高坏の脚部が比較的多く出土している。（高橋　桂）

(19) 19号土坑（第32・33図）

長軸90 cm、短軸70 cmのほぼ楕円形を呈する土坑である。深さは15cm。黄褐色土層に底面が造成されている。壁は黒色土層である。この壁中には土器破片や石塊が多く認められた。この土器破片と石をもって壁を固めたものであろうか。土坑内出土土器は全て破片である。この他、注目すべきは非常に細かくそして直ちに破壊消滅してしまったが、骨片と思われるものが検出された。

（高橋　桂）



第32図　弥生式第18～21号土坑（1：40）

(20) 20号土坑（第32・33図）

長軸70cm、短軸40cmの楕円形のプランをもった土坑である。深さは25cmで18号、19号土坑より深い。底面は粘土で固めている。壁は19号土坑同様に黒色土層であり、土器破片を使って壁面を構成している。この土坑の上部で、箱清水式の完形壺形土器が横転した状態で出土した。（高橋桂）

(21) 21号土坑（第32・33図）

長軸90cm、短軸70cmの楕円形をとる土坑である。この土坑の上部の土器は他の土坑上部にみられた土器の量より少ない。底面には土器破片を敷きつめ、土器破片を欠く部分では黄褐色土をもって固めている。深さは25cmである。壁中には19号、20号に認められたと同様に土器破片が置かれている。E トレンチの項でも記述したが、これら4つの土坑は幅2mの狭い範囲内にほぼ一列に並んで黄褐色土層下に発見された。規模、主軸、方向とも同一ではないが、土坑上面にさして厚くはない無遺物層の黄褐色土層が敷かれている点だけは共通している。

この層について、私見では土坑を造成した後にこれを覆うために敷きつめたもので、その上辺に各種の土器を配置せしめたものと考えている。（高橋　桂）

(22) 22号土坑（第34・35図）

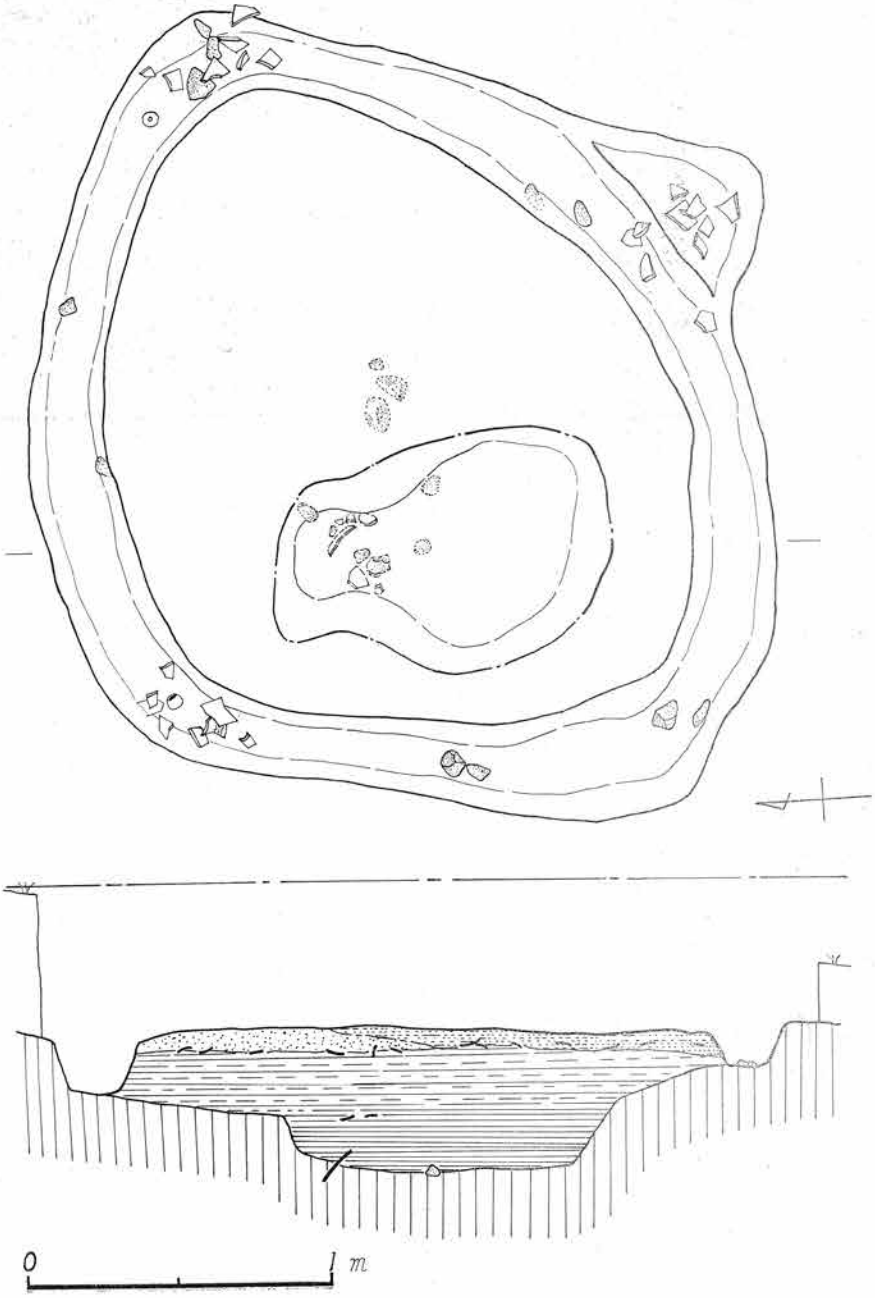
本遺構は周溝をもつ土坑で、Cトレンチ1区東端で検出され、23号とともに土坑墓群の中心に位置している。これは黒褐色土層中に造成されており、地表面から遺構面までの深さは斜面上方（北側）で45cm、下方（南側）で20cmを数えた。

周溝の輪郭は2.4m×2.4mの不整隅丸方形で、溝の巾は北端の狭い所で20cm、南西隅の広い所で40cmであり、深さはほぼ一定し15cmであった。溝の断面はU字形を呈していた。次に南東隅では小さな突出部が認められ、その巾40cm、深さ10cmを測った。

溝中には濃黒色土が充満し、土器と拳大の石が多くみられたが、特に土器はほぼ一定の間隔を置き、周溝がカーブする所に集中していた。

主な遺物として、北西隅に小形無頸壺の完形品1個（第45図133）と土器片数点、北東隅に紡錘車状土製品1個と土器片数10点、南東隅またはその穿出部内には高坏台部破片1個と土器片10数点が発見された。これらの遺物は周溝底より若干浮いた状態で出土した。周溝の内側で

第33図　弥生式第18－21号土坑　上面土器の被覆状態



第34図　弥生式第22号土坑（ 1 ： 25 ）

は土層は2層に分けられる。まず第1層として粘土と褐色土のミックスした層が見られたが、北側半分では、厚さ8～10cmの純粋な粘土層が堆積していた。またこの粘土の一部は周溝底に小さな塊となって点在していた。

第35図　弥生式第22号土坑上面

第1層から第2層に移行する所では、土器片が平面的に散布していた。これは破片だけであり、他土坑の最上面での土器散在状態と近似し、周溝内に見られる土器遺存状態とは性格を異にしている。第2層は粘土質黒色土層であるが、下部に移るに従い、黒色の度合を増していた。この土層は20cmの厚さで黒褐色土層に達していた。この黒褐色土層面が後記する第1次の坑底で、周溝底と同一面をなしている。

1次坑底はゆるやかに中央に向って傾斜しており、中心より西に片寄って濃黒色土の落込んだ主体部土坑が存在していた。土坑は長径1.1 m、短径0.8 mの瓢形状を呈し、南北に長径を置いている。坑の深さは20cmで、坑底の形状は緩やかな舟底状であった。坑内の濃黒色土中では数10点の土器片が発見されたが、特別な状態ではない。ただ小石が瓢形の狭い部分に集まり、加えて大形土器片1個が底に直立していた等、何か偶然ではありえないような感じを受けた。

さて、ここで現状から本遺構の造成過程について推定してみると、まず大きな第1次坑が掘られたのち、その坑底からあらためて小さな主体部土坑が造成されたものと思われ、その土坑上に土が覆われ、ある高さに至って土器片が置かれた後、さらに粘土と褐色土が盛られたものと推定される。

次に本遺構の周溝は、第1次坑の外縁と一致し、また第1次地坑底を掘込んでいないことから、周溝の存在が疑われる場合もある。だが前記したように、周溝内の土器遺存状態は、第1次坑内における第1層、第2層間の土器遺存状態と性格を異にしているのだから周溝が繞らされているものと考えられる。しかし、本周溝が計画的に掘られたものでないことだけはいえよう。周溝の造成された過程は次のように想像される。

主体部土坑に厚く盛られた土は第1次坑底の大半に盛られた状態となる。その土のゆきとどかない所は低い外輪として残るのであるから、逆にそれを利用して周溝が造られているものと思われる。従って本周溝は、土坑に土が盛られると同時にめぐらされた溝といえるだろう。（松沢芳宏）

(23) 23号土坑（第36図）

前記した22号土坑に近接して、23号土坑が認められた。これは周溝を回らした土坑と推定されるが、後世の撹乱を受けているため、明瞭に把握し得ない状態であった。斜面上方（北側）は道路用地外であるので未調査であるが、調査済みの部分から判断して周溝の規模は5 m×4 m程度と推定され、長楕円形をとるものと思われる。

周溝のレベルは22号と同一面であり、また同じく黒褐色土層中に造成された遺構である。ただ主体部と思われる土坑の掘られているレベルは周溝の掘られている面と同じと思われる。

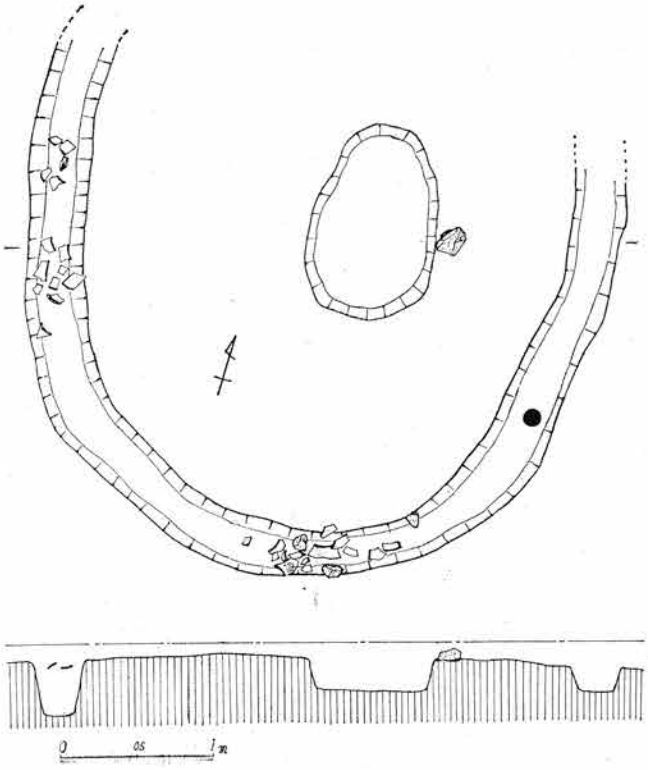
溝の巾は広い所で40 cm、狭い所で30 cmであり、深さは左側周溝の斜面上方で45cm、他は約15cmと場所によってかなりの差異がある。溝中にはやはり濃黒色土が入っており、土器片の存在している位置も第36図に示すように地点により集中している。

周溝内側の中心より稍々東に位置して、長径1.3 m、短径0.8 mの主体部と思われる楕円形土坑が掘り込まれていた。しかし、この付近が最も他遺物混入の激しい地点で、須恵器片、土師器片等が箱清水式土器と混在しさらに決定的なものとして窯滓が発見された。周溝内発見の遺物は箱清水式土器に限り、また土坑の位置も適当であるので、土坑が周溝と関連した主体部であることは推定できる。（松沢芳宏）

(24) 24号土坑墓（第37図）

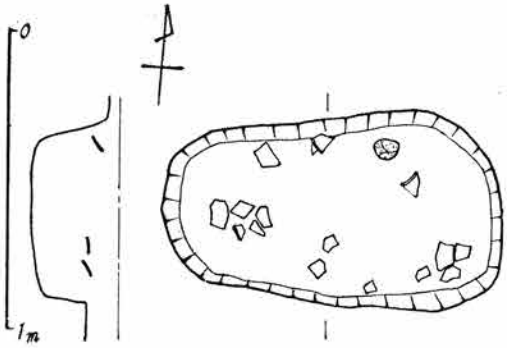
本土坑墓は9号土坑墓の西側60cmの地点にあり、その長径は東西に1.2 m、短径はもっと巾広い東側において0.7 mを示し、その深さは20cm前後で平坦の床面を呈するややくずれてはいるが、隅丸方形の土坑墓である。

現地表面から床面までの深さは60～68 cmで、表土層が10cm被い、その下層に35cmの厚みをもつ黄褐色土質土層がみられる。表土層内での遺物出土はなく、次の黄褐色粘土質土層中より弥生後期の箱清水式土器小破片がすこし出はじめるが、その出土状態は全体的に散



第36図　弥生式第23号土坑（1：50）

布しているのではなく、土坑墓上部を中心とした地域に限られている。しかもその下には黒色土層が堆積しており、この接触面に弥生後期の大きな壺形土器破片13点と高坏破片1点および拳大の自然石2個が発見されている。高坏を復元すれば南西隅に坏を上にして据えられていた。



第37図　弥生式第24号土

さて、土坑墓内部には木炭の混合した黒色土層があり、その壁は厚さ1cmの粘土で被われ、しかも土器片が粘土の中にくい込んでいる。このことは床面においても同様であり弥生後期の小破片数点が平坦部の薄い粘土上にみられる。

（小池正彦）

第4節　土坑墓の考察

東日本における弥生式墳墓の研究は昭和14年の女方遺跡（註1）や岩櫃山遺跡（註2）の調査に始まる。これらの墳墓は西日本のそれが甕棺墓・配石墓・支石墓・土坑墓と種類あるのに対し、いずれもが土坑墓であったので弥生式墳墓研究の焦点からいささか外れた存在であったが、現在までに30年に近い歴史が形づくられていた（もっとも、女方遺跡の調査者である田中国男氏は祭祀遺跡と解され、岩櫃山や新田山ではその出土した土器により焦点が当てられていたため、東日本における弥生式時代の墳墓――共同墓地として考究されるには25年の杉原教授の発表まで待たねばならなかった（註3））。

以来、西日本に比すればその数寥々たるものがあるが、同種資料の集成が進み、30年には東日本の弥生式墳墓に関する二つのレポートが発表されている。（註4）

ただ、考えねばならぬところは、その一人・亀井正道氏の掲げられた資料10例のうち、8例までが弥生中期に属し、地域も相模・下総・常陸・下野・上野・磐城・岩代など関東地方とそれに接する太平洋岸域に偏っていることで、この時点における東日本弥生式墳墓の研究は時期と地域が限られたものであることが知られる。なお、その墳墓――土坑の様相は小規模な円形プランで相当の深さがあり、うちからは乳幼児の遺骸を納めた甕棺や供献祭祀用の完形を保つ飾られた壺、或いは勾玉・管玉などの玉類が発見されている。

30年以降、関東地方では引き続いて良好な資料が増加を見せている。人面土器の発見が相次ぎ、その何れにも埋葬と関係ありとする考察がなされたことや（註5）、天神前（註6）や出流原遺跡（註7）のピット内から成人人骨を納めた壺が発見されて複葬の事実が明らかにされたことも特筆いたさねばならないが、これと共に36年頃から従来のそれらとは時期・性格を異にする墳墓の発見が始まったことも注意いたさねばならない。36年に下津谷達男氏は野田市堤台遺跡（註8）で、38

年には静岡県浜北市芝本遺跡（註９）で周溝を繞らす遺溝の発見と、39年には大場磐雄博士による八王子市宇津木の方形周溝墓の発掘が行なわれた。（註10） 時期はいずれも弥生後期も末であり、宇津木遺跡に例をとれば方形土坑を囲んだ周溝中から穿孔されて明らかに仮器としての性格が与えられている土器が一定の間隔を置いて発見されている。次期 ―― 古墳時代の墳墓に至る線がおぼろ気ではあるが髣髴としてきたのである。

これらの発見が機となって、同様例は五指を屈するに至り、長野県においても40年の８月に飯山市須多ケ峯遺跡で小判形の周溝を繞らした２ケの土坑墓が発掘され、その１基内からは鉄鉇や硬玉製勾玉１顆が検出された。周溝内からは弥生後期の壺・高坏・甕が一定の間隔をとって出土している（註11）。また同年秋に行なわれた中野市栗林遺跡の第三次調査（註12）においては、従来、土器が多量に出土するも住居址的遺構が露呈できずに「土器溜り」と称されていた遺構が土坑であろうと云う見極めがついた。そして、昭和41年、県道長野・中野線の付替工事が中野市安源寺地籍で行なわれるに至り、同地に存する安源寺遺跡の緊急発掘調査が行なわれて24基にのぼる土坑墓群が発見された。東日本における弥生後期の墳墓様相を明確化する一資料が加わったのである。

土坑墓のあり方

安源寺遺跡の土坑は現在判明しているところでは24基であるが、26年発掘の遺構（註13）も土坑墓と考えられるに至ったので、30基前後はこの辺一帯に存するらしい。斯様な遺跡には全面発掘調査が求められるのであるが、緊急発掘調査の故に僅か４本のトレンチ設定に留まってしまった。しかし、その後における土取り工事中の観察によれば土器片の大量出土が見られなかったとのことであるから、工事区域内の土坑数は前記の23基に抑えて良いものと思われる。

即ち、21号以西、８号以東には土坑の無いことから土坑墓群東西の広がりが判り、Ｄ・Ｂトレンチでは未発見であったところからその幅も大凡は限定でき、この墳墓群は延徳沖の沖積地を臨む丘陵南縁（水田との比高差17ｍ）から５ｍほど離れて幅20ｍほどで長さ70ｍ前後のベルト状に構成されているものと思われた。現在のところ、分布密度の高いところはＡトレンチ西半部の南方拡張区で、９号を中心に２・24・５・10・４・３号、少し離れて６号・１号がある。これに次ぐのがＥトレンチで、18号から21号までが一列に並んでいる。もっとも23基の土坑は土器様相から３期に区分され、また９号を中心とする７基の土坑はその切り合いの状態から更に詳しい前後関係が判明しているので、一時期に限って見る時には70ｍのベルト内に散在構築されていると解するのが妥当である。なお、集落との関係については土坑墓の時期細分後で触れるので、ここでは沖積地に面した丘陵端部に構築されていることと、工事終了後、カッティング面に現われた黒土層の落ち込みから、土坑墓ベルトの北方に接して溝状遺構が存したらしいことだけを注意しておきたい。

土坑墓の様相

個々の土坑墓の様相については、前節での報告に詳しいが、要約すれば次頁の表の如くである。プランは栗林式土器片を出土した６号だけが円形で、他は楕円形乃至は隅丸方形をとる。

土坑	位置	平面形	主軸方向	規模 (m)	壁高 (cm)	施設	床面状態	土坑内部の状態	その他	相対年代
1	A 1	楕円	N−32°−E	1.4×0.8	19	壁上縁に小礫配列、西壁外に礫1ヶ	粘性ある黄褐色土を入れて敲打	上面に土器破片密に散布		3期
2	A1拡	〃	N−122°−S	1.2×0.8	15		南へ傾斜	上面に土器破片散布（特に中央東寄り）上縁より−10cmまで落ちこむ	9：24号の上に築く	4〃
3	A 1	隅丸方	N−75°−E	1.4×0.5	〃	南壁下部に礫配列	西へ傾斜	上面に土器破片散布		4〃
4	A2拡	楕円	N−18°−E	1.1×0.8	23	東壁上縁に礫1ヶ	南へ傾斜	上面から床面直上まで土器破片散布、土器量は下方に多し、壷は据えられている	10号の上面に築く	4〃
5	〃	隅丸方	N−165°−S	1.4×0.8	20			上面に土器破片散布	〃	4〃
6	〃	不整円		1.2×1.0	10	東西壁上縁に対称的に礫1ヶずつ配置	南へ傾斜	床面上に土器破片散布		1〃
7	A 3	隅丸方	N−63°−E	1.1×0.9	10		東へ傾斜	上面のうち中央北寄りに土器破片散布		3〃
8	〃	〃	N−152°−S	1.1×0.9	18		南へ傾斜	上面から床面直上まで土器破片散布		4〃
9	A1拡	〃	N−76°−E	2.4×1.5	15	上面中央西寄りに磐石1ヶ	水平	上面に土器破片密に散布、石斧刃部破片、袖珍土器紡錘車副葬壷は据えられている	南北壁外に3ヶ宛柱穴状ピットあり 土坑内北壁寄りにピット2ヶあり。本址との関係は不明	3〃
10	〃	〃	N−7°−E	1.5×1.1	35		軽い舟底状	上面に高坏破片散布、床面直上南壁寄りに下半部を欠く大形壷1ヶ	4、5号下に築く	2〃
11	C 1									4〃
12	I	楕円	N−63°−E	1.5×1.0	12	西壁上に礫1ヶ 土坑内中央に浮いた礫1ヶ	水平	上壁寄りに壷1ヶ体分		2〃
13	C 1	隅丸方	N−161°−S	1.2×1.0	8	壁上縁に小礫散布、中央上面にも小礫	〃	上面中央に壷1ヶ体分破片散布		4〃
14	C2拡	〃	N−30°−E	0.8×0.6	15		〃	上面に土器破片散布		4〃
15	〃	〃	N−94°−S	0.9×0.6	13		〃	〃		4〃
16	〃	楕円	N−85°−E	0.6×1.2	16		〃	〃		4〃
17	C 2									3〃
18	E	隅丸方	N−80°−E	1.3×0.8	10		西に傾斜	上面に粘土を張り、その上に完形をなす壷・甕高坏存在		3〃

土坑	位置	平面形	主軸方向	規模(m)	壁高(cm)	施設	床面状態	土坑内部の状態	その他	相対年代
19	E	隅丸方	N－34°－E	0.9×0.7	25	土器片をもつて壁を補強	水平	上面に粘土を張りその上に完形をなす壺・甕・高坏存在		3期
20	〃	楕円	N－55°－E	0.7×0.4	23	壁の傾斜相当に大	〃	〃		3〃
21	〃	隅丸方	N－80°－E	1.0×0.7	18		〃	〃		3〃
22	C 1	洋梨子	N－5°－E	1.1×0.8	20	土坑外に不整方形の周溝あり（2.4×2.4m）遺物等周囲に出土	舟底状	上面に土器片散布させその上に粘土を張る		4〃
23	〃	楕円	N－166°－S	1.3×0.8		土坑外に長楕円形の周溝あり（5×4m）			土坑内、後世の攪乱をうける	3〃
24	A1坑	隅丸方	N－85°－E	1.2×0.7	20			黄褐色土層下より土器破片散布炭化物もあり		3〃

第4表　安源寺遺跡弥生式土坑墓一覧表

長軸方向はN－18°－Eの4号からN－66°－Sの22号まで広角度に亘っており、頻度から4グループほどに区分できるが、時期別に、または規模や内容の点などから窺えばあまり意味はなさない様である。また土坑の壁は大部分が不明瞭で、壁中に土器片の喰い込んでいるケースも二、三存するが、これらの土坑が当時の生活面と考えられる表土下の黒色土層上面を穿って構築されたがためである。その深さについて、一覧表には掘り凹められた黄褐色粘土層の深さだけを記したので10～15cmが普通で、12号に至っては黄褐色粘土層の面が軽く削られている程度である。しかし、先記した表土下の黒色土層上面から計測すれば15～40cmプラスすることができるので、壁高は浅いもので25cm、平均して40～50cm程度となる。須多ケ峯墓坑の深さは25cm、宇津木墓坑は40～45cm、また平原の割竹木棺形の土坑の深さは50cm（註14）で、須多ケ峯や平原では上にマウンドを設ければ充分に埋葬は可能であると考究している（もっとも、40cmの深さがあれば必ずしもマウンドを考えなくても埋葬はできうる。筆者等は安源寺土坑は封土を有していなかったであろうと考えている）。規模については土坑内の施設を勘案して考えなければならないが、円形の6号や19号・20号などは蹲居の姿勢をとらせなければ埋葬はできかねるが、鹿児島島の峰埋葬遺跡（註15）の実例などからすれば他は仰臥屈葬が可能であり、9号には伸展葬による埋葬も考えられる。

土坑内の施設として、床面は大体において水平であるが、坑底を黄褐色粘土層上に置いたもののうちには同層が北から南へ流れているので、その傾斜に従っているものもある。坑底には1号の様に粘性ある黄褐色土を入れて敲打したケースもあって、構築時に粘土層の面を敲打すると云った程度の作業は行なわれたことであろう。坑内には組合せ木棺の側板痕を検出していないので、おそらくは無棺であったのであろう。したがって、土坑上面の土器片散布状態をも考慮に入れて、土器群上を更に黄褐色土や粘土で被った9・22・23号など一・二の例は除いて、多くの土坑はマウンドの

ない埋葬法をとったものと解している。坑底上には柱穴らしき小孔も存していない。ただ石塊が落込んだ状態で底面より5乃至10cm浮いて発見されているケースはあって、その位置は中央より、東寄り（2号）、西寄り（9号）、中央（12号）、南寄り（13号）、北寄り（7号）と様々である。多くは径10cm程度の拳状の石塊であるが、ただ9号のそれだけは径35cmを算える安定のよい円形の安山岩で、仮りに東に視線を向けて仰臥伸展する遺骸を想定すればその頭部上に置かれていた公算が強い。

なお、土坑上縁に沿っては小礫の配される例が多く、直径15cmほどの目につき易い石塊を上縁の東・西、或いは北端に据え置いている。北端に置かれているものは9号のみで、1・12号は西端に4・23号は東端に、6号は東・西両端に置いている。これだけのケースで云々するは難かしいが、土坑の位置を示す標石としての役割りを果しているものではなかろうか。

さて、安源寺土坑墓群を特徴ずける最大のものは、土坑上面に現われている土器破片の集積である。二、三の例外はあるが徹底的に破壊され、その破損面は磨滅が著るしく、復元作業は難渋を極め且つ充分ではなかった。一応復元できたもの（図上復元も含める）と、復元できずに放擲した破片数を列挙すると第5表の如くで、例えば9号土坑出土の土器片は壺形土器破片1842、甕破片292、高坏破片36点と云う物すごさで、このうち復元できた壺は僅かに2点、それも上胴部だけであった。

して、これらの土器破片はいずれも表土下15乃至25cmから、或いは更に横たわる黄褐色土層下から始まる黒色土層上面から出土し始めて土坑底面に至っている。

土坑によっては土器量の上方に多いもの、下方に多いもの等々あるが、坑内を埋める黒色土を15から20cm下ったところに位置するのが最も多い。現在は小破片となって発見されてはいるが、平坦部に設けられている土坑よりもその北方――地表傾斜が転換をしていて土砂の堆積の早かったEトレンチ発見土坑に塗彩された赤色は色褪せてはいたが比較的完形品の多かったことから、埋葬時に土器は完形をとっていて、それが地表に永らく放置されたが故に破壊されたものも一部はあるものと思われた。

しかし、大部分の土坑においては2・4・6・9・11・18～21号に見られる如く、土器底部が据え置かれた恰好で発見され、その上部周辺に復元不可能な状態で散乱しているので、土器を一応据え置いた上で意識的に破砕したと考えるべきである。土器片が黒色土層上面より少しく下った位置に多いのは遺骸消滅後に陥没した結果であろう。

斯様に土坑墓上に土器を置く例は附近の栗林遺跡などで知られてはいるが、全国的に見た場合には稀少なケースであるらしい。土井ケ浜201号（註16）では中期の土井ケ浜Ⅲ式壺6ケが一ケ所にまとまって出土し、その下から1体の人骨が出土したと云うし、鳥ケ峰では遺骸上部を覆うⅢ号覆石上に細かく砕かれた壺破片が副葬され、古墳時代に下るが島根県安来市鍵尾遺跡（註17）のA地区においては器台と壺が多数密接して発見されたとのことで、類例は少なく、しかも副葬された土器は供献的な性格の強い壺・器台である点が本遺跡と違っている。ただ、地域と時期は異なるが、埋葬後、覆土上に石を積み重ね、同上に土器の置かれたケースが北海道御殿山報告（註18）中に記

土坑	壺		甕		高坏		その他		備考
	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	
1		490 大形品2－3ヶ体分赤色塗彩	2	41	2	4		3 栗林式壺 4 柳町式壺	石斧 1
2		157		13 1ヶ体分	1			1 柳町式高坏	
3		211 2－3ヶ体分 大形品、赤色塗彩	4	11		5		1 栗林式	
4		121 中形品2ヶ体分		15	1			1 栗林式	
5		59 中形品2ヶ体分 赤色塗彩		7		2			
6		51 2ヶ体分 栗林式		10 栗林式				1 柳町式	
7		312 中形品2ヶ体分 赤色塗彩		32 2ヶ体分		8 1ヶ体分		11 栗林式壺 1 柳町式甕	
8		88 1ヶ体分 赤色塗彩		30 1ヶ体分	1				
9	1	1842 大形品10ヶ体分以上		292 4～5ヶ体分	1	36		3 栗林式 9 柳町式	石斧 1 紡錘車 1
10	1	大形品3ヶ体分		少なし		10			
11		1ヶ体分 赤色塗彩		8					
12	1	1		2					
13		1ヶ体分 底部破片なし		3					
14		3 赤色塗彩		4 1ヶ体分にならず		1		1 栗林式	
15		24 1ヶ体分		2				1 柳町式高坏	
16		34 1ヶ体分		4				6 柳町式甕	
17		534 3～4ヶ体分	1	47		14 2ヶ体分	2	1 柳町式	その他の完形品は手燈り鉢
18	1	大形品5ヶ体分	3	20 2ヶ体分		2	3	1 柳町式壺	その他の完形品は箱清水式壺2鉢1
19		164 大形品3ヶ体分 うち1ヶ底部を欠く2ヶ底部穿孔	2	36		8	2	1 柳町式片口	その他の完形品は箱清水式無頸壺1 柳町式高坏1
20		55 2ヶ体分 底部破片なし		13		4	1		その他の完形品は柳町式甕
21	1	301 下腹部の破片少なし	2	77		18 3ヶ体分	3	13 柳町式甕 4 柳町式高坏 1 柳町式片口	その他の完形品は箱清水式鉢2 柳町式甕1
22		大形品2ヶ体分		少なし		少なし			
23		121 3ヶ体分		28		4		5 栗林式 10 柳町式	
24		13				1			

第5表　安源寺遺跡弥生式土坑墓出土遺物一覧表

載されている。その土器は縄文後・晩期のもので、完全なもの、破壊されたもの、土器の底に穴をあけたもの、あらかじめ用意した副葬品土器などいろいろな種類があるとのことである。

もっとも、弥生後期には鹿児島・成川群集墓（註19）の様に2号人骨に副葬された壺の下腹部に

は小孔が穿たれて壺としての機能を失なわせており、報告者は「小形の研磨・赤色に塗られた壺には穴をあけてはいないが、実用に供されていたと思われる壺形土器にかぎって穿孔している。小形壺のように祭祀用としての用途を持っていない壺形土器を副葬に用いる場合、穴をあけることが慣習となっていたのではなかろうか」と述べられており、同様な例は岡山・上東（註20）、茨木・上穂積（註21）の壺棺にも、また宇津木の周溝内発見壺にも窺われ、その点からすれば安源寺土坑の土器破砕現象は広く九州から中国・畿内、そして東日本までひろがっていた仮器とするべく土器本来の機能を喪失させる風潮の一つとして理解することもできる。殊に9号出土の高坏坏部中央に焼成後穿孔のある例(第41図46・47) 19号の壺・甕の底部に同じく焼成後穿孔のある例(第42図75・76）などはより強調できる資料となろう。

器形については壺・高坏・甕と貯蔵・供献・煮沸の三形態がそろっているが、量的には壺が第一で、次いで高坏である。貯蔵と供献の二性格を合せ持つ赤色塗彩の壺や、供献の具である高坏が甕よりも多く据えられていることは興味深い。また甕にしても脚付のものが少なからず存したことから、その甕が単なる煮沸の具ではないことを思わせる。

土器以外の副葬品としては、石器では石斧・土製品では袖珍土器と紡錘車が見受けられる。出土をした土坑は1・9・22・23号で土坑の中では問題のあるものである。

1号出土の石斧は土坑上面を覆う土器破片の内面に密着した形で発見された。玉斧とも云うべきものか。小形の緑色を呈した硬度の高い偏平片刃石斧で、あまり実用的な性格は窺われない。9号・23号址では閃緑岩製の太型蛤刃石斧の刃部破片が土器破片に混って土坑上面から出土をしている。

広大な氾濫原に恵まれた千曲川流域において、弥生の磨製石斧類は中期末の百瀬期に盛行をみるが、後期に入れば消滅をする。少くとも筆者の管見に触れるところでは弥生後期遺跡から太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧の出土を聞かない。（註22） しかも発見された石斧は非実用的であり、刃部だけの欠損品である。時期の異なる破損品や非実用品の副葬 ── 閃緑岩製の石斧を鉄斧の模造と見立てて除魔の具に供されたとするは行き過ぎではあろうが、何らかの意味のあることだけは確実である。

紡錘車は、糸を紡ぐ、撚るに必要な弾み車で、土製・石製の二種があるが、本遺跡出土のものは土製で、しかも裏面平坦、表面が僅かに盛り上って研磨されているものが多い。古墳時代に入ると滑石製のものが古墳中に副葬され、また祭祀遺跡からも屢々発見され、その表面には直弧文など呪術的文様が描かれて本来の機能をはずれた様相を見せているものがあり、それらは截頭円錐形をとっている。

筆者はかつて、巴形銅器との関連において考えてみたことがあったが（註23）、本遺跡において土坑墓内から、しかも22号においては周溝内から等間隔に出土をした点などから、あらためて考えてみたい遺物である。

なお、9号と22号出土の袖珍土器は一つは壺形土器、一つは無頸壺のミニチュアで、あきらかに仮器である。

土坑墓の編年

発見された土坑墓のうち、重複しているものはAトレンチ西半の拡張部であって、9・10号上に5・4・2・24号が存在している。その重複状態については、新らしい土坑が先行時期のそれを切り込んでいると云うものは1例もなく、総てその上、その上へと造られている。死者のための土坑を穿つに当り、下方から先に逝った人に供えた土器片があらわれた場合、それを毀してまで深い坑を掘り込むほどの無神経は持ち合せてはいなかったであろう。そのことは数年前、或いは十数年前につくった土坑の位置がもはや不明になっていたことを示し、マウンドなど地上の痕跡の乏しかったことを物語っている。

ところで、本題に戻るが、この様な状態は墳墓群中の一劃に限られているので、重複状態だけで土坑墓の編年を樹立することもできず、やはり出土土器の様相から推して行かなければならない。まず、古く置かれるものに安源寺Ⅰ類土器を出土した6号址がある。円形プランをとっている。そして、同類の土器(栗林2・3類)(註24)を出土した栗林第Ⅱ次調査時(註25)・第Ⅲ次調査時発見のピットも円形で、従来、東日本で発見されている中期のピットのあるもの ―― 原流(註26)・新田山(註27)・女方・野沢(註28)・南御山(註29)のそれと同形で、6号の壁高は黒土層上面から計れば50cmを算えるので深さの点からも似通っている。ただ、従来の東日本のそれには完形土器が副葬され、複葬の痕を示すもののある点が異質であったところであるが、女方や棚倉(註30)に見られたピット内の土器が総て完形であると云う訳のものでもなく、例えば女方33号において、竪穴内の土器は離れ存し、形殆んどなしと記載されている。

また、女方・野沢・南御山からは硬玉製管玉が副葬品として発見されているが、信濃においても中期の栗林式から百瀬式にかぎって玉類を壺形土器中に収めて埋納するケースが数例あり、いずれも単独に発見されている。岡谷・天王垣外(註31)・長野・吉田(註32)・佐久・御社宮司(註33)・須坂・須坂園芸高校校庭遺跡(註34)がそれで、うち、須坂園芸高校校庭遺跡では限られた範囲内から2点の完形土器と11点の管玉、及び多量の土器片と木炭片が出土した。また発掘の際、床面、壁を思わせる様な堅緻な土層には遭遇せず、木炭片は出土したが焼土は検出されなかった由であり、これらの資料を媒介とすれば今後において安源寺6号土坑との間を一線で繋ぐことができるかもしれない。6号に続く土坑は10号・12号で、壺形土器の形態から後期も前半に置かれると思われる。プランは12号が楕円形で、その出土土器は壺形土器1点と甕形土器破片であり、10号は隅丸方形をとり、出土土器は大形の壺上半部と数ケの赤色塗彩された高坏である。

副葬品の系列から云えば、中期末の壺中心に対して高坏が新らたに加わった訳である。また、12号の壺は北壁に寄りかかる様な形で破砕していたのに対し、10号では土器片は土坑上面に散布していた。どうも安源寺における葬列の変化はこの辺にありそうである。即ち、円形プランが東日本中期の土坑の平面形であったのに対し、隅丸方形的なそれは大津・南滋賀(註35)・茨木・安威(註36)・尼ケ崎・田能遺跡(註37)発見土坑など西日本において中期頃から多く見られる土坑のプランであり、また、古墳時代の葬法に連がって行く仰臥屈葬～仰臥伸展葬のための形態でもある。土器型式の上から云っても後期は中央の様式流出の時代であり、信濃 ―― 千曲川流域の後期土器は特

にも濃尾・東海地方と親縁性が強いので、保守的性格の強い葬制面においても少なからぬ影響があったのであろう（もっとも、百瀬期にも隅丸方形をとる土坑―栗林遺跡における京大発掘時の矩形石積遺構（註38）、同じく第Ⅱ次調査においてトレンチの８・９区に亘って発見された長さ１ｍ、幅45ｃｍ、深さ15ｃｍの隅丸方形土坑の存在から、東日本的な墓制と西日本的な墓制とが或る期間この北信濃において併行して行なわれ、その間に徐々に西日本的墓制の採用が優越して行ったとも考えられる）。

次に、残った総ての土坑が置かれる。ただ、甕や高坏形土器の形状から７・17・21号は若干遡るらしく、土坑の重複状態から見れば先記した如く、９号より後に２・３・４・５号が掘鑿されている。そしてこの整った隅丸方形をとる２～５号とほぼ等しい規模・形態をもつ８・13～16号も同一の時期に築造されたと考えてよい。また24号は２号より古く、その形の未だ定形化に至らぬところから７・17・21号と同時期辺に置くことが妥当であり、Ｃトレンチ東端の３基は攪乱されていて定かではないが、22号は周構内の土器型式から下降が考えられている。かくて一応表示をすれば第６表の如くに四時期に相対編年することができる。

時　　期	土　坑　墓　名
１期（中期後半）	６
２期（後期前半）	10・12
３期（後期後半Ⅰ）	１・７・９・17～21・23・24
４期（後期後半Ⅱ）	２～５・８・11・13～16・22

第６表　安源寺遺跡弥生式土坑墓編年表

そして、３期、４期になると土坑数も増え、形態も隅丸方形になり、規模も大凡に似通ってくる。そして特に注意しなければならないのはこれら定形化した一群中に特殊な土坑の一、二見られることで、３期においては23号、４期では22号や26年発掘土坑が挙げられる（９号は規模の大きいことと、副葬破砕された土器量の膨大なこと、石斧・紡錘車・袖珍土器を出土したことで調査時には論議されたが、そのプランは３・４期に通有な隅丸方形をとっているのでここでは取り挙げなかった）。

22・23号については、後世の攪乱を受けているのが残念であるが、共に宇津木・須多ケ峯と同様な周溝を繞らしている点が問題であり、また22号からは周溝内から間隔を置いて袖珍土器や紡錘車が出土した点については野田堤台や浜北芝本、それに宇津木や須多ケ峯と親縁性が認められて興味深い。そしてこの２ケの土坑は共に安源寺土坑群中の上方、且つ中央辺に位置している。この点に何んらかの意義が認められはしないだろうか。土坑自体については他の土坑と何らかわりがないうえに特別な周溝を有しているとは云え、北方に認められた溝状遺構以南の共同墓地中に位置している訳であるから、土器型式をも勘案して宇津木土坑に先行するものであり、むしろ南滋賀の墓制と共通する点がある。ともあれ、共同墓地の中央に特定な個人の墓がつくられたと云う現象は問題とすべきことである。

土坑墓と集落

以上、24基の土坑墓の形状・副葬品のあり方、4時期に分けての編年を考えて見た。第1期と第2期との間には葬制上いささかの飛躍があるらしいことや、第1期のそれは東日本弥生中期の土坑と関連の持てそうなことや、第2期の土坑からは西日本のそれと親縁性のあるらしいことを、また、第3・第4期においては特定な個人の墓が出現するらしいことを記述してきたが、あらためて集落との関係の上からこれらの考えを再検討いたし、安源寺集落の復元図を描いて結びといたしたい。

一般に土坑墓は沖積地に臨んだ丘陵上縁部に多く設けられていて、これは安源寺遺跡も同様である。この丘陵上縁に位置する土坑に仲間を葬った人々の集落はどこに求めたらよいだろうか。

千曲川流域における中期後半遺跡の立地は氾濫原に細流の注ぐ地点に点在するのが常であり、その規模はさして大きくはない。栗林遺跡では土坑は1基が集落の北限、1基は南縁に発見されたが、集落址のほぼ中央に設定されたトレンチ内にも2基ほど露呈をして、集落に接近して設けられたことが判明している。そして、安源寺遺跡において中期後半の土器片は今回の調査では24号の西方と6号址に近接している石組竈の附近から発見されている。また26年の調査時にもトレンチ内から土器片の出土を見ている。遺跡の主体は既出資料の探訪からもこの丘陵縁端部にひろがっているものの様である。

次いで、弥生後期に入る。遺跡の規模は中期のそれよりも拡大すると同時に中期におけるアンクメーネの克服が始まり、丘陵上に大きな面をもった集落が形成されるに至る。本丘陵では丘陵縁辺部には無く、勾配4度で土坑墓群の北方を75m登ったところの比較的平坦な丘陵上面に発見されている。現在ここは一面の林檎園で、ここまで登ると南方の氾濫原は見えず、代りに西方が拡けて千曲川の流れや信越五山が望まれる。未だ正式な調査を受けてはいないが、丘陵上面で土坑墓群から130 m離れた宮裏地籍で1住居址の存在が確認されている。しかも、集落との間には溝が走って、生きる者の地と死者の地とを判然と劃している様であった。

時代が更に下り、弥生最末期（柳町式期）（註39）に入るや、集落は丘陵麓前方の氾濫原に向って進出をして行く。集落と墓地とは水平的に、垂直的にその距離を増して行ってしまう。山口県の壺棺墓を資料として、前期は集落内部、集落に近い場所に、後期はかなり離れた同じ高度の台地で群集墓を形成し、土器が土師器様相を帯びてくる頃になると集落址と水平距離が遠くなると共に、垂直的位置関係を生じ、同時に単独墓の様相が強くなると云う小野忠凞氏の考察（註40）は、中部山岳地帯中の善光寺平においても適応できた訳である。　（桐原　健）

註1.　田中国男「弥生式縄文式接触文化の研究」昭19年

〃2.　長田実「上州岩櫃山岩屋遺跡発掘記」考古学11の2

〃3.　杉原荘介「東日本弥生式土器文化における葬礼」日考協5回総会研究発表要旨

〃4.　亀井正道「東日本弥生式文化における墓制について」国学院雑誌56の2
　　神沢勇一「弥生式時代の生活――壙墓」日本考古学講座4（河出書房）

〃5.　亀井正道「人面土器の新例」考古学雑誌43の1
　　坂詰秀一・関俊彦「弥生後期の人面土器について」考古学雑誌48の1

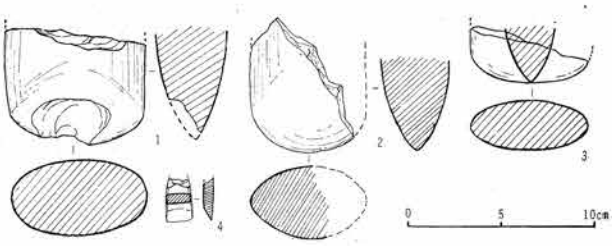
註 6. 杉原荘介・大塚初重「千葉県天神前遺跡における弥生時代中期の墓地」日考協30回総会研究発表要旨
〃 7. 杉原荘介・大塚初重「栃木県出流原における弥生時代の墓址群」日考協31回総会研究発表要旨
〃 8. 下津谷達男「野田市堤台遺跡」上代文化35。
〃 9. 下津谷達男・大谷純一「静岡県浜北市芝本の特殊遺構」日考協38年大会研究発表要旨
〃 10. 大場磐雄「東京都八王子発見の方形周溝特殊遺構」日考協39年大会研究発表要旨
〃 11. 高橋桂「北信濃須多ヶ峯弥生式墓坑調査概報」考古学雑誌51の3
〃 12. 林茂樹・金井汲次・桐原健「長野県長野市栗林遺跡第三次調査概報」信濃Ⅲ 18の4
〃 13. 田川幸生・桐原健「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」信濃Ⅲ 14の4
〃 14. 原田大六「実在した神話」学生社
〃 15. 盛岡尚孝「鹿児島馬ヶ峯埋葬遺跡の調査」日考協36年大会研究発表要旨
〃 16. 金関文夫・坪井清足・金関恕「山口県土井ヶ浜遺跡」日本農耕文化の生成
〃 17. 山本清「島根県安来市鍵尾の土器群とその土師器」日考協29回総会研究発表要旨
〃 18. 河野広道・藤本英夫「御殿山墳墓群について」考古学雑誌46の4
〃 19. 河口貞徳・河野治雄・重久十郎「成川弥生式群集墓」考古学雑誌43の4
〃 20. 間壁葭子「岡山県都窪郡庄村上東遺跡出土の壺棺」瀬戸内考古学2号
〃 21. 田代克巳「茨木市上穂積出土の弥生式壺棺」古代学研究21・22
〃 22. 桐原健「石器より見た信濃弥生式文化の一様相」信濃Ⅲ 11の12
〃 23. 桐原健「上総金鈴塚出土の巴形飾金具」古代42・43
〃 24. 桐原健「栗林式土器の再検討」考古学雑誌49の3
〃 25. 高丘小学校編「昭和25年度第2次栗林遺跡発掘」
〃 26. 杉原荘介「静岡県安倍郡原添遺跡」日本考古学年報1
〃 27. 杉原荘介「下総新田山遺跡調査概報」人類学雑誌58の7
〃 28. 杉原荘介「下野野沢遺跡及び陸前桝形囲貝塚出土の弥生式土器の位置について」考古学7の8
〃 29. 杉原荘介「福島県北会津郡門田村南御山遺跡」日本考古学年報2
〃 30. 神林淳雄「磐城国棚倉町崖上石器時代の遺跡について」上代文化8
〃 31. 鳥居竜蔵「諏訪史」1巻
〃 32. 神田五六「東日本における弥生式文化の研究」信濃Ⅲ 2の7
〃 33. 八幡一郎「長野県野沢発見の弥生式遺物」考古学雑誌38の5・6
〃 34. 桐原健「長野県須坂市須坂園芸高校校庭出土の弥生式土器について」信濃Ⅲ 13の8
〃 35. 田辺昭三「大津市南滋賀遺跡調査概報」大津市教育委員会
〃 36. 免山篤「摂津安威の土坑遺跡」古代学研究12
〃 37. 村川行弘「尼崎市田能遺跡第一次調査概要」日考協32回総会研究発表要旨
〃 38. 坪井清足「高丘村弥生式遺跡調査」下高井
〃 39. 桐原健「北信長峯丘陵における弥生式遺跡」考古学雑誌45の1
〃 40. 小野忠凞「本州の西端地方における弥生式壺棺墓の性格」日考協20回総会研究発表要旨

第 5 節　土坑内出土遺物

石　器（第38図）

土坑墓内出土の石器として明確なものは磨製石斧4点である。第38図4が1号、1・2が9号、3が23号土坑出土で、1号・9号址の場合は土坑上面に散布していた土器群と共に発見され、殊に1号址においては重なり合っていた土器破片中より検出されて、あたかも土器内に収納されていたらしい様が偲ばれた。なお、23号址の場合は土坑内の出土ではないが、周溝区内からの発見である。

石質は4が硬質の橄欖岩である他は閃緑岩製で、形態は1～3が太型蛤刃石斧、4が小形の扁平片刃石斧である。



第38図　土坑出土石器（1：4）

これらの石器の特徴の一つは、太形蛤刃石斧の3点はともに刃部だけの破損品であり、4の小形扁平片刃石斧も頭部が欠損をしている。太型蛤刃石斧の割面には別段再加工された痕跡を見ていないので、9号址に見られた高坏坏部に穿孔あるケースをも勘案して、利器としての機能を喪失させて副葬したものと考えられている。

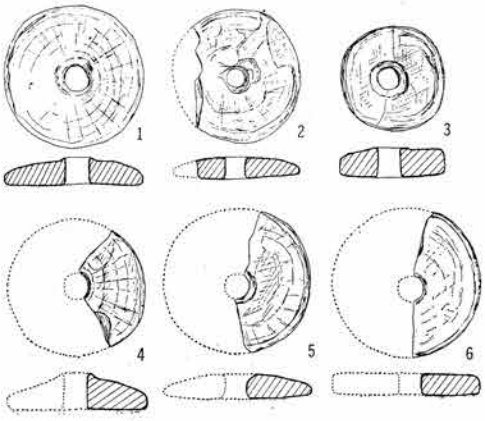
なお、これらの磨製石斧は当地方においては中期末に盛行するもので、後期に入ってからは発見された例を聞かない。（註1）　この点にも何か問題がありそうである。

土製品（第39図）

土製品は総て紡錘車であって、破片まで含めて6点が発見されている。第39図の1～4が22号土坑の周溝底から、5が3号址、6が9号土坑の出土である。これら紡錘車は土器片などを再加工したものではなく、大きさ、重量につ

番号	出土地点	直径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	22 号 址	57	11	38.5	
2	〃	52	9	25.0	
3	〃	43	12	33.5	
4	〃	(56)	14		破片
5	3 号 址	(60)	10		〃
6	9 号 址	(61)	9		〃

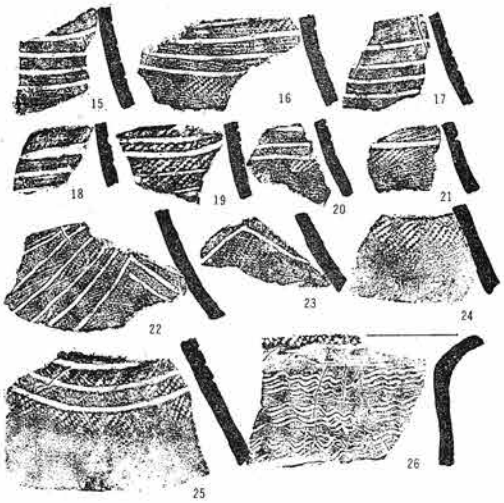
第7表　紡錘車計測表



第39図　土坑出土土製品（1：3）

いては第7表に表示した通りで、径は推定6.1から4.3cmまで、厚さは中央辺での計測で1.4 ～ 0.9cmを算え、円板のほぼ中央に径1cm前後の円形孔を貫通させている。穿孔は焼成前に一方（裏面）から行なわれたものらしく、1.3.4などには上面の孔周縁が僅かに盛り上りを見せている。

その形態分類を断面形から考えると、一つは3、6の如く厚さ均一の円板状をなすもので、胎土には砂粒が含まれ、表面の感触はざらざらとしたもので篦研磨は行なわれていない。もっとも6は表裏面に亘って微かに赤色塗彩の痕跡が窺われるがこれとても研磨はなされていない。重量も3などは小形のわりには重い方である。その二は明瞭に上面・下面の区別がつくもので、一面は平坦であるのに一面はその度の強弱はあるも笠形に盛り上りを見せている。1、4は度の強いもので焼成は堅緻であり、特に上面は篦で放射状に周縁部に走ってよく研磨が為され、2、5は上面彎曲度弱く、さして厚くもないが、篦研磨の為されているのは上面のみで、下面はざらざらとした素面のままである。



第40図　土坑出土弥生式第1類土器（1：3）

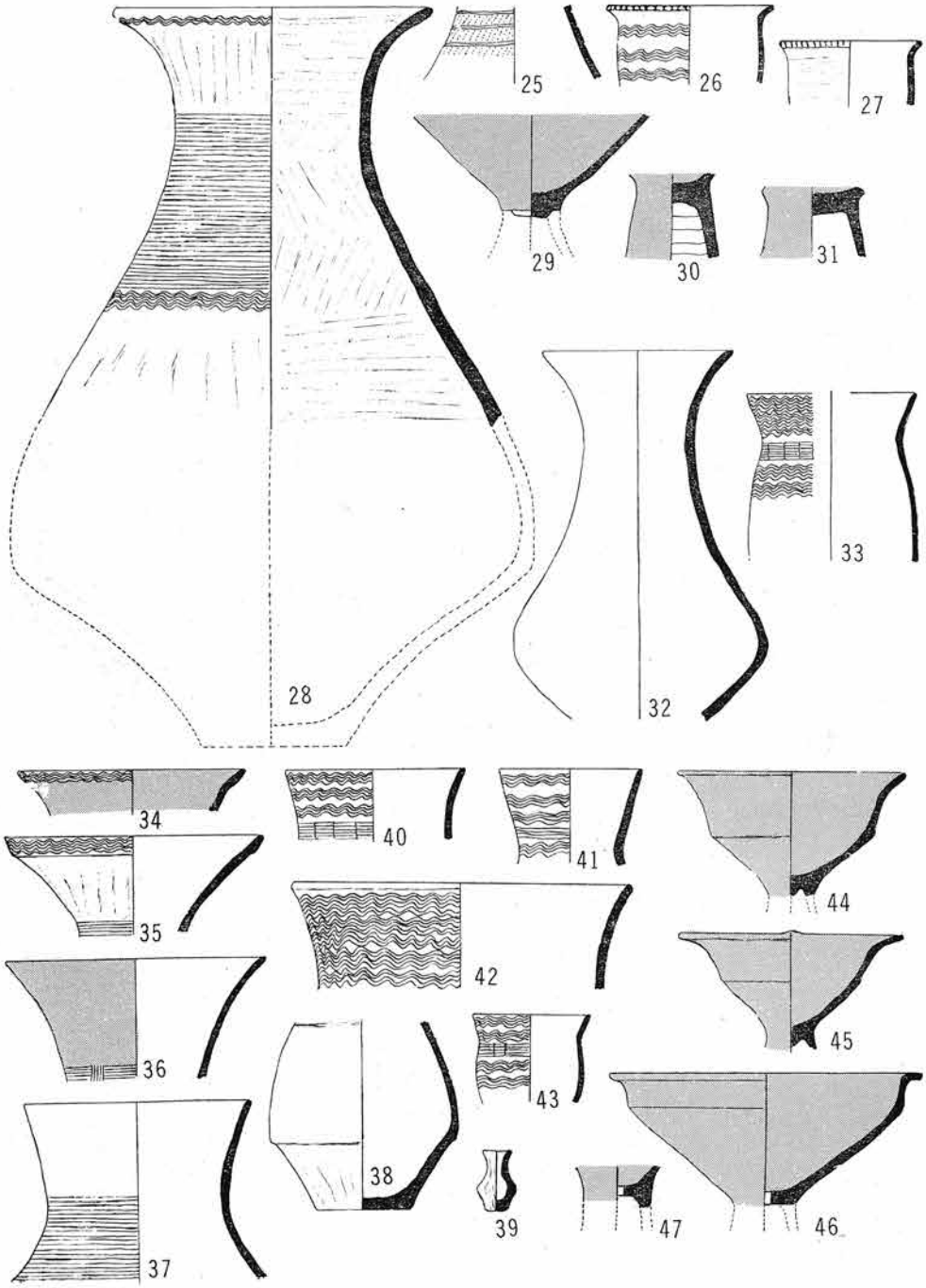
佐原真氏は成形・穿孔がともに焼成に先立って行なわれたものは東日本における紡錘車を代表するもので、重量は畿内・瀬戸内のそれよりも重いとのことであり（註2）、それによれば本遺跡出土の紡錘車は東日本に普遍的な形態をとっているが、それと共に考えねばならぬことは、裏面が粗耗平坦で、上面研磨のあるものには紡錘以外の使用をも考えてみる必要があると云うことである。（註3）　本遺跡の如く土坑内出土と云う点や、原治絵画の描かれている例品の存在、古墳時代の石製紡錘車中に直弧文の描かれているなど問題点が多々あるからである。

土　器（第40～45図）

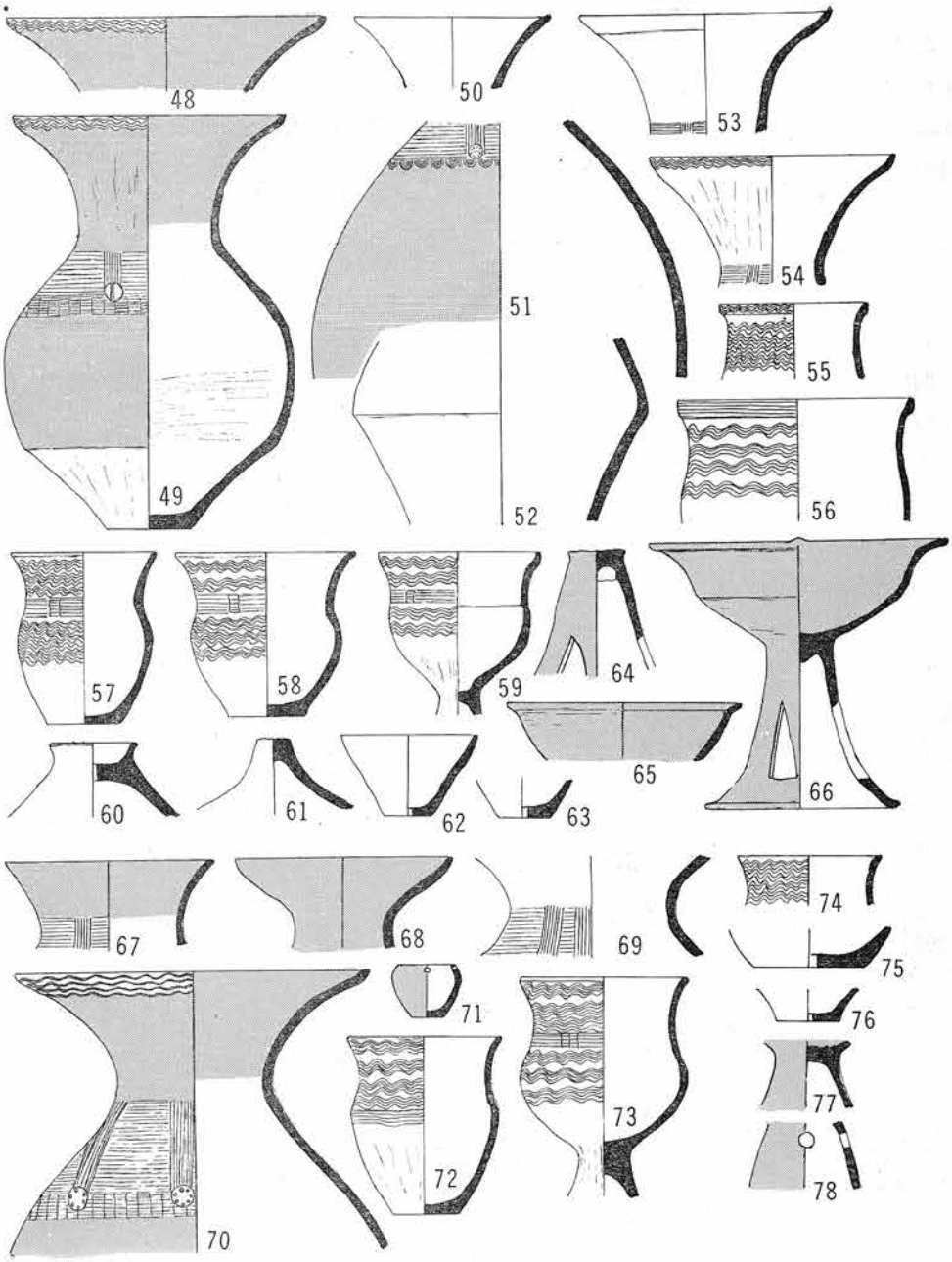
23基の土坑墓のうちの幾つかはその重複状態から構築の前後関係が判明している。それぞれの土坑内出土土器中には埋葬後の供献と云う性格の故に多少の時間差を認めることがあったが、後出するそれは数量的に僅少であるので区分が可能で、一土坑内出土の壺・高坏を1セットとして把握することは容易に出来た。出土した土器は膨大な量にのぼっているが、その多く――特に壺においては破砕が著るしくて器形を窺うことの出来ぬものが多かった。

第1類（第40図15～26　第41図25～27）

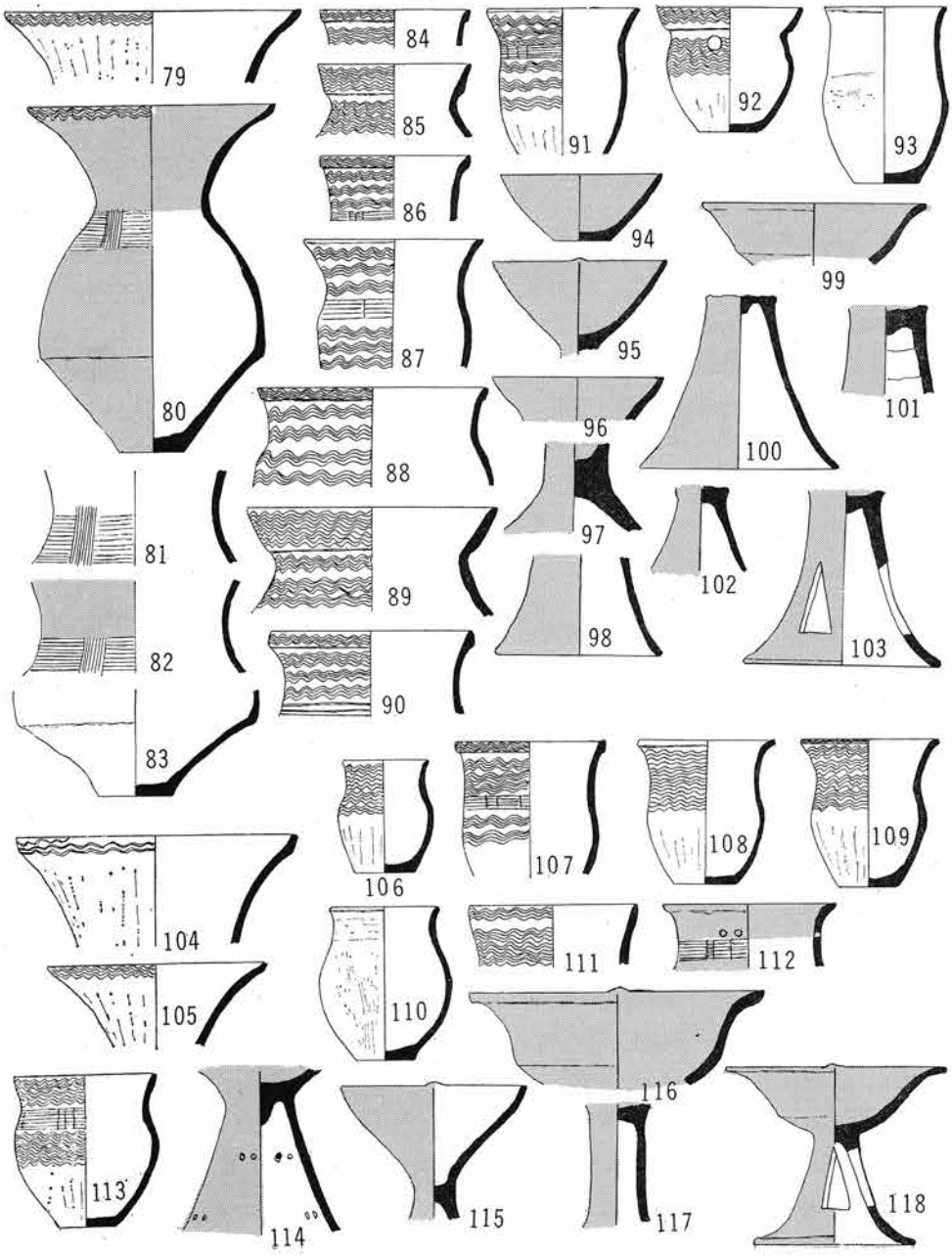
6号土坑址出土のもので、壺・甕の二形態が存在している。壺は長頸壺で、頸部には篦描き直線文が数条、縄文地文の上を横走している（15～21・25）。上腹部は平滑で無文のものが多いが、



第41図　土坑出土弥生式第１類・第２類土器（１：６）



第42図　土坑出土弥生式第３類土器（１：６）



第43図　土坑出土弥生式第３類土器（１：６）

22・23においては最大腹径部位に近く縄文地文の上に篦描きによる連続重山形文が置かれている。甕は口縁の短かく強く屈折するもので、口唇には篦先による加飾がなされている。頸部から上胴部にかけては垂直に近く、以下は急速に収約して底部に至る形態で、上胴部を飾る文様として26の如くやや乱れてはおるも帯を為す櫛描波状文を数条繞らすのが一般的である。

第2類（第41図28～33・37・46）

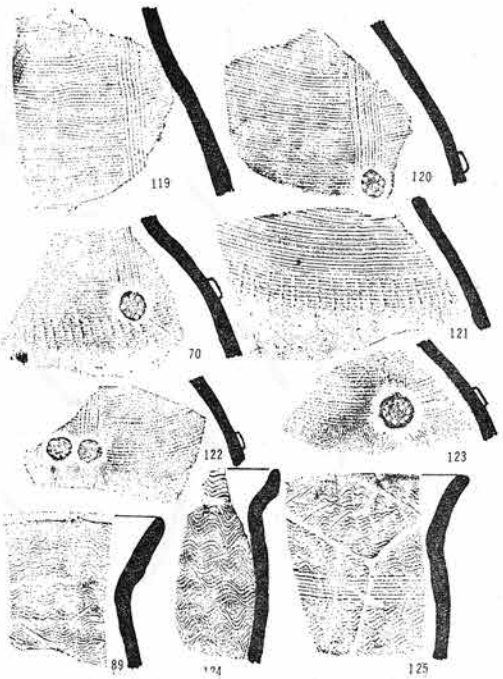
10号（28）12号址（32）出土、及び9号址の37などの壺形土器で、太頸壺ではあるも未だ長頸壺的な形態を残しているものを云う。32の頸部の如く、丈長くもその緊約度は緩いのが好例である。器表面の文様で28は口縁外側に整った櫛描波状文が繞り、頸部には同じく整った細かい櫛描直線文が15cmの幅に描かれ、その下端を一条の櫛描波状文が走って文様帯を括めあげている。未だ表面に赤色塗彩は施されず、文様帯以外は縦走する篦整形で仕上げている。

甕形土器は口縁の屈折が無くなって丈長く延び出し第3類との分離が難かしい。強いてその特徴を挙げれば未だ折返し口縁や脚台の出現していないこと、櫛描波状文が帯を為している点等である。（33）。

高坏では10号（29）、9号址（46）出土のものの如く幅狭い頸部下に稜線を形成して大きく収約する口径の大きい割には坏の浅いものが該当する。脚部は丈長く、透孔などの加飾は無い。外面と坏部内面には赤色塗彩が為されている。

第3類（第41図34～36　38～45　47　第42図48～78　第43図79～118　第44図119～125）

土坑墓出土土器の主体を占めるもので、壺・甕・高坏・無頸壺・鉢と多くの器形が揃っている。壺形土器は総て太頸壺で、口縁は少しく立ち上り、口縁外側に整った櫛描波状文が一帯繞るのが普通で（34・35・48・49・54・79・80・105）、中には70のように篦描き波状文に代えているものや、35の様に口縁を少しく肥厚させて文様帯下部に稜線を走らせているものもある。口縁から頸部にかけてのカーブは朝顔状に収約するも、太頸壺であってみれば長くは引かれず、すぐに下腹部に稜線のある無花果形胴部に移行している。頸部文様は同部に繞らされている櫛描横走文帯を一条乃至は接近している二条の縦走する櫛描直線文で数区画に区切っているもので（49・51・70・80）、5本程度の櫛歯が使用され、その動きは遅滞なく流麗である。文様帯下端



第44図　土坑出土弥生式第3類土器

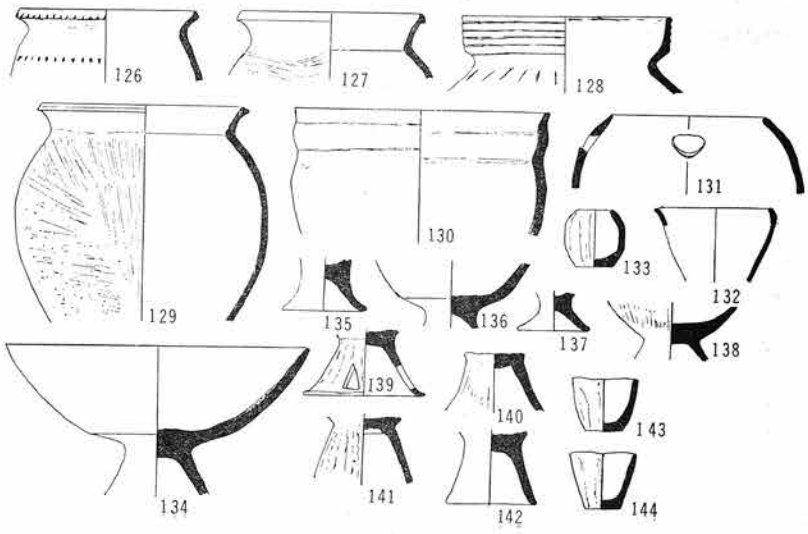
に櫛描簾状文を置いたり（49・70）、半截同心円文を並べたり（51）、円板状突起を貼付させたり（49・51・70）して変化を見せているものもある。

赤色塗彩もこの型式の特徴の一つである。器表面はほぼ文様帯を除いて塗彩されているが、全面に塗彩の無いものも、下腹部稜線下にのみ施されないものも僅かではあるが存在する。器高については割合に大形品が多く、49が34cm、80が29cmを計っている。

無頸壺は袖珍的なものが19号址から1点出土をしている（71）。肩の張りが強く、外面は底部裏面にまで赤色塗彩されている。口縁には一孔一対の小孔が斜めに穿たれている。甕形土器には大形・中形・小形と数多く存するが、大形品は破砕していて復元は出来得ない。破片から窺うに口縁部が肥厚して折返し口縁的な形状をとっているものが多く（88・90）、折返し口縁上には頸部や上腹施文のそれよりも整った、波長の短かい櫛描波状文が繞っている。櫛描波状文の代りに直線文を用いた56や、幅広い文様帯を構成している89などは例外とも申すべきであろう。延びきった口縁部や上腹部には櫛描波状文が器面全体を埋め尽しているかの如くに繞らされ、その間の頸部には櫛描簾状文帯を一条置くことで文様効果をあげている。中形・小形品において、口縁部形状には折返し口縁的なものもまま見られるが、多くは延びきった口縁がさして収約もしていない頸部を経て胴部へ移行する形態をとる。胴部形には大形品のようにすんなりとした長胴形をとるもの（57・72・91・107）と、ずんぐりした小肥りの態を為すもの（58・92・113）とが見受けられている。また、この中、小形品には脚付きのものもかなり見られる。脚部は短かく、側線は直斜状に強く張っている（59・73）。

文様は頸部の櫛描簾状文を挟んで櫛描波状文が口縁部と上胴部を埋め尽しているものが多いが、この他に簾状文で頸部の区切りをつけぬもの（72・106・108・109）や、円板状突起を貼付したり（92）、文様を消失させた素面の93・110の如きものもある。

また、赤色塗彩され、緊縛孔の穿たれて、その機能



第45図　土坑出土弥生式第4類土器（1：6）

を貯蔵性に代えたもの（ 112 ）も存するが、斯様な甕は案外に古い形態をとっており、例品を篠ノ井・伊勢宮遺跡に見ることが出来る（註 4 ）。

甕形土器では18号址出土の 2 点が知られている。61 は黝黒色で粗質ではあるが山形を為す。裾端が欠失しているので孔の有無は不明であるが、重量の点からすれば甕形土器に伴うものであるらしい。60 は上部中央に貫通孔があって明らかに甕形土器の蓋である。色調黄褐色で粗質である。

甑（ 62 ・ 63 ）は口径に比しては器高の高いもので、側線直斜状に収約する鉢形土器の底部に一孔を穿ったものである。穿孔は焼成前にかかり、赤色塗彩はなされず色調黄褐色で粗質である。なお、 75 ・ 76 は甕及び壺の底部を焼成後に穿孔したもので、甑として考えるべきものではない。

高坏は坏部の形状から二者に区分出来る。前者（ 44・45・66・98・ 116 ・ 118 ）は第 2 類高坏の形態を踏襲発展させたもので、器高のわりには口径がせばまり、それだけに頸部下の稜線から底部へかけての収約度は強まっている。また稜線形成部位と口縁との間隔は 2 類高坏よりも幅ひろく、口縁は外反して平面を形成するに至っている。口唇部に数ケ処山形突起が附されているのもこの類からである。脚部は丈長く、裾部に至って外反して終り、装飾としての透孔には円形孔も一、二は見られるが、多くは脚も下半に三角形の窓を切っている。

次に後者（ 95・ 115 ）は坏部が円味をもった側線で構成されているもので、口唇には山形突起が附されている点は前者と同様である。脚は前者に比べれば短かく、裾広がりになっていて装飾のための穿孔もあまり見られない。概して小形高坏がとる形態のようである。そして、後者の高坏と親縁性あるものとして21号址から 1 点、表裏面に赤色塗彩された鉢形土器が出土を見せている（ 94 ）。

第 4 類（ 第 45 図 126 ～ 144 ）

2 ・ 7 ・ 17 ～ 19 ・ 21 ・ 22 号址などの上面に混在していた一群で、量的には多くなく、完形を呈するものは小形の無頸壺や鉢など 3 点ほどしかない。

壺形土器は凹線を繞らした立ち上った口縁部をもつ21号址出土の 1 点のみで（ 128 ）、この口縁部は肩の張った胴部に付くものらしい。色調は黄褐色で砂粒を含むも堅緻であり、肩部に向って箆が縦走し研磨整形されている。甕形土器は口唇部が外方に屈折して断面三角形を形成し、口縁端に一線の引かれている点が特徴で（ 126 ・ 127 ・ 129 ）、同部の装飾としてこの下端に刻み目を入れた 126、中辺に更に一線が挿入されている 129 などがある。短かく屈曲した口縁部からは円味をおびた肩部が続き、以下はスムースに収約して小さい底部で終っている。器表面の文様はもはや無く、頸部下から整形のための細かい刷毛目が斜走乃至は横走している。これに対して小形甕中には脚部を附するものがあるらしい。全面に刷毛目擦痕が見られている 140 ～ 142 が該当するものであろう。また、21 号址出土の 130 は口縁部に二段に亘る弱い括れがつくられていて、広い口径から一見盌形に復元出来そうではあるが、やはり甕として取扱った方が無難らしい。

片口土器は破片が 2 点発見されている。 1 点は口縁平面が偏楕円を呈するもので、口縁の一辺が外方に突き出して片口となっており、器高は比較的深い方である（ 132 ）。もう 1 点（ 131 ）は無頸壺状の形態をとるもので、恐らくは豊野・西沖例（ 註 5 ）の如く脚が附されたものと思われる。口縁を少しく下ったところに長径 2.5 *cm*ほどの一孔が穿たれて、その下端が突き出して片口状を呈

している。色調は灰黄色で篦研磨がなされ、器質も堅緻、焼成良好である。

高坏は1点を除き小形で、坏部は半球状の椀形を為すものと思われる。色調は黝黒色で砂粒を多く含み、赤色塗彩はなされていない。19号址の134だけは大形で、坏部形状は椀形を呈しながらも、その底部に近く稜線を微かに認めることが出来る。脚は短かいながらも大きく外向し、139の如き三角形の透孔が見られている。

最後に袖珍土器3点。一つは手捏ねになる無頸壺形土器（133）、二点は17号址より出土している同じく手捏ねの鉢形土器（143・144）、色調は黝黒色で粗質である。

以上が土坑墓発見弥生式土器の大要である。掲図した144の資料を4類に区分して記述したが、これに26年発掘の資料や安源寺周辺の既出資料若干等を加えて本遺跡に見られた後期弥生式土器の編年を少しく述べて小括としたい。

信濃の各谷・各平に見られる中期末の土器のフェイスはそれぞれ異なりを見せてはいるが、長頸、大きな腹部、文様帯の規定など細部に亘っては幾つかの共通点を摘出することが出来る。北信では安源寺1類として記述した壺、及び甕形土器がそれで、遠賀川式土器文化圏の外廓地域であると共に、先行時期においては亀ケ岡式文化圏の外廓地域でもあった中部山嶽地域に生起し、東海地方の原流式、矢崎二類、関東地方の須和田式などの諸要素が混然と見られる栗林式（栗林2・3類）（註6）の様式を継承していて、中信の百瀬式（これは今後細分が可能である）（註7）、南信諏訪の天王垣外式（註8）に比定出来る。この時期の生業に起因するのであろうが、兎も角も土器型式上には汎信濃的様相が認められているのである。

これが後期に入ると先行した土器の伝統を踏襲しながらもより明確な地域性をもった土器型式が出現する。彼等の生業の発展が地縁的紐帯をより強固にし、大きい行動圏はもはや必要としなくなったが故であろう。

ところで、かかる後期弥生式土器の型式編年であるが、中信においては百瀬Ⅱ類、諏訪では海戸式（註9）、伊那では座光寺原式（註10）で見られる如く、櫛歯状施文具を使用しながらも先行型式の器形・文様のモチーフを踏襲しており、特に保守的な性格の強い甕形土器においては中期末の甕とは何ら変るところがない。けれども千曲川流域においては壺・甕共に器形・文様上に新要素が強く、先行型式との間に相当のヒヤタスを認めざるを得ない。安源寺2類がそれで、かつては尾崎式とも呼称した（註11）。壺形土器には長頸壺の残映が未だ窺えるも、下腹部に稜線を見せる胴部形態は新らしいものであり、頸部を飾る文様も櫛歯状施文具による幅広い直線文帯である。また、この期から現われる高坏の形態は伊勢湾沿岸の後期前半のそれと全く同一と云ってよい（註12）。伊那谷や諏訪や中信と異って、千曲川流域には伊勢湾方面の文化を受け入れる何物かが、換言すればこの地域には畿内方面の勢力を導く何物かがあったのであろう。

そして、この事象は安源寺宮裏遺跡で、住居址内から発見された1点の壺形土器からも裏付けが出来る。住居址中央のピット内に横たわっていた壺は算盤玉状の胴部とシャープな櫛描文様を有していて明らかに伊勢湾沿岸の後期前半に見られる型式特徴に合致していた。これは彼の地において

作成されたものであり、この壺と共伴した土器片は安源寺2類、或いは少しく下降する型式に属するものである。

この安源寺2類に続く3類は、従来より箱清水式（註13）と呼称されてきた。2類から進展したものともいえるが、伊勢湾地方の型式に不断に影響されて成立した型式とも云い得られ、その例証として壺形土器に見られる赤色塗彩の盛行や、高坏坏部の次第に深みを増して行く事象、甕形土器中に一・二点ではあるが球形に近い胴部にくの字形に外反する口縁部の附された寄道式的な例品（註14）の存する点等を挙げることが出来る。

そして、赤色塗彩が遙かに文様を凌駕して行く点や、甕形土器口縁発達のケースなどは僻遠の地に見られる特異な現象であると同時に地域性の確立と見ることも出来るので、北は長峯丘陵を中央に置く飯山盆地から南は佐久の平までの広い千曲川流域一面にこの式の土器は繁衍しており、この期に至って遺跡数は氾濫原に面して急増をしているのである。

安源寺3類中には文様を消失した甕が一・二存在している。また他遺跡では赤色塗彩のみの壺形土器もあって（註15）、櫛描施文と赤色塗彩を型式特徴とする箱清水式の次に編年される型式には無文の一群が考えられそうである。けれども無文、刷毛目整形になる安源寺4類は飾られぬ素面ではあるものの第3類から漸時展開して来たものではない。

この第4類が3類の次に置かれることについては飯山・柳町遺跡（註16）において確認出来ている。5号を埋めたてて4号が造られていると云う重複した住居址があって、5号からは柳町1類（箱清水式）が、4号からは柳町2類（安源寺4類）が出土をした。この柳町2類を柳町式として北信における弥生最末期に位置づけをした。その際に、この柳町式をどうしても箱清水式の伝統を見出すことが出来ずに報文中では「箱清水式土器の伝統が柳町式には殆んど認められない。箱清水式に顕著に見られた櫛描手法・赤色塗彩は皆無であり、保守的な性格が強いとされている高坏にも赤色塗彩は施されていない。器形についても柳町式の口唇部には先行土器と関連のない手法が存在し、球形丸底の器形も出現してむしろ信濃以外の土器に類例が求められると云う状態である」と記述した。

そして、その際には佐渡・千種の土器（註17）・新潟・緒立遺跡（註18）の土器に類例が求められるとし、それらを柳町式と比較するとき、器質・形成共に粗雑で、いかにも地方化しているところから新らしい様式は案外にこの方面の経路を辿って伝播し来ったものかもしれないと解した。この事は安源寺出土の一高坏土器（高見沢伴蔵氏所蔵）が北陸の石川・次場遺跡出土のもの（註19）と同形である点や、新潟・新井・斐太遺跡の一括遺物（註20）を知るに及んでその考えの妥当であったことを改めて確認した。

北信における柳町式を出す遺跡としては飯山・柳町、中野・安源寺の二遺跡の他に、飯山・須多ケ峯遺跡で土坑墓に近接している2ケの住居址からも発見されている（註21）。この他、断片的な資料としては長野・若槻・田子遺跡などが挙げられ、善光寺平北部には散漫ながらも分布しておるものと考えている。

即ち、濃尾地方の後期弥生式土器の強い影響下に生起した当地方の後期弥生式土器は、その後も

先進地域との接触を保ちつつ独自の文化圏を形成し、その余波を北関東方面にまで及ぼした。

一方、箱清水式の土器型式が中頸城方面にさして延びてはいないことについては、その当時の高田平野が土壌・地形・気候の点で進出するには未だ不適当な要素が多すぎたからであろう。この地に開拓の鍬が入れられる様になるのは北陸に畿内から直接に流出して出来た文化の一部が海流に乗って佐渡へ、次いで新潟の海岸平野に伝播してからの事で、その時期は弥生最末期に下降している。柳町式土器はその北信濃にあらわれた一姿相と見てよかろう。

そして、この最末期に更埴地方には信濃最古の前方後円墳が築かれていると見てよいから、古墳出現直前の墓制をとる安源寺遺跡土坑墓の築かれた時期である箱清水期から柳町期にかけては今後特に焦点を当て究明して行かなければなるまい。　　（桐原　健）

註1.　桐原健「石器より見た信濃弥生式文化の一様相」信濃Ⅲ 11 の 12

註2.　小林行雄・佐原真「香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究」詫間町文化財保護委員会

註3.　桐原健「上総金鈴塚出土の巴形飾金具―巴形銅器私考」古代 42.43

註4.　信濃史料刊行会「信濃考古綜覧」

註5.　註4に同じ

註6.　桐原健「栗林式土器の再検討」考古学雑誌 49 の3

註7.　藤沢宗平「長野県東筑摩郡寿村百瀬弥生式遺跡調査概報」信濃Ⅲ 3 の 8

註8.　藤森栄一「諏訪市天王垣外発掘の弥生式土器及び石器」考古学 3 の 6・7

註9.　岡谷市海戸遺跡　昭和41年調査による27号址出土資料を標式とする。

註10.　佐藤甦信「下伊那における弥生式土器の編年的研究」ＳＢＣ第三回奨励研究レポート

註11.　飯山市外様区尾崎遺跡出土土器を標式とするが、現在では弥生式土器研究の学史的意義から千曲川流域の後期櫛目文土器を箱清水式（明治33年長野市箱清水の長野高等女学校々庭出土土器）と総称し、これを更にⅠ類、Ⅱ類と細分したい考えを有している。したがつて安源寺2類（尾崎式）は箱清水Ⅰ類、安源寺3類は箱清水Ⅱ類となる。

註12.　久永春男「東海」日本考古学講座 4.　同「東海」日本の考古学 3.

註13.　桐原健「箱清水式土器」信濃史料刊行会編信濃考古綜覧

註14.　高橋桂「北信濃須多ケ峯弥生式墓坑調査略報 ―― 第3図4」考古学雑誌51の3

註15.　小県郡から佐久地方の後期弥生式遺跡に見受けられる。例えば小県・田中・長瀬手、佐久・前山・後沢、佐久・岸野・西本山遺跡など。

註16.　桐原健「北信濃長峯丘陵柳町遺跡調査概報」信濃Ⅲ 9 の12　同「北信長峯丘陵における弥生式遺跡」考古学雑誌45の1

註17.　新潟県文化財報告書第1「千種」

註18.　永峯光一・上原甲子郎・磯崎正彦「新潟県西蒲原郡緒立遺跡の調査」日考協26回総会研究発表要旨。

註19. 橋本澄夫「北陸」日本の考古学3

註20. 駒井和愛・吉田章一郎「斐太－新潟県新井市の弥生聚落址」

註21. 註14に同じ　未発表資料を貸与された高橋桂氏に感謝する。

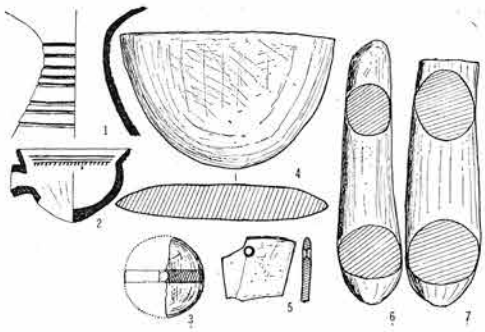
第6節　安源寺遺跡の既出資料

安源寺丘陵周辺の弥生式時代遺跡については早くから神田五六・藤森栄一・金井汲次氏が踏査され（註1）、戦後においては小野勝年氏が当時高校生であった田川幸生・檜原長則氏等と遺物の集成を行い、「下高井」に「下高井地方の考古学的調査」として発表されている（註2）。第1回の安源寺遺跡の発掘が行なわれたのもこの頃――昭和26年のことである（註3）。その後、この附近の遺跡・遺物は高丘小学校に田川幸生、続いて田中清見氏が勤務されるに及んでますます調査・集成され、同校の遺物も整理されて現在に至っている。

以下、昭和27年頃までに発見されて「下高井」に収載された遺物につき、次いで26年発掘の土坑墓。41年春に発見された宮裏遺跡、そして発見された時期は古いがやや出土地点を異にする高見沢伴蔵氏所有遺物についてその概略を紹介したい。

「下高井」記載の弥生式遺物（第46図）

昭和27年頃までに採集された遺物としては、山崎賢一郎氏所有の珍らしい形態をとった注口土器が挙げられる（第46図2）。形態は底の極めて小さい安定の悪い深さのある鉢形土器の一端に短かくはあるがラッパ状に開いた注口を附けたもので、口径8.5、器高5.5cmを計り、外反している口縁は頸部のところで少しくくびれ、以下底部へ向って円味を持ちつつ収約して行く。底部は比較的厚い。文様は頸部に沈線を三条走らせ、その下方に刻み目を入れている。器色は淡黄褐色で篦整形、焼成は良好である。他に例品を見ないものであるが栗林式に属するものであろう。第46図1は同じく栗林式の長頸壺破片で、26年の安源寺遺跡発掘において土坑上面に散布していた後期土器に混じて発見された。口縁部と胴部以下を欠損している。長頸部には1cmほどの間隔で八条の太い篦描直線文が繞っている。同図3も土坑墓附近で発見された。円板形を呈する土製紡錘車で半欠である。厚さは1cmで復元すれば径6.2cmとなる。同図4～7は石器である。4は石製円板。26年夏に高丘公民館で実見したもので閃緑岩製のものである。半欠しているが復元をすれば径17cmの円板となり、



第46図　安源寺遺跡既出の土器・石器（1：6）

周縁は太型蛤刃石斧と同様な鋭利な刃となっている。厚みは 2.8cm を計る。5は「下高井」に記載されているもので双孔ある磨製石包丁の破片で粘板岩製である。背はやや瘠せており、厚みは 0.7cmで両抉りの穿孔がなされている。6・7は棍棒状石器、共に26年夏高丘公民館で実測した。6は「下高井」にも掲図されている。棒状をなす一端は膨らんでおり、一端は手で握るに適した太さである。表面は滑らかに研磨されている。黒色の閃緑岩を使用している。

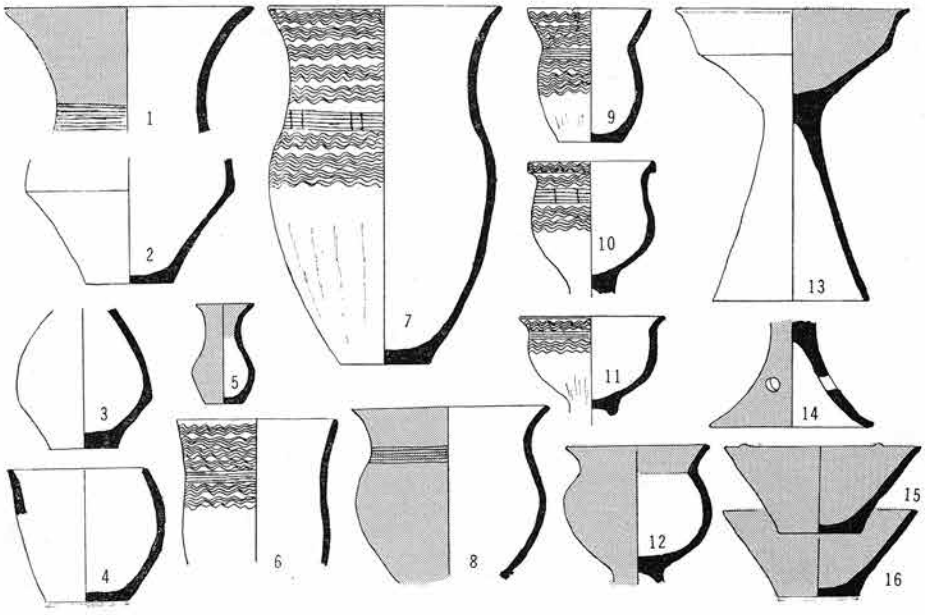
昭和26年 発掘の土坑墓と遺物（第 47 図）

安源寺遺跡の26年発掘調査は安源寺字清水595 番地、山崎正一郎氏の畑において10月 5 日より11日にかけて行なわれた。発掘指導者は神田五六氏で、参加者は金井喜久一郎・石川税・田川幸生・檀原長則・戸沢充則の各氏。及び高丘小・中学校生徒、高丘村古代文化研究会・豊井考古学会・北信学生考古学研究会・長野西高校郷土研究班の諸氏で延人員は 174 名に達した。以下、本調査の経過を発掘日誌から窺ってみると、

10月 5 日　発掘地を選定トレンチを入れる。表面から 510 cmまでは耕作土で排除する。その下30cm位は黒土だが非常に固くしまっている。その下は直ちに粘土である。

10月 6 日　表土下10cmより始まる黒土は非常に固く発掘は進展しない。

10月 7 日　偶然、トレンチ西端から東 6 mのところで地表下20cmから完形な弥生式甕形土器が出土した。同処を拡張すると続々と同一時期と思われる土器が発見された。この地点はおそらく住居址であろうと見当をつけ、土器はできうる限り取りあげず、全貌を露呈させて観察した。かくて、



第47図　昭和26年調査土坑出土土器（ 1 ： 6 ）

次の10月８日には土器をとりあげながら遺構の検出を行った訳であるが、この結果、土器は地表下20～30 cmの黒色土層中に埋没していたが、総て同一水平面にあった訳ではなく、ところによっては15cmほどの差が見られた。遺構はただ固い黒土層中に長径1.5 m、短径0.6 mほどの不整楕円形を描く溝だけが発見されただけであった。そして土器は溝で劃された小範囲の中から発見されており、中央東寄りに甕がつぶれ、北側には片口土器が横たわり、西から南にかけて壺・甕・高坏・鉢が多量にかたまっていた。なお中央には焼土も発見されている。

即ち、この遺構は今にして考えれば周溝を繞らす22・23号と同様な土坑墓であった訳である。出土遺物は総て弥生後期の土器で、今回（41年度）の調査分類で安源寺Ⅲ類としたものである。完形に復したものが多く、器形としては甕・壺・鉢・高坏・片口と多種に亘っている。（第47図1～16）。甕形土器は最も点数が多いが、これは櫛目文の施されているものと、赤色塗彩で飾られているものの二種に大別できる。前者は更に脚の有無による細別が可能で、脚を有さぬもの（第47図6・7・9）はやや長目の胴部に緩やかに外反する口縁が附するもので、文様は頸部に幅1 cm弱の櫛描直線文乃至簾状文帯を置き、同帯を挟んで口縁部から上腹部までを動きの弱い櫛描波状文で充めている。これに対し脚あるものは小形で（第47図10・11）、10は折返し的口縁から円く張った胴部へ続く器形をとり、文様は頸部に櫛描簾状文帯を、口縁外側の翼面部から上胴部にかけて乱れた櫛描波状文で充めている。11は鉢形に近い器形で、文様及び施文方法は10と同様である。次に後者――赤色塗彩された甕（同図8・12）は脚付きで球形に近い胴部に外反する口縁が続くもので、8は頸部に櫛描直線文帯が繞るのみで器全面には赤色塗彩がなされている。12は全くの赤色塗彩で口縁内側にまで施されている。また、同じく赤色塗彩されている土器として鉢形土器2点（同図15・16)が発見されており、15の口縁には山形突起が附されている。

甕と対する土器としての壺形土器は破砕が著るしく口縁部破片からすれば1～2ケの大形壺が存したらしいが、その全形は窺い知ることはできない（同図1・2）。3はやや小形な壺胴部、5は所謂袖珍土器である。

高坏は13が完形品で、丈高い脚部を有し、坏部は口径広く、口縁は僅か外反してそのまま坏部の三分の一程度まで直口し、同処に稜線を見せて屈曲し底部に至るもので、坏部内面にのみ赤色塗彩がなされている。

この他、素文の土器で無頸壺状の形態の口縁一部に片口を附した土器が出土している。外面一部に煤黒の痕があり、内面には粕状の粘着物が存していた。

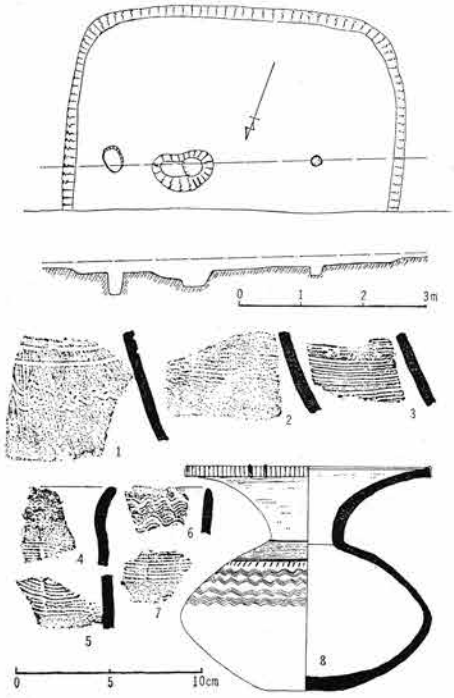
宮裏遺跡（第48図）

安源寺丘陵上面にある山崎賢一郎氏のリンゴ園で、本年春に子息が偶然に完形な壺形土器を発見したことにより住居址の存在が確認された（註4）。地点はほぼ平坦で、既に南方の延徳田圃は見えず、かわって西方がひらけて千曲川の流れや信越五山が眺まれる。

住居址は同地籍の覆土が浅く、リンゴ園中で木の根の張りすぎていることや、更に近年水道管を敷設したこと等で破壊が著るしく、殊に北半分は完全に不明であった。しかし、かろうじて残った

南半部から推定すると、弥生後期に通有な隅丸方形プランをとるものらしく、その規模は5×6 m前後と推定される。壁は表土の浅いため甚だしく削られ、数cmを測るのみである。床面はほぼ水平ではあるが軟弱である。床面上の施設としては中央辺とおもわれるところに1×0.6 m の不整楕円形の凹みがあり、その中から後記する壺形土器が横倒しの態で発見された。この凹みの東に接して径30 cm、深さ35 cmのピットが存在する。おそらく柱穴としてよかろう。西壁寄りにもピットが検出されてはいるが、本址に伴うものかどうか確かではない（第48図上）。

出土遺物は土器だけで、それも凹み中の壺形土器を除いては少破片で床面上に散布していた（第48図1～8）。1～3までが壺形土器の破片で、1は長頸壺的な形態をとり、頸部には篦描きで横線を引き続いて不規則な波状文を置いている。2・3は後期壺形土器の頸部から上腹部にかかる破片で、櫛描直線文と弱い動きの波状文が刻されている。甕形土器破片は4～7で、頸部に櫛描簾状文帯を置き、同帯を挟んで口縁から上腹部まで櫛描波状文で充めている安源寺Ⅲ類甕特有の文様が施されている。



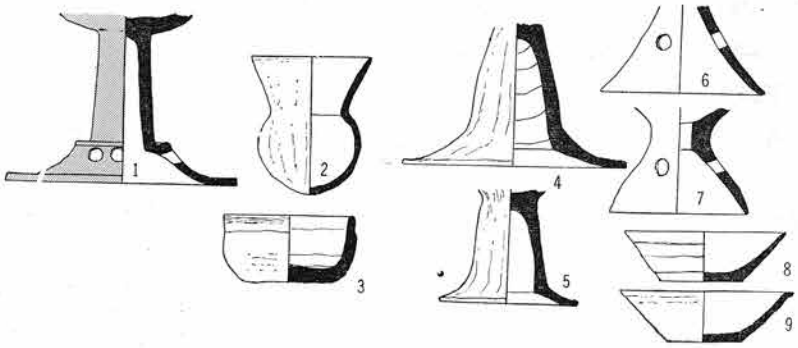
第48図　宮裏遺跡の住居址（1：30）と遺物（1：4）

さて次は問題の完形壺形土器である（8）。算盤玉状に胴部中辺で屈折を見せているやや扁平にすぎる胴部に朝顔状に外反する口頸を附したもので、口縁端部に形成されている面上には刻み目がなされ、更にところどころに棒状の浮文がついている。胴部文様は上から櫛描直線文帯と列点文、次いで屈折部までの間を山形に近い鋭どさを見せた櫛描波状文を四帯繞らして終っている。土器考察のところで既述したがこの土器はあきらかに伊勢湾沿岸地方において後期前半に作成されたものであり、彼の地からはるばると人の手によって持ち来ったものである。

高見沢伴蔵氏所有遺物（第49図）

安源寺の高見沢伴蔵氏宅には安源寺丘陵麓に並ぶ現集落の屋敷内より出土した土器と、その前方に広がる氾濫原――延徳田圃中を西へ流れる篠井川の水門工事で出土した土器とが保管されている。安源寺丘陵麓から出土した土器は3点（第49図1～3）であるが、うち2点は土師器で、ここでは省略をいたしたい。残された1点（1）は赤色塗彩された高坏脚部で筒状に下って来た脚部が袴状にひろがる裾部につくもので、裾部上方には二孔一対の円形孔があいている。この種の形態をとる

ものは長野県内では数例を知らず、ただ遠く離れた北陸の石川県次場遺跡で同例が見いだされた（註5）。この高坏と共伴する土器が知られていないのが残念であるが、今後資料の増加を待って改めて考えてみたい土器である。



第49図　高見沢伴蔵氏所蔵土器（1：6）
1～3安源寺、　4～9篠ノ井川

一方、篠ノ井川水門附近で発見された土器（同図4～9）は土師器の高坏脚部あり糸切底の土師器皿ありと雑多であるが、そのうちに器台と思われるものが2点（6・7）存在している。共に素文であり、脚部には円形孔が穿たれている。柳町式に属するものと思われる。　（桐原　健）

註1.　藤森栄一「千曲川下流長峯・高丘の弥生式石器」考古学8の8
2.　小野勝年「下高井地方の考古学的調査」下高井（長野県埋蔵文化財発掘調査報告1）
3.　高丘小・中学校「安源寺遺跡発掘略報告」昭26年
田川幸生・桐原健「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」信濃Ⅲ14の4
4.　金井汲次「安源寺遺跡発掘概要」中野市公民館報「文化なかの」93号
5.　橋本澄夫「弥生文化の発展と地域性 ― 北陸」日本の考古学Ⅲ

第7節　窯址の調査

発掘経過

窯址の所在地は宮裏584番地の山崎正治郎氏所有の畑地にある。昭和29年11月末県道拡張工事の際に焚口部が削り取られ、須恵器片、焼成台の自然石等多数が出土してその存在が判明していたものである。今次の工事のため窯尻が削平される恐れがあるため、地主の山崎氏が特に許可くだされ、発掘調査を行ったものである。

本址は、県道ぞいに2～4mの段状になっている土堤のところにあって、一面に雑草、篠竹、楮が密生していたため、切られた焚口部断面の所在を確認するのに半日を費やしてしまった。

5月30日午後から発掘を開始し、20cmほどの耕土を剝ぐと、Pトレンチ東端に煙道部が露出した。煙道部は耕作のために、殆んど破壊され一部分が窯床から立ちあがる状態で発掘され、天井も窯壁

も崩れていた。それから次第に下方へ拡張をはじめたが、窯内は流入をしたと思われる粘土が充満していた。上端から2m近く発掘すると、側壁と壁から天井へ移行する部分も残り、西壁の床面には径30cm大の焼けた自然石が置かれていた。さらに下方へ1m余のところからは天井部も完存していた。東壁ではこの辺から須恵器片、焼けた自然石、窯滓多数が出土しはじめた。

窯内に流入した土中からは弥生式土器片、土師器片、須恵器片を得た。また、黄褐色を呈する布目文を付した丸瓦の小破片を検出した。

天井部を完掘し遺構を確かめたいと思い、発掘を二手に別け、南側の焚口上部から始めた。床面は県道上約30cmからはじまり、木炭、灰層が2mほど続いていた。その灰層の下部からは赤褐色を呈する口径6cmの小形仏器状盌が、燻焼されぬまま出土した。また須恵器片を3か所の床面から得た。その中には青海波文様の2片があった。

東壁添いに一列に続くように須恵器片、自然石、粘土塊等が上方に続き、中央部では須恵器片が熔着した自然石多数が出土した。自然石は火焔のため焼けていた。

残存天井部は窯址のほぼ中央部にあって、床面からの高さは約1mでドーム状であった。その他の天井部は全部崩壊していた。（第50図）。

床面は中央部までは黝色、その他の床面は赤褐色に焼け、厚さは4～5cm程度であまり堅くはなく、発掘用具で充分削ることができた。側壁および残存天井壁は、前述の床面にほぼ対応しているが黝色の部分が稍々広いようであった。壁面の厚さは窯尻部が15～16cm、その他の部分では約20cm前後であった。天井壁は5～6cmの厚さであった。壁の補修したとみられる跡が所々に残っていた。残存全長は7.6mであった。

発掘は延27人の作業員を投入して6月4日に完了した。翌5日に測量を実施し、写真撮影を済ませた。

（興津正朔）

窯址の構造（第50・51図）

本窯址は丘陵台地の傾斜面を利用し、台地中腹より稍々のぼった粘土層の地山を刳り貫いて構築したトンネル式無段登窯である。斜面と平行に焚口を南に向け築造されたが前述のごとく焚口と燃焼部の一部は削り取られ、煙道部、窯尻の一部は耕作の際に破壊され、天井も中央部に僅か遺存していたほかは全て陥没していた。築造当時の規模の全貌は把握するに困難な面が多い。発掘調査によって判明した概要を次に述べる。

窯構築当時は全長10m前後と推定するが現長は7.6mであった。最大巾は削られた燃焼部で1.8m、窯尻付近で1mである。BB′巾1.4、CC′巾1.44、DD′巾1.6mである。窯床下端から約2mは稍々緩傾斜で燃焼部と思われ、それから窯尻までは傾斜が少し急になっていた。平均およそ23度の傾斜である。燃焼部と推定した床面には灰、木炭片が残り、床面は青灰の黝色を呈し、焼成部は赤褐色であった。

窯床には甕の破片と石を配した段状施設の一部分が遺存した。それは中央部の東壁に約3mに列状に残っていた。中央は石に甕片が溶着したものや、窯滓が石に固く付着したものがあった。燃焼

部には3か所に甕片や石が置かれていたが、これは上段から滑り落ちてきたものであろう。窯尻から約2m下った西壁にも石が置かれていた。もともとは、もっと多数を施設してあったであろうが、現存しなかった。

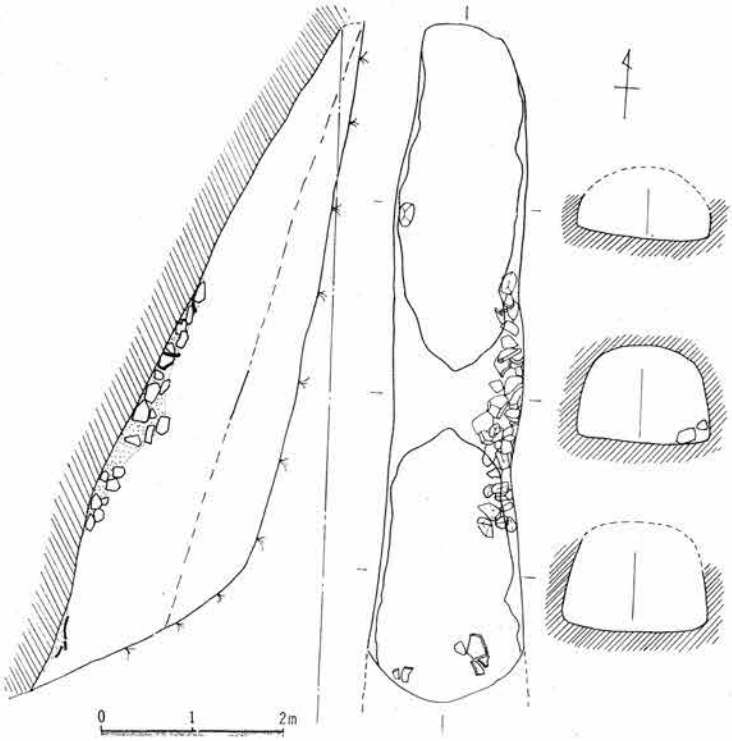
天井は窯の中央部に遺存し、また、窯全体にわたって側壁上部から天井部へ移行する部分が比較的よく残っていたので、かなり正確な高さを求めることができた。中央遺存天井の高さは1m、BB′では0.8m、DD′では1.2mである。（第51図）。

側壁はほぼ垂直に立ちあがり、天井部へ移行する接点はカーブし、ドーム状の天井であった。焼焔のため壁も天井も赤褐色に焼かれ、かなり固い焼土となっていた。厚さは15～20cmである。西壁下端部には掘削のために用いた工具の刃の痕が微かに残り、中央部には粘土で補修したとみられる跡も残っていた。

燃焼部下端の床面には中央より稍々東寄りに巾80cm、深さ25cmの落ちこみがあった。その中には木炭片、灰、窯壁片、粘土等が詰まっていた。この上層にあった床は両側の床の厚さよりも薄く、平滑でなかった。これらは燃焼時に破損されたものは補修したものとみられる。

トンネル式無段登窯は須恵器としては最も古い形態のもので、茶

第50図　トンネル式無段登窯



第51図　トンネル式無段登窯（1：80）

白峯6号窯址①（註1）と築造は同時期と考えられる。茶臼峯6号址の年代を8世紀前半と考定したが本址もそれに比定するわけである。（金井汲次）

窯址内出土遺物（第52図）

本窯址の発掘調査によって、窯床面から検出した遺物は次のようなものである。大甕片43点、壺片4点、蓋片3点、坏片3点、把手片1点、盌1点、窯滓多量、木炭片多量、自然石31個。この他後期弥生土器片、後期土師器片等各10数点、布目文を付した丸瓦小片1点を得た。これらは窯尻付近で、いずれも床面より浮いていた。廃窯後、上部からの土砂の崩れ落ちや流入によって周辺に散布していた遺物が混入したものと推定される。

本窯址の最後の焼成物は比較的小物の壺、坏、蓋類であったらしく、大甕片や自然石は焼成台に使用されたものである。窯滓には高熱のため甕片、坏片、蓋片、壺片等を付着したものが数点あった。

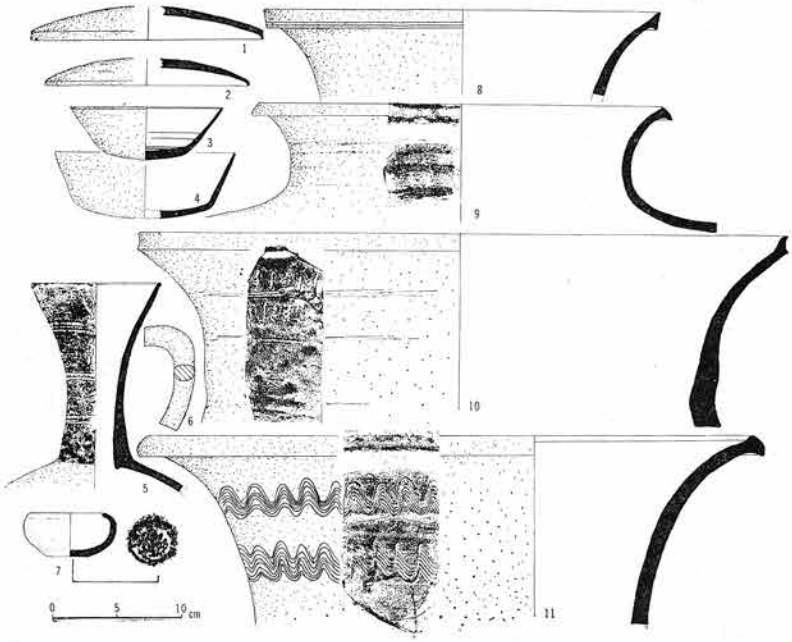
次に窯址内から出土した遺物について述べることとする。

(1) 蓋形土器　いずれもつまみの部分を欠失しているためその形を知りえない。1は青灰色で、表面にはロクロ目を残しているが、稚拙な技術の痕と見られる。2は褐色でいっ見土師器と思われるほどであるが、燻焼が不充分であったためと思われる。

(2) 坏形土器

3は口径12cm、高さ4cmの薄手造りで、暗青灰色を呈する。底は篦起しの痕を残している。4は破片で燻焼されぬため褐色である。

(3) 長頸壺形土器　頸部のみで壺の部分は欠失しているため器形は判明しない。（註1）頸と壺の接合部はホゾになって、接合した痕が明瞭に残っている。胎土には細粒砂を混入



第52図　トンネル式無段登窯出土土器（1：6）

し、焼成は良好で青灰色を呈する。ゆるやかに外反して口縁に至り、口径は10cmである。頸部には2条の細かい篦描き沈線を3段にわけて繞らしている。

(4) 把手　6は壺の環状把手の破片で、所々に自然釉がにじみ出ている。黒漆色で光沢を有する。

(5) 甕形土器　甕形土器片はいずれも相当大形のものであろう。前述のごとく焼成台に利用されたもので、須恵器特有の燻色は再三の火焔のため赤褐色ないしは紫褐色と変っている。8は漏斗状に開いて口縁にいたり、先端は割合に深い折り返しをみせている。折り返し帯の下部には2条の細かい沈線が繞る。窯滓を付着し、1か所には2本の指紋を残している。

9の甕の肩部から急に立ち上って外反し、口縁で折り返しをみせている。肩部には粗い畳目状敲目文を残している。器面は凹凸が著しく平滑でない。10の口辺はラッパ状にゆるやかに開いて口縁に至り、口縁部の外側の造りは2段である。内側にも浅い段がある。口辺の上部には2条の沈線で区切った帯の巾に3本歯の櫛状工具による沈状文を付している。上段のものは1回描きであるが、下段のものは重ね描きである。胴部と口辺の接点には篦による接合調製の痕を残す。所々に窯滓を付着している。ラッパ状に開いて外反し、口縁には折り返しがある。口縁内側には小さな段をつくる。9本歯の櫛状工具で横に波状の文様を描く青海波文を付した大甕の小片があった。

以上4個体分は割合に薄手造りである。このほか3個体分の無文の大甕片があって、いずれも肩部から急に立ち上り、口辺は僅か外反して口縁に至るものがある。造りは厚手で褐色を呈している。殆んどが甕の破片で器面には粒い畳目文を付す。この他無文の甕の破片多数があった。

(6) 盌形土器　7は口径6cm、高さ4.5cmの小形の盌である。側面は底から球状に立ち上り、口縁は鋭く内湾し、仏器を思わしむる形状である。胎土は極めて良質の粘土を用い、細砂を混入し、器面は良く磨研されている。燻焼が及ばなかったのは焼成中転落し、小形であるため灰層に埋もれたためであろう。

本窯址の遺物の中で注目されるのは、窯床面から2点青海波文を付した大甕片を検出したことである。青海波文は、同心円状敲具によって甕の内面を調製したものであるか、須恵器製作技法からは古い年代とされている。次にロクロから切離法に篦起しの坏の例がある。茶臼峯6号窯址（註2）の遺物も同様であった。

前述の「窯の形状」の項でも本址は茶臼峯6号址に平行するとしたが、遺物も共に関連性をもつ点から繰業は同一時期であったと考える。　（金井汲次）

註1. 2.　大川清・金井汲次　「長野県中野市草間窯業遺跡」　信濃Ⅲ 17の12

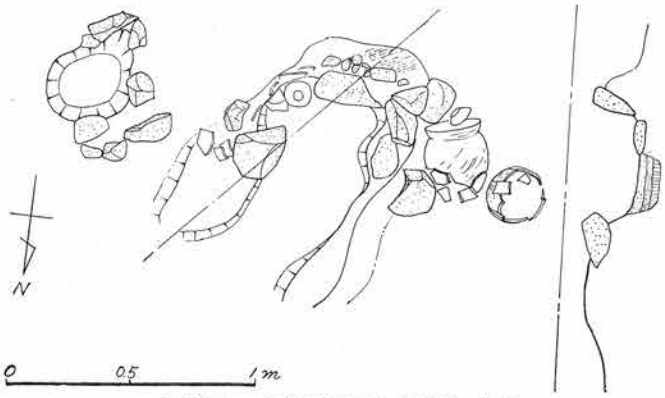
第8節　土師期住居址の調査

発掘経過

Aトレンチに平行してBトレンチ40m×2mを設定し、表土をはいだところ、第1区中央の北壁に石組みを発見した。一部焼土がみられカマド址と推定し、これに伴う住居址の発見に主力をおい

た。しかし、耕作による攪乱が激しく、プランを確かめることは困難であった。

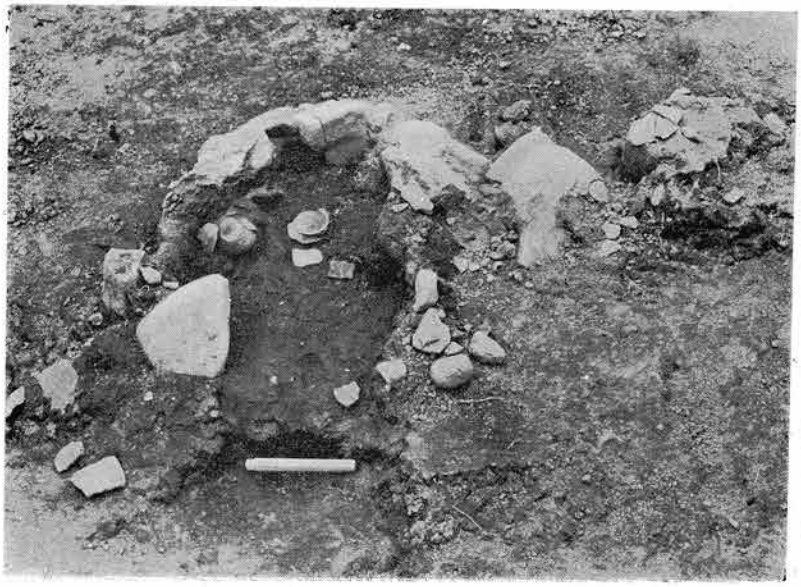
石組みの上面は表土から20cmにあたっていた。壁面はもとより、床面も破壊され壁面、床面からの住居址の追求は困難であると思われるので、石組みを発掘しこれを中心にプランの確認をすべきであると考え、石組みの摘出を行なった。Bトレンチから北方へ4m×2mの拡張区を設定し、石組みの周辺の土を排除した。



第53図　土師期住居址竈（1：30）

まずカマド址西側から焼土とともに土師器甕形土器、坏が底部を上に向けて出土した（第55図8.9）。続いて甕形土器が横だおしの状態で出土し（第55図2）、石組みは20cm大の河原石6個、10cm大のこれも河原石を数個焼土内に詰めてあった。これらの石の間には粘土を詰め焼灰がその上を被っていた。なおも土を排除していくと、焼土と粘土に連なって赤褐色に焼けた土器片が壁を思わせる状態で出土した。

これを追っていくと、右壁の石組みと対称に楕円形のプランを持つ石組みのカマドであることが判明した。右壁は河原石を用い、これに粘土をつめているものと反対に、左壁は土器片と粘土でもって築いている。焼土を追って広げていくと、灰混りの強い焼土が現われ焚口を思わせた。


第54図　土師期住居址竈

土器の底部、カマド址を中心に床面を追求するため、周辺を掘り下げたところ東端の焚口の横に接して、もう1つの石

組みが検出された。高台付坏形土器の底部と、赤色に焼けた土器片と灰が認められた。河原石を20cm大に長方形に割り、ほぼ直径30cmのピットをかこむようにして組まれていて、東側には石組みを欠いていた。副設の炉址と考えられるものである。

住居址のプランの確認は前述したように、耕作による破壊によって不可能であった。カマド址は畝間に入って破壊をまぬがれたと思う。（第53・54図）　（下平秀夫）

竈址の構造

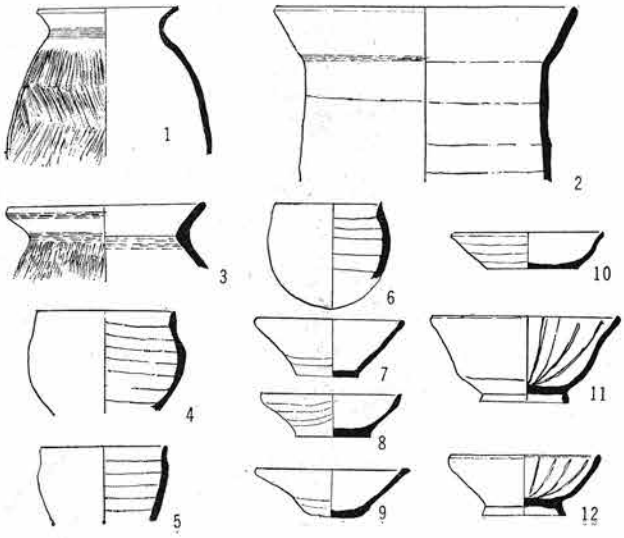
前述したように、カマド址と関連する住居址プランは全く確認する事ができなかった。カマド址が住居址の壁とどんな方向で取り付けられたものかも知ることはできない。

(1) カマド址　河原石と粘土、または土器片の組み合せによって築かれている。焚口巾35cm、火床の奥行70cmで全体として楕円形をしている。全体に20cm前後掘りくぼめ、西壁は約20cm大の河原石を粘土と組み合せて造っている。

まず、基底部を土器片と10cm大の石で築き、その上にほぼ同じ石を持ち送りの状態でおいて、支脚の代用をさせていたものと思われ、その上に20cm大の石を置いて粘土をつめていたものと思う。奥壁もほぼ同じ構造であろう。奥のつぼんだ所の前面に――カマド内に平板石（30cm×15cm）が落ち込んでいた。東西壁の両方に渡して、あるいは煙道の一部をなしていたのではなかろうか。裏面は黒く焼けていたのはこれを更に確かなものとしよう。奥壁に続いて南側に多くの赤色土と赤色灰をみたのは煙道であろうか。東壁は石を用いず、土器片と粘土で壁を築いているが、焚口部には25cm大の河原石を置いている。基部に10cm大の石を芯としている。支脚の代用として高台付坏形土器を用いている（第55図11）。

そしてこのところには他の場所より多くの土器片を用い補強している。カマドの袖の部分まで厚く粘土で被われており、カマド址はいずれも赤色に焼け、特に奥壁の焼成は激しい。床面は特に焼けていることはいうまでもないが、地山に達するまでに3層位が認められ、各層とも3～4cmの厚さであった。

①土器を混入した赤褐色土層
②炭化物が混入した明褐色焼土
③黒褐色焼土 ―→ 地山という層位を示した。焚口に近くなるほど焼土は少なく、灰は多くなった。



第55図　土師期住居址内出土土器（1：6）

(2) 炉址　ほぼ円形のピットを

囲むように、これも河原石を割った20cm大の石を用いて築いている。粘土等で被った形跡はなく、ピット内は焼土、炭化物、赤色焼灰、土器片が充満していた。ほぼ円形のピットであるが、東方に配石がなく灰化物が多かったことから焚口であろう。焼土の下に炭化物層がみられた。直径約35cmである。（金井汲次）

出土遺物（第55図）

(1) 甕形土器 (1)（第55図1～3） 竈址と接して出土した。1は底部を欠き、2は口縁部の一部のみ残していた。1は口縁部を下に伏せられた状態で出土し、胎土、焼成ともに良く明褐色で、2は赤褐色であった。1は口縁部が立ち、肩もそれほど張ってなく胴部につながっていく。肩部には巻上げ痕を残し、横に走る刷毛目がみられる。胴部から以下は格子目状の敲き目による整形をしている。全体に荒い整形で裏面はかなり凹凸している。肩部の裏面には、指痕が残されている。内面は煤が付着している。口縁部は稍々厚く、胴部は稍々薄くなっている。

3は口縁部のみである。赤褐色で焼成、胎土とも良好である。口縁部から肩部にかけて、擦痕がみられる。胴部は左から右へ横走する刷毛目擦痕がある。口縁は「く」の字状になる。

(2) 甕形土器 (2)（4～6） 竈址付近から出土した。明褐色で胎土はあまり良くない。口縁部は外反ぎみで短く口唇は丸味を持つ。約1cm幅の捲き上げ痕を明確に残している。内面は黒磨きしてあり、6は丸底であるが他は底部を欠くも、小さい平底がつくものと思われる。6の胎土には砂が混入されている。

(3) 坏形土器（7～10） 坏の口縁は直線的に開くのが一般的であるが、7.8.9は口唇にいたってやや内高気味をみせている。焼成、胎土は良好で、底部はみな糸切りである。竈址内からの出土である。

(4) 高台付坏形土器（11～12） 竈址内からの出土である。台部が稍々開き底は糸切りであるが篦で整形している。内面は黒磨きで、放射状に上方へ篦整形されており、胎土には細粒砂が混入して色調は褐色である。口縁部には煤が付着している。（下平秀夫）

まとめ

わずか1ケ所のみではあったが土師期住居址の調査にめぐまれたが、しかし竈址のみで、住居址の全貌を明らかにすることができず残念であった。竈址の面で床面を追求したが、わずかに黒土層がみられるのみで、精査したが、耕作によって攪乱されて、おそらく貼り床と思われたが、積極的に床面と断言することはできなかった。他遺跡での例から竈の位置及び炉址は住居址の北西隅に築いたものと推定される。駒ケ根市東伊那殿村遺跡（註1）や平出遺跡（註2）に数例ある。

次に竈址と炉の副設については、更埴市巾田遺跡（註3）において発見されたという。竈址に用いられた河原石は、地元の人の話によると安源寺地域では畑地内から石が出る事は珍らしく、河原石であることから近くの夜間瀬川か千曲川から持ってきたものと思われる。

本竈址の年代について、現在までの資料をみると石組み粘土竈は、平出遺跡、城ノ内遺跡（註4）

等ではかなり後出的であることが確認され、殆んどが国分期のものであった。

そして出土土器からも、糸切り底の坏、高台付坏土器で、国分式の特色を示している。また、駒ケ根市殿村遺跡、更埴市巾田遺跡の住居址にも国分期の新らしい要素を持っている。本住居址もこれ等と同様な時期の所産とみてよいであろう。　（下平秀夫）

註1. 大場磐雄「駒ヶ根市東伊那殿村遺跡」　信濃 III　4－11

2. 大場磐雄他「平出」　平出遺跡調査会　朝日新聞社

3. 森島稔氏の教示による

4. 岩崎卓也「城ノ内」　東京教育大学研究報告

第9節　中世・近世の墳墓群調査

土葬墓

(1) 土葬墓1号（第56図）　Cトレンチ4区～5区の南側から火葬墓群10基が発掘され、5月31日にこの西限を探る発掘を行った。このとき、西側の隣接地に赤褐色粘土が現われた。火葬墓のような礫の集積はなく、その南側に混土層が深く落ち凹んでいる所が発見された。

そこで、北側の粘土壁を規準に穴を拡張しながら掘り下げた。粘土面から40～50 cmで、拳大の礫が3～4個あり、これと共に古銭4枚が発見された（開元通宝、景祐元宝、正隆元宝、淳熙元宝）。なお、発掘終了後に同層位と思われる東壁粘土層中から、密着した2枚の古銭が発見された（紹聖元宝、聖宋元宝）。更に60cm位に達すると、北壁寄りに径10cm大の石が現われ、この直下に丸味を保った頭骨があった。

顔を西に向け、石がこれを押し潰した状態になっていた。頭骨は永い間の土圧のために扁平に圧し潰され、細かにひび割れてはいたが、崩れてはいなかった。頭骨から南約30cmの所に、下肢骨が4本、ほぼ南北に揃っており、この両者間にも骨の細片が散乱していた。1体分の人骨で、北枕で西向きした埋葬状態である。

頭骨の周辺や下から、古銭6枚が発見された（元豊通宝2、元祐通宝2、景定元宝、淳熙元宝）。また人骨の西半分を囲むような位置で、鉄釘、竹釘等が発見された。南北約1 mの頭骨の北側と下肢骨の南側でそれぞれ30～40 cm、コの字形に釘が残存しており埋葬は木棺に納められたもののごとくであるが、棺材は殆んどなかった。

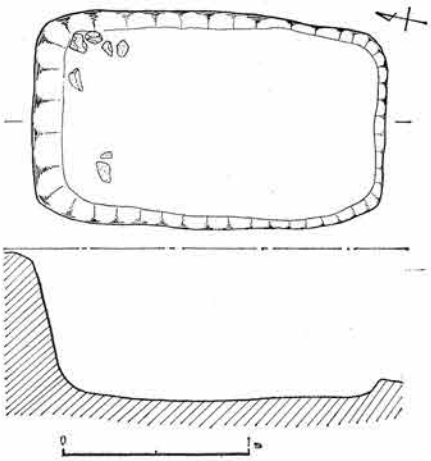
坑は、縦が南北1.2 m、横は東西0.8 m、深さ北壁0.6 mで、坑底は更に10cm程凹んでいた。（第56図）

地表の形状は耕地であったため削平されたか否かは全く不明である。木棺や出土の古銭、礫の状況からは、現在この地方で行われている土葬形式を思わしむるものがある。

なお、人骨の取り上げは6月2日、信州大学医学部香原志勢助教授ほか2名の助手によって行われた。

(2) 土葬墓2号　Cトレンチ2区北方拡張区に発見された土葬墓で、地表下25cmに人骨が出土した。人骨は頭骨と下肢骨で保存状態は悪く、頭骨は完全に崩れていた。下肢骨は一見屈葬の形をとり、腰部辺に近世初期と推定された小柄が副葬された形で置かれていた。その人骨を埋葬した墓穴の輪廓は全く不明で、現在の土葬同様に、ごく浅い穴をほり、同上に土饅頭を築いたものと思われた。

(3) 土葬墓3号　Cトレンチ3区中央に検出された。後記する火葬墓と同様な状態をとっており、その量は少なく、極めて細片化していた。香原氏によりその骨片の焼成をうけていないことが、指摘されたので、土葬墓3号と命名した。土坑の規模、プランは不明である。ただ骨片の周辺に焼土、禾本科質の木灰が相当量存在したのが注意された。



第56図　第1号土葬墓（1：20）

(4) 土葬墓4号　土葬墓1号発掘のため、南へ拡張した時、東南に隣接して火葬墓11号が発掘された。火葬骨の下から須恵器造りの擂鉢が出土しさらにその下部が混土であるため、6月9日これの発掘を行った。

約30cm下の粘土層上に人骨を発見した。やはり散乱した4～5個の礫があり、その下部に人骨があって、坑底はほぼ1号底と同レベルで、1号南壁が境となっていた。

人骨は、火葬11号の直下より稍々西へずれ、仰向いた頭部を壁界に少し寄せかけ、下肢骨はこの南約30cmの西壁近くから南々東方向に屈膝した4本が重なっていた。頭骨は腐蝕が多かったが、歯は顎の一部と共に稍々原形を保ち、下肢骨もひび割れてはいたが同様であった。その他の散布骨片は1号より稍々多く、副葬品等は発見できなかった。

坑は地形上充分拡張する事ができなかったが、東西約70cm、人骨遺存部は南北約80cmである。

（興津正朔）

火葬墓

ここに火葬墓とよぶのは、Cトレンチ及びその拡張部において発見されたもので（第57図）、粘土と一部に小石を敷いたような極めて簡単な遺構の上に細かな火葬人骨片を集積し、それをおよそ12個所にわたって配置しているものをさす。

この火葬墓群はいずれも南面する安源寺丘陵の傾斜地に臨んで立地しているが、もともとこの発見は全く予想されていなかったことである。その動機は、Cトレンチ発掘の際、トレンチ中央部において基盤の落込みが認められ、はじめ住居址等の壁であろうと予測されたのであったが、拡張発掘した結果、はからずも1号から10号までの火葬墓址が次々と発見されたのである。結局、この落

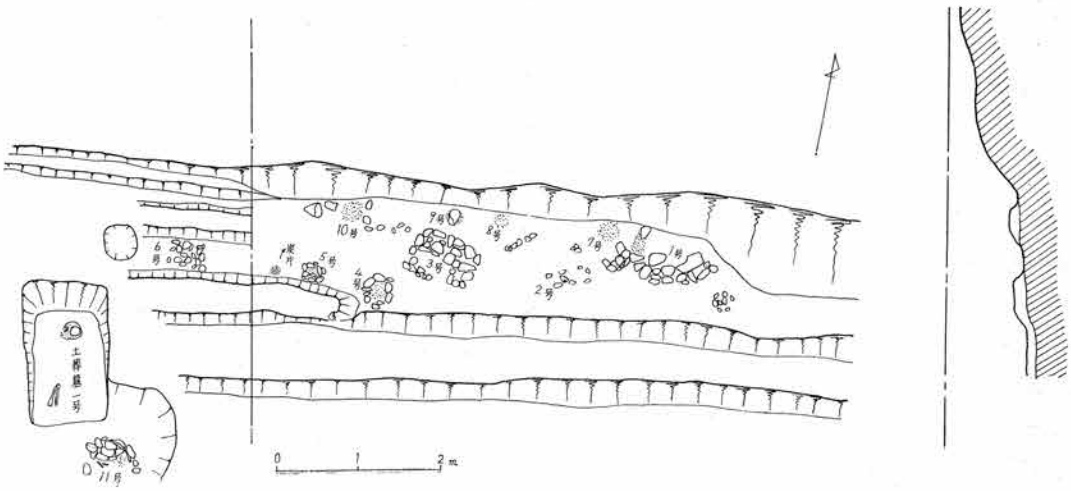
込みも後述のように火葬墓に関連する遺構と考えられるに至った。なお、この一群からやや離れた地点に11号が、Cトレンチの他の地点より12号址が発見されたが、1～10号が大体一個所にかたまって規則的な配列状態をなしているのに対し、この二つは出土状態等の点でやや趣を異にしているようである。

ところで、火葬墓とするこれらの遺構や人骨の出土状態であるが、これについては特に1～10号において明らかに把握されたといってよい。即ち、厚さ約20cmの表土（黒褐色土層）のすぐ下に続く基盤（黄褐色粘土層）は丘陵線に沿って南側に傾斜するが、遺構はその斜面を横へ平行に削りとり壁となし、その下部に巾約1.5mの平端面を整地しているのである。Cトレンチに認められた当初の落込みはこの壁のことである。そして、この平端地の上には粘土の盛土が施され、その部分が土壇状にかためられている。火葬骨は大体この盛土の上に配置され、砂利や小石を伴なっているのであるが、これを全体的に観た場合、丘陵の斜面を利用して地面を階段状につくり一定の粘土盛土でかためた上に点々と火葬人骨を配列したような状態になっている。径15cmほどの範囲内にである。しかし、火葬人骨の出土状態はむしろ不規則なもので、必ずしも一様の形式を保っているとは考えられない。強いてその特徴をあげれば次のように二つに類別されよう。

Ⅰ類　小石を敷き集めた特別の遺構を伴なうもの（1号～6号・9号）

Ⅱ類　粘土の盛土の上に小石のかわりに砂利等を充当させ、直接火葬人骨を集積したもの（7・8・10号）

Ⅰ類の場合は更に1・4・5号のように小石を敷いた上に比較的多くの人骨を置いた形跡のあるものや、3・6号のように人骨片は非常に稀だが小石が最も多く集められているもの、また9号のように人骨の集積された上に大形の石を置いているものなどに分別される。この中、1・4・5号の例などは当火葬墓群における典型的な一特徴を示すものといえよう。特に4号址の場合では小石



第57図　中世・近世墳墓群全体図（1：90）

がほぼ円形に敷かれ、その上・下にぎっしり火葬骨が集積している状態であった。1・5号などでも同様であったが、これらの小石群は何らかの用途をもって、おそらく火葬骨を埋葬する際に敷いたものか、あるいは囲ったものであろう。別に、3・6号のように人骨片が皆無に等しく小石ばかり累積しているような状態の例もあり、また9号のように大形の石をもって、集積した人骨を上から押えるようにしている状態のものもあり、一定していない。

Ⅱ類の場合は前者の1・4・5号等と同じく極めて骨の量が多く、散乱せずにかたく集積している。これらには共通して意識的な石の配置がなく、前者の例にも多少認められたが、粘土盛上に細かな砂利を敷き、その上に人骨を置いている一方、この類例(7・8・10号)はいずれも壁に沿って所在していることが指摘される。

以上の外に11・12号の場合であるが、この二つは出土地点や状態の上から著しく明確さを欠いている。11号は土葬墓の墓穴の上部にあたる黒褐色土層中から出土したもので、1〜10号火葬墓群とどのようなつながりを有しているものか把握されなかった。但し、小石を敷き火葬人骨を伴なっている状態は1・4・5号址のものと同類である。また、この出土地点が中世土葬墓の上層に相当する点、当火葬墓の時期決定の上で重要であると思われた。12号は火葬墓群から離れた地点に出土しているためと、明らかな遺構を伴なわず、細かな人骨片が出土しているにとどまり、趣が異なる。

以上、火葬墓の状態を中心に概略述べたが、これに伴なって出土した人工遺物は意外に少なく、出土遺物としては11号址に小石と共に敷かれていた擂鉢の破片と、4・5号址附近で出土した刀の鍔だけである。このことは当然火葬墓の時期決定の上に支障をきたしているのであるが、今の所、擂鉢は中世のものであり、刀の鍔は出土地点にやや難点を残しているも、その時期は近世後半のものであるということが知られている。

なお、5号址のすぐそばに炭片の集積が残存していたが、火葬墓と何らかの関連性を意味するものであろう。

(関　孝一)

墳墓群出土遺物

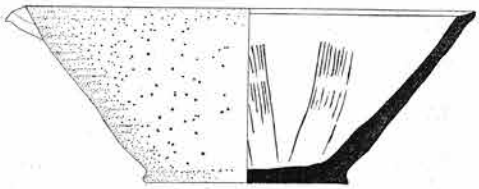
(1) 擂鉢(第58図)　火葬墓11号址の発掘によって検出された擂鉢について、形状を述べ考察したい。底部から口辺に至る大片1点と胴部小片3点の計4点の遺物であるが、復元によって器形の全姿を知ることができる。口径34cm 高さ12.5cmの青灰色を呈する須恵質の擂鉢である。底径15cmから80度の漏斗状に開いて口辺に至る。口辺には巾4cm、長さ2cmの注口を付している。注口の胴部の厚さの2分の1(6mm)で、口辺に後から取り付け接着後は内面を指で、外面は竹篦で接点を磨いている。

擂鉢の内側には10条の櫛状工具によって底から放射状に縦の刻み目を描き、擂りの機能を高める施文がある。底から6cmの高さまでは擂り減りによって条痕はうすれ、白灰色に変色している。外側にはロクロ目を残し、底全面には内側に描いた櫛状工具によって軽く調製した痕がある。

擂鉢の出土例は長野西高校々庭、上水内郡、戸隠村奥社講堂址や、近くには上条(下高井郡山ノ内町)(註1)に求めることができる。上条の場合は住居址内にあった焼土の周辺から擂鉢片8点

と古銭５枚が出土した。擂鉢の大きさは安源寺のものより稍々小振りであるが、その他は極めてよく類似している。出土銭の例を考定すると中世も中葉を少し降ると思われる。

本址の場合も中世中葉末と考えたい。本址の下層に存在した土葬墓４号は、１号址と遺構・遺体は同様であった。後述のごとく１号址の年代は出土銭例から中世中葉と推定し、層序は土葬墓址２号が中世中期で、火葬墓址11号が中世中期末となる。



第58図　第11号火葬墓出土擂鉢（１：６）

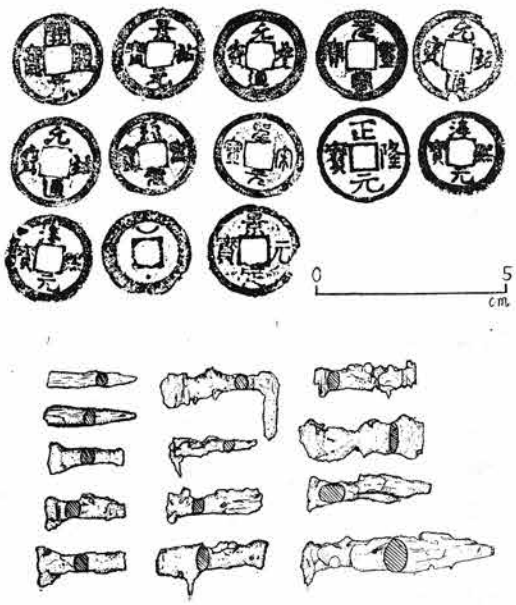
(2)　古銭（第59図）　Ｃトレンチの５区南側拡張部から発掘された土葬墓１号址から12枚の古銭が出土した。銭種・量・鋳造当時の中国帝王・鋳造年代（　）を示すと次のとおりである。

開元通宝	１枚唐高祖（621年）	景徳元宝	１枚北宋仁宗（1034年）
元豊通宝	２枚北宋神宗（1078～1085年）	元祐通宝	２枚北宋哲宗（1086～1093年）
紹聖元宝	１枚北宋哲宗（1094～1097年）	聖宋元宝	１枚北宋徽宗（建中年間）
正隆元宝	１枚金帝亮（1157年）	淳熙元宝	２枚南宋孝宗（1174～1189年）
景定元宝	１枚南宋理宗（1265～1274年）		

銭種は９種類であるが、元豊通宝は楷書と隷書の銭文であった（第59図上）。淳熙元宝のみが「U」を上部に「・」を下部にして背文としていた。一般に磨滅度が高く、通貨としての機能を充分に果した銅銭で、遺体納棺の時に副葬品として納めたものであろう。

出土銭の殆んどは開元通宝であるが、下限限は埋蔵年代によって異なる。田麦（中野市田麦江本庄一郎氏宅）（註２）は洪武通宝が下限であった。本例は景定元宝が下限であって、次にくる至大通宝、大元通宝、大中通宝等は存在しなかった。さらに次代の明銭、洪武通宝・永楽通宝も無く、もし当該時の埋蔵とすれば永楽銭は必らず含まれる。今回のものには皆無であったゆえに、その年代は景定元宝から洪武永楽銭の間と思われ、輸入の時間的差異を勘案しても中世中期に位置するものと思われる。

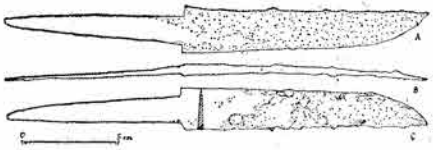
(3)　釘類　土葬墓１号址から得た釘類は13本で、そのうち鉄製は11本、竹製は２本であった。鉄製の釘は腐蝕し、銹のため瘤



第59図　第１号土葬墓出土古銭・釘（１：２）

状の凸凹が甚だしく原形は判明しない。しかし残存例の最も良好と思われる2本の場合をみると長さは5cmである。

竹釘（図右端下2本）は赤褐色を呈し、原形の半折のものであろう。（第59図下）　釘類は埋葬棺に使われたもので、出土状態は前述の通りであるが、長さ2.5cmであったことと、竹釘の例から棺材の厚さは2cm位のものを使用したのではないかと推定される。



第60図　第2号土葬墓出土小柄（1：4）

(4) 小柄（第60図）　Cトレンチ2区の北拡張部に所在した土葬墓2号址から出土したものである。

全長21.4cm、刃部12.4cm、柄9cm、巾2.2cmで、A面は上方に向けて置かれ、柄の部分は銹びずに青黒色を呈していたが、刃部は浅い腐蝕が全面に及んでいた。Bで見られるように右に稍々曲げられていたが、その事情は明らかでない。C面は下方に置かれ柄を除いては腐蝕が甚しく、所々に小さな瘤状の錆がある。

小柄は脇差等の鞘に添えて挿しておく刀剣の小道具であるが、普通には10cm前後の長さをもち、巾は1.2cm位のものとされているが、本品は前述の如く極めて大形なものである。鍛造も良好でないところから副葬を目的に製作されたものかも知れない。年代は近世前期後半乃至中期頃のものではあるまいか。　（金井汲次）

註1.　山ノ内町誌登載予定　昭和28年4月、山ノ内町上条3869番地（地主＝池田一二氏）の水田から中世の住居址が発見された。住居址は柱穴14、焼土・遺物は柱片10・擂鉢片8・須恵器片3・土師器片1・古銭4（皇宋通宝・熙寧元宝・元豊通宝・元祐通宝）
擂鉢は底径14cmで内側には10本の櫛状工具による縦の刻み目がある。

註2.　日比野文夫　長丘村出土古銭調査　「下高井」所収

第10節　墳墓群の考察

本調査地区の西部において発見された墓地群は、火葬墓11か所一群と、土葬墓4基の一群であって、まずこの年代的位置づけについて述べてみたい。

(1) 火葬墓群　本火葬墓群は、南北1.4m、東西7.2mの浅く凹んだ墓域内に設けられた土壇と配礫遺構の中に、10個体分の火葬人骨を各個体ごとに配列して埋葬したもので、一定の配列状態が認められるところから、さして時間をおかずに埋納されたものと考えられる。ただし4号土葬墓上層部に検出された火葬墓11号址と同12号址はこれらの一群からやゝ離れた単独のものであるが、配礫遺構や層位の状態から見てさして時期のかわらぬものと認められる。

埋葬状態については第9節に述べられたように二つの形式が見受けられる。すなわち、配礫遺

構を伴うものと、伴わないものとであるが、前者は土壇上に位置し比較的人骨量が少く、後者は、溝状遺構に位置して人骨量は比較的多量である。これは何らかの差異を示すものであろうが、明らかでない。それは男女の差、年齢差、社会的地位、身分等の差等であろうが、副葬品もなく人骨も燃焼度が著しく細片化し、更に捩れ、彎曲が著しく測定不能であるので差異が認められることを指適するにとどめたい。火葬骨を配列する葬法を他例に求めれば、関東地方には中世の「やぐら」（墳窟）があり、鎌倉市浄光明寺例（註１）によれば、小規模な横穴の内部に、礫を敷き並べた壇を築き、壇上の奥壁に沿って平行に火葬骨数箇体を並べ、その前に石造五輪塔董瀬戸小華瓶、素焼小壺等が副葬されていたという。本例に認められた火葬骨の配列、配礫遺構、小規模な土壇状遺構等はこの「やぐら」の葬法と一聯の関係をもったものと思われる。副葬品については、前述の「やぐら」と異り、ほとんど副葬品らしいものを伴っていない。ただし11号墓は、須恵器質擂鉢（第58図）を伴っており遺物のうえから唯一の時代決定資料を提供した。「遺物」の項に述べられているように、中世としての特質をもつ本品の出土例を、近くに求めれば、善光寺平においては、長野市長野西高校敷地例、上水内郡戸隠村戸隠神社奥社遺構（註２）例、下高井郡山ノ内町上条例がある。特に上条例は、住居址内部に存在した焼土の周辺から宋銭を伴って出土しており中世中葉をやゝ降る時期のものとされている。本例はこの擂鉢よりやゝ大形であるが、形態、施文、器質等きわめて類似している。また、新潟県金谷墳墓（註３）においては、擂鉢数箇が、甕破片と共に副葬されていた。この墳墓は、円形のマウンド（径７ *m*、高1.5 *m*）に葺石が施され、その内部に、厚い木炭層があり、この中に多量の人骨が埋葬されていたという。調査者は、中世の墳墓と断定されている。

４号火葬墓南側出土の刀剣鐔は、木瓜形（短径7.3 *cm*、長径6.5 *cm*）で湾曲が浅く表面に菊水文様が浮文で鋳出されている。裏面は無文で、縁はおり返して厚くなっており、全体に鋳造が粗悪で、ぶ厚い（厚さ６㎜）点等、近世の所産と認められる。出土層位が表土である点と併せて、本火葬墓に直属したものとは認め難い。以上副葬品から見ても、本火葬墓が営まれたのは、中世中葉の時期として差し支えあるまい。

次に層位関係からの問題であるが、擂鉢を伴った11号火葬墓の直下に存在した４号土葬墓は、後述するように中世中葉も中ごろのものと認められることから、この火葬墓群は、土葬墓１号・４号に後続して営まれたものと解され、その時期は、中世中葉を過ぎる末ごろのものと推定できるのである。

(2) 土葬墓群　前述の火葬墓に近接して出土した土葬墓群は、４基が数えられる。それぞれが単独に営まれたのかその分布にはまとまりがないが、その葬法から見るとき三形式に分類できる。

第一類は１号土葬墓に見られる長方形竪穴式墓坑に埋葬された木棺内人骨は、北頭位、西面、横臥屈葬である。副葬された古銭12枚は北宋銭に限られ、その下限は、景定元宝（1274年）の終末期から伝世期間100年として、まず14世紀末と見做すことができる。したがって時代的に見れば南北朝時代中ごろから室町時代初頭のころに係る頃のものであろうか。４号土葬墓も恐らくこれに類したもので、葬法が、仰臥屈葬の点、副葬品がない点が異るのみで、他は１号址と同じでありほゞ同一時期のものと見做すことができよう。

第二類は、３号土葬墓に見られるように、墓坑が浅く、焼土、灰層に囲繞されたもので恐らく、埋葬に伴う焚火であって、いわゆる幡火の風習をもの語るものであろう。注意すべき葬制であるが、工事中に発見されたもので詳細が不明な点は残念である。この時期については決定できないが本土葬墓中もっとも古い時期を示すものであるかも知れない。

第三類は、２号土葬墓に見られるような浅い墓坑中に北頭位、西面、横臥、屈葬と推定される人骨が存在した。この人骨は、釘類など認められないこと、墓坑が浅い点などから見て、木棺ではなく、梱包または被覆された状態で埋葬されたものであろう。そして墓坑の上は「土まんじゅう」形を呈していたようである。副葬品は、鉄片と大小柄一振（第60図）である。鉄片は、腐蝕が甚しく不明であるが鏃先類似のものである。大小柄は、鍛造でなく、延鉄（のべがね）を加工して形を整えたもので、実用具とは認め難い（註４）。近世に流行したものである点や前述の所見からみて恐らく埋葬用に特に作製されたものではあるまいか。現在も行われている葬儀の風習の中に、死者の埋葬前に、遺体や納棺後の棺の上に刀剣を置く風習が県下各地に行われているが、以前にはともに埋納する風習が行われていたのではなかろうか。少くとも近世中葉の頃の時期を示すものであろう。

以上、土葬墓群について述べたが形態、様相もそれぞれに異り、その年代も、中世中葉から近世中葉にかけて営まれた土葬墓群であることは疑いない。

(3) まとめ　本遺跡の古墓は前述のように土葬墓４基、火葬墓12基計16基を数えるが、土葬墓はやゝ散在し時代的にも断続的であり、火葬墓群は一つのまとまりを示し、同時的な存在を示しており、土葬墓第１類（中世中期中）── 火葬墓（中世中期末）── 土葬墓第３類（近世中期）という変遷が見られる訳である。このような例を他に求めれば岩手県江刺郡大里村所在の薬師堂山墳墓が（註５）ある。この古墓群は、山頂の南西斜面に４基の方形マウンドがあり、火葬墓と土葬墓が認められ、火葬墓から永楽通宝、土葬墓から金属小片が出土したのみで、他に副葬品が認められず、この点本例と類似している。調査者はこれを中世の造営としているが本例も中世中葉から近世にかけて土葬墓 ── 火葬墓 ── 土葬墓という変遷が見られる点注意しなければならない。このような葬制の時代的変遷は何にもとづくものであろうか。この追求は、地域の歴史的背景の追求によって究明されるべきである。例えば土葬はわが国における先史時代からの現在もなお行われている土俗的な要素の強い葬制であり、火葬は七世紀初頭に僧道照によって始まるように、仏教の影響下に形成された葬法である。本例火葬墓の示す中世中葉における土葬から火葬への変化は、恐らく宗派の変化にもとづくものであろうと思われる。近代都市を除いて火葬の風習を強く示す地域は、浄土真宗の布教されている地域である。前述金井喜久一郎氏報文によれば、この地の名称が示すように、中世開基の安源寺（曹洞宗）が存在し、室町時代末には、関東争乱を逃れて浄土真宗本聖寺がこの地に遷り、やはり領主間の争闘、交代を縫ってその被護をうけ、最後に安源寺丘陵の北西、牛出地籍に寺を置いたといわれる。この間に門徒の拡大、宗旨の布教が行われたことは想像するに難くない。本墓地群がこれら中世終末の宗教集団の活動など社会的様相のもとに形成されたであろうことはいうまでもないが、文献史学的にもこの背景を明らかにする端著となるであろう。記して後考を待ちたい。

第2に、この墓地群に見られる庶民性についてであるが、副葬品の乏しい点、埋葬形式の簡素な点等著しく当時の庶民生活の内容を反映しているものと考えられる。加えて葬制についても、土葬墓群にそれぞれ変化が認められる。これらの追求は、土俗的、民俗学的な面から追求が可能になるであろう。

埋葬に伴う儀礼には、宗教的な規制よりも土俗的、慣習的な規制が著しく強い（註6）とされている。この点本例に伴う具体的な内容が民俗学的に明らかにされれば幸甚である。

また、中世には、庶民的仏教の普及により、板碑などが盛行するが、本例には全く出土していない。上野国、武蔵国、あるいは北陸地域等著しい板碑の盛行が見られるが、信濃の地域はどうであったろうか。特に中世末には信仰の対象がその初期にくらべ変化混乱の様相を示す（註7）という、本例がその中において一般的様相を示すかどうかも未解決である。また火葬墓には、両墓制の疑いがあるが、民俗学的な調査はまだ行われていない。

このように本墓地群は幾多の興味ある問題解決の端著となる性格をもつものであるから、この点についても今後に期待したい。

第3に、この古墳墓の立地についてである。「延徳たんぼ」とよばれる広い冲積面を望む丘陵の斜面に営まれた中世の墓地群は、遺体生前の住居の存在を必然的に追求させしめるのであるが、当時の集落はどこに立地していたのであろうか。領地を統括する領主の居城は別として、水稲耕作を営む庶民の生活立地は、少くともこの墓地より下方の冲積面に近い場所であったことは想像に難くない。果してそうであるとするならば、この墓地の位置は、少くとも水田耕作地帯を一望のもとに眺めることのでき得る高所であり、いわゆる「山上他界」としての立地をもつことになるのである。

火葬墓が複葬的性格をもつものであろうことは、前に述べたが、いわゆる両墓的性格の中で「埋め墓」としての性格をもつのもこの位置は恰好の立地をもっている。この地点を平行に直下を走る改修前の県道中野豊野線開設工事の折、江戸時代の墓地が多数発見されたという。これら江戸時代墓地群を営んだ集落も、恐らく、冲積面に所在したいわゆる新田集落の一つであったろう。中世から近世にかけての農耕集落の位置も文献学的に解明できることであろう。そしてその生活の中に営まれた葬送儀礼の風習も民俗学的に追求し得る日の近いことを期待しつつ、二、三の問題を指摘して考察に代える次第である。

（林　茂樹）

註1.　赤星直忠「神奈川県鎌倉市浄光明寺境内やぐら」日本考古学年報11所収。昭和33年

註2.　石田茂作他「戸隠総合調査報告書」信濃毎日新聞　未刊

註3.　寺村光晴「新潟県中頸城郡金谷墳墓」日本考古学年報13所収　昭和35年

註4.　長野県刀剣登録審査委員岡田久国氏の教示に依る。

註5.　桜井清彦「永楽通宝を出土した岩手県江刺郡玉里村薬師堂山の墳墓調査概報」考古学雑誌38の1所収

註6.　桜井徳太郎「在来信仰と仏教信仰の接触変容」日本歴史考究所収　昭和39年

註7.　千々和彦「中世諸地域における諸仏信仰の比率」日本歴史考究所収　昭和39年

第11節　土葬・火葬墓出土人骨

中野市教育委員会からの人骨出土の報に接し、1966年6月2日私どもは発掘作業末期に近い安源寺遺跡をたずねた。

(1)　1号土葬墓人骨発掘　墓址群の西どなりの一段と掘り下げられた位置に、頭骨がわずかながら姿をみせていた。注意ぶかく掘り下げたところ、左側を上にして、西向きの頭骨があらわれた。すなわち土葬墓人骨第1号である。水気を多くふくむ粘土質の土壌の中に埋没した骨の保存状況は極度に悪く、ただちにはらはらと崩壊しそうであった。骨の腐蝕の程度はかなり進んでおり、骨片というより骨粉というべきものであった。土はかなり固く、特に頭骨内部の土は一層黒味がかっていた。それで、竹べらをもって丁度彫刻でもするような気持で精細に外側の土を剝離していったところ、かなり原形を保った土塊頭骨が浮き出てきた。一見するとかなり完全な頭骨が発掘されたかのようにみえたかもしれない。歯列はとくにみごとに残存していた。それは丁度マレクラ島の似顔頭骨（ニューヘブリデス諸島のマレクラ島では、死後近親者の頭骨に土等で肉づけをする風習があった）のようなおもむきがあった。しかし、骨は薄くなって、その上に金箔のように部分的に付着しているにすぎなかった。充分観察し、写真等に記録した上で、一挙に土塊頭骨を用意の紙袋にそのままの形でおさめ、松本の信州大学医学部第二解剖学教室に運んだ。

1号土葬墓人骨には、頭骨のほかに下肢骨が出土した。それは頭骨より約50cmほど南に位置していた。体幹部や上肢その他の骨は発見できなかったが、これらから屈葬位と想像してもかまわないであろう。骨には土がかたく付着し、むりに剝がすと骨そのものを破壊するおそれがあったので、くわしく同定しなかったが、のちに骨洗いをしたところ、左右の大腿骨の上部であった。

頭骨のすぐ下から9枚の古銭が出土した。開元通宝、元宝通宝、景徳元宝、元隆元宝、景定元宝各1枚、元祐通宝、淳熙元宝各2枚である。金井汲次氏によれば、景定元宝（1260年）がもっとも新しく、その点から鎌倉時代後期から足利時代と考えられるということである。

(2)　水洗いと復元　帰室後、骨の崩壊をおそれて、かなりの期間空気中にさらして自然乾燥させ、その後静かに水につけ、丁寧に水洗いした。しかし、その結果は無残であった。わずかな骨片、それも腐蝕されて軽くなった小骨片が200片ほどえられたにすぎなかった。

70～80時間ほど骨つぎに専心し、復原をはかったが、完全頭骨をつくるには質・量ともにあまりに貧弱な材料であった。頭骨片のうち主なものとして次のものがある。

前頭骨の眉間付近、後頭骨片、右側頭骨（錐体、外耳孔を中心とした部分）、右錐体、左右上顎骨の口蓋部、眼窩縁小片、下顎骨（前部、下顎枝の大部分を欠く）。そのほか1cm²にみたない小片は多数あり、それらは頭骨各部に属するが、たがいに隣接することはない。歯は17本も保存されていた（右上顎：第1小臼歯、第1～3大臼歯。左上顎：中切歯をのぞくすべて。右下顎：両小臼歯、第2大臼歯、中または側切歯。左下顎：犬歯、第1小臼歯、第2大臼歯）。

頭骨とともに軸椎、頸椎の小破片も出土した。右大腿骨は小転子をふくむ10cmの長さのもので、後面のみであり、左のそれは小転子の直下から10cmの竹筒状の断片であった。

(4) 人骨の特徴　以上のように不完全であるが、本人骨は大腿骨の強壮なこと、乳様突起の突出、土塊頭骨における前頭部の形状から、男性と判定される。

年令は、現場では50才前後と推定したが、その後精査したところ、歯牙の咬耗はそれほど著しくなかった。智歯の根は形成されており、20才代はこえており、また時代をあわせ考えても30才代後半くらいと推測するのが妥当であろう。わずかに残るいくつかの縫合の状態からみても、この年令見当と考えられる。

頭骨の厚さはあまり厚くなく、下顎骨もそれほど強壮ではないが、大腿骨はかなり厚く殿筋粗面、恥骨筋線は強く発達しており、特に内側広筋の付着縁は顕著である。上骨体断面示数は26㎜／33㎜＝78.8であって、扁平大腿骨plafymerに属する。このことから下肢筋の発達が想像される。

歯には禹歯がみとめられる。その程度を示すと、C_2（禹蝕が象牙質におよぶもの）：上顎右第1、左第3大臼歯、C_1（エナメル質のみにとどまるもの）：上顎右第3、左第1、2大臼歯であって、歯髄に達する（C_3）以上のものはない。一般に上顎歯より下顎歯の方が禹歯罹患率が高いが、ここでは下顎歯には禹歯はみられぬ。下顎歯があまり残存せぬためであろうか。佐倉朔によると禹歯は時代とともに出現率が増え、鎌倉時代では一人平均2.1本、室町時代では4.3本という。残存数から考えて本人骨はこれらの時代よりやゝ多いということができる。食生活と関連して考えれば面白いことである。

右上顎第1大臼歯は咬合面が大きくえぐられて、その部分に禹歯あとがみられるのは、対応する下顎大臼歯との咬合の不正によるものであろう。

以上1号土葬墓の人骨についていささかながら知れるところを記した。約700年の間、土中にねむった後再び土塊頭骨として生前のおもかげを伝えるかのように見えたが、日の目をみること僅か1時間あまり、研究室におくられてからは、僅かな頭骨片と化してしまった。それは、なにか蜉蝣の命をおもわせるかもしれない。

(4) 火葬骨　火葬骨については第1号から12号まで観察した。そのうち、大部分は骨洗いをしてみたが、12号が肋骨のみであるのを除いて他は量の多寡はあれ、すべて全身の骨から成っており、それぞれ1個体分と考えられる。

本稿をまとめるにあたり、山崎裕、轟朝五、田中実の3氏から歯学上重要な教示をえた。記して感謝する。

（香原志勢・中村登流・西沢寿晃）

第 4 章　結　び

今次の緊急発掘調査実施にあたっては、県当局ならびに中野建設事務の破格の御懇情を賜わり、また、地域の方々の御協力と御支援をいただき、所期の目的を達した。その間ともに物心両面に亘って御援助を受けた。

調査期間は5月27日から6月10日までとしたが、遺構・遺物の検出があまりにも多く、ついに日延べの止むなきに至り、当局へ延長を依頼したところ、快く承認していただいた。その上、工事着手直前まで残余の地区の試掘を許可され、最後の最後まで御協力を賜わった。これ一重に埋蔵文化財に対する深い御理解と愛護精神の発露であって、記して謝意を表する次第である。

既調査・分布調査等によって我々の予想は弥生時代・土師期の住居址、各数戸と遺物その他の検出を予想した。しかし、実際には時間的に空間的に幅広い一大複合遺跡で調査員をしばしば戸迷わせた。上は先土器末葉から降っては近世に亘るものであった。

緊急発掘調査の結果、次の如き成果を得た。

(1) 先土器時代（後期）　石器・石屑（少）

(2) 縄文式時代（前・中期）　土器・石器・土製品

(3) 弥生式時代（中・後期）　土器・石器・土製品（多）　土坑墓址（24）

(4) 古　　代　トンネル式無段登窯（1）　須恵器・布目瓦片（少）・土師期住居址（竈・炉）土器

(5) 中　　世　土葬墓（2）人骨・古銭（12）・釘（10）・火葬墓（12）人骨・擂鉢片

(6) 近　　世　土葬墓（2）人骨・小柄・古銭（寛永通宝）・鍔片

以上はその概要であるが、詳細は前述の通りで、現時点において考察も加えた。

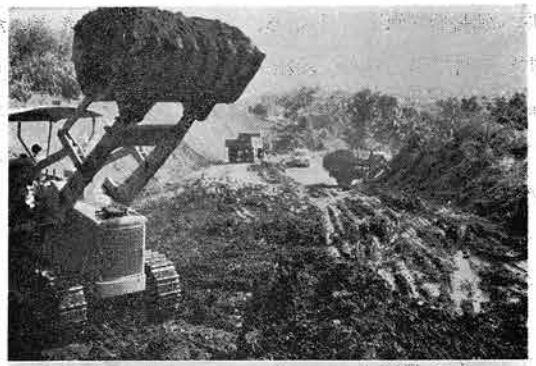
調査は限られた経費と日時の中で、これを克服すべく、尽せるだけの手を尽し、記録保存の万全を期した。しかし、折からの田植時に遭遇し作業員の確保は困難を極め万全であったとは申し難い点もあった。深く反省しているところである。

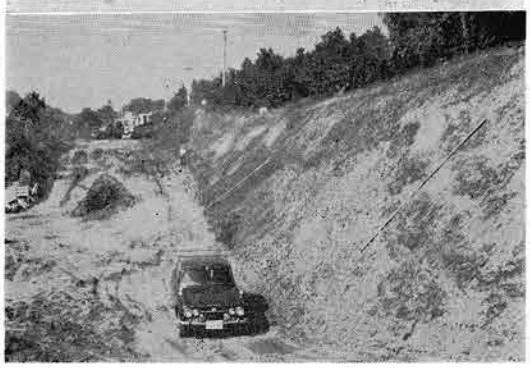
当遺跡は我々の調査終了後、旬日を待たず県道の付替工事が開始され、大型のブルトーザー・ダンプカーは唸ってその偉力を発揮し遺物の包含層は消滅してしまった。其の後も工事は続けられ、遺跡の地表下およそ8 mは大きな切り通しと変り果ててしまった。我々はスコップ・移植ゴテ・竹ベラ等で精査した作業に比して、変貌のあまりにも著しいのに驚愕するとともに、調査に従事した者として転々惜寥の感慨一入なるものがあった。我々に歴史の1コマ1コマを物語った遺跡は永劫に煙滅し去ったのである。（第61図）

しかし安源寺遺跡は極めて広範囲に亘っている。今回の調査はその30分の1にも及ばない地域である。今後の発掘調査によって、その全貌は把握できると思う。究明の前途は険しく厳しいものばかりで、すべて今後に待たなければならない。

こゝに調査が完了し、一応の整理が終った機会に、各調査員が分担執筆して報告書に纒め、上梓する運びとなった。上述の如く今後は更に調査を重ねることによって資料を分析し、検討することによって遺漏なきを期したい。

（金井汲次）



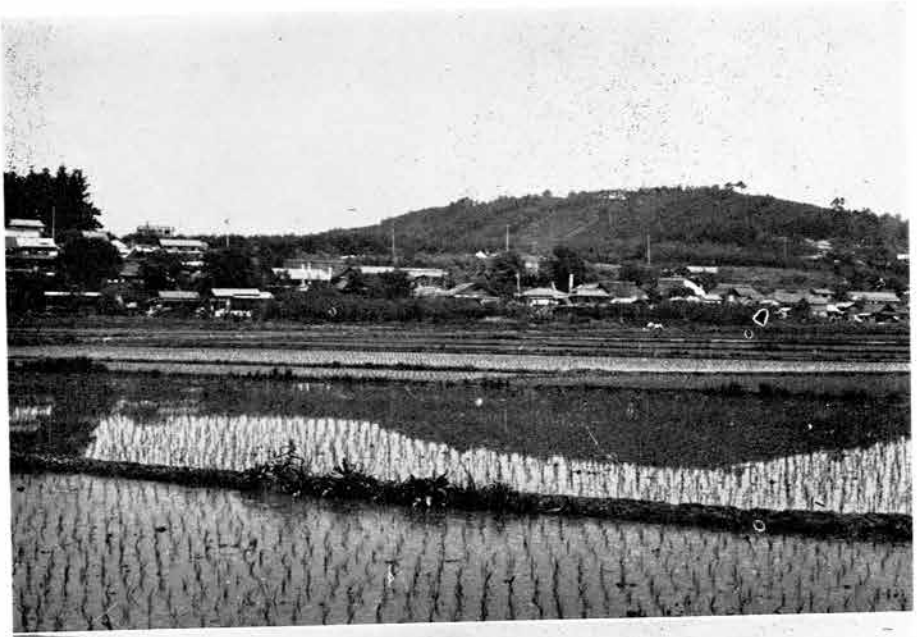


第61図　調査直後の遺跡破壊状況

図版第1　安源寺遺跡周辺（航空写真）

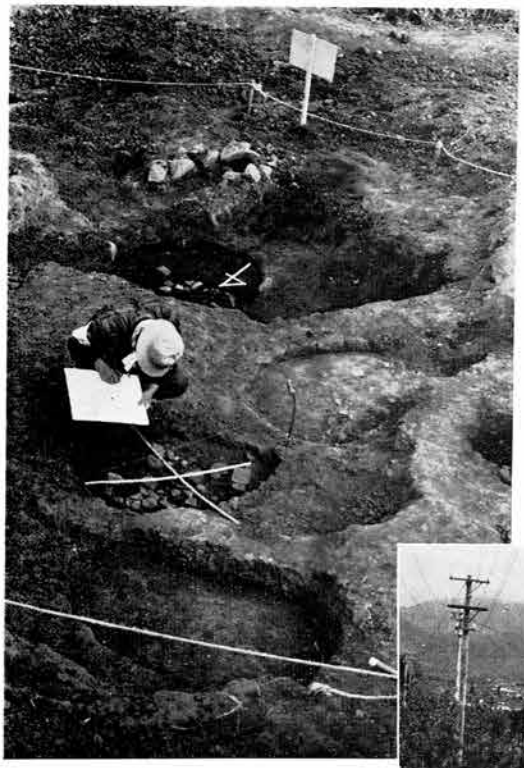
図版第2

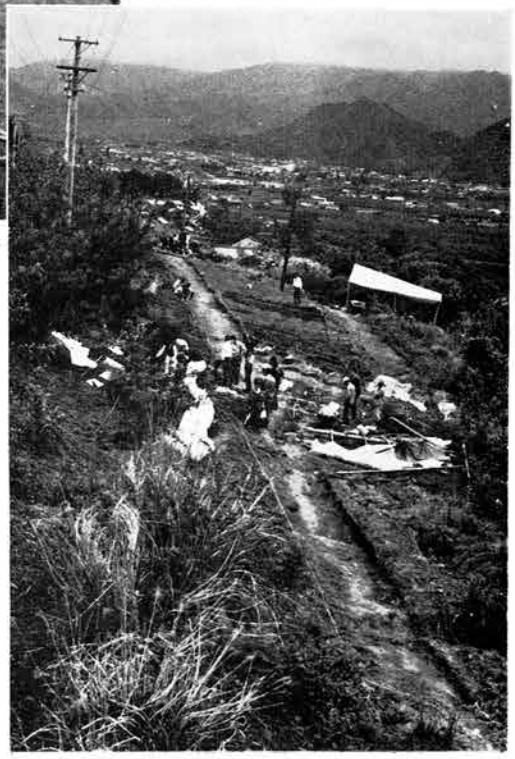
（上）遺跡遠景



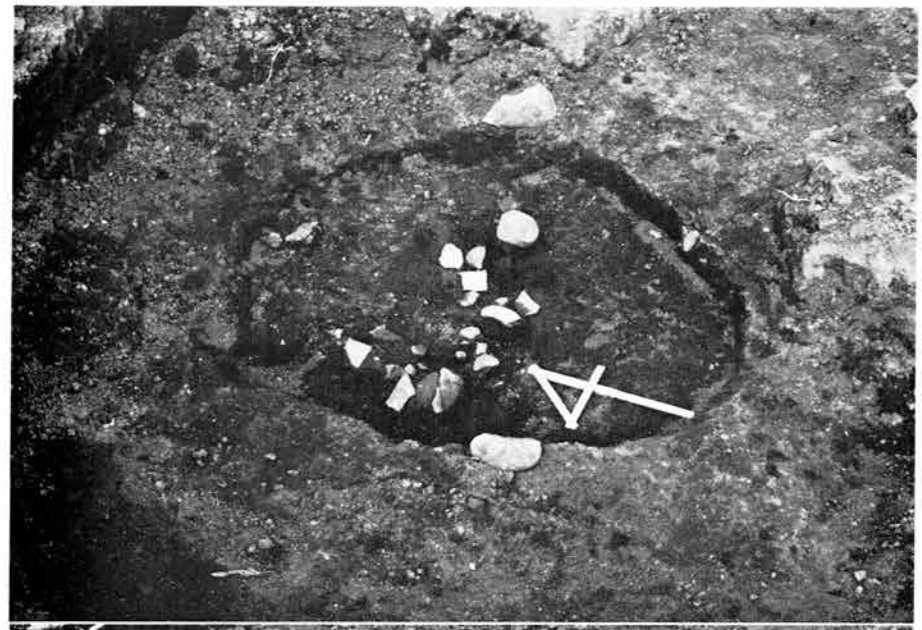
（下）遺跡よりの眺望

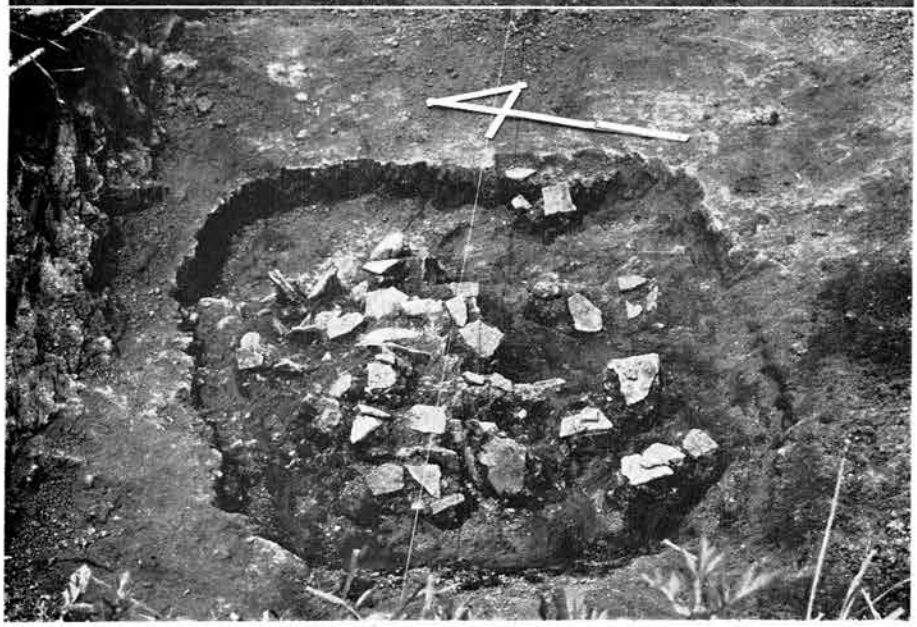
図版第3　（上）発掘状況　（下）同





図版第4　（上）弥生式第6号土坑墓　（下）同第7号土坑墓





図版第5　（上）弥生式第9号土坑墓　（下）同遺物出土状態

図版第6　（上）Eトレンチ発見弥生式土坑墓群　（下）同遺物出土状態

「安源寺」

昭和42年3月20日印刷
昭和42年3月31日発行

発行者　中野市教育委員会
印刷所　双　葉　印　刷

〔非　売　品〕